
ロード&ナイト

COM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロード&ナイト

【ΖΖΠード】

Ζ9284U

【作者名】

COM

【あらすじ】

ゲーム好きの高校生、藍澤和輝の元にある口、一つのダンボールが届く。

そのダンボールに書かれていたタイトルは『～ロード&ナイト～』。彼はすぐにそのダンボールの中身であるゲームを取り、早速プレイするが、なんとゲームの主人公が喋りかけてきた。そんな不思議なゲームキャラ、ザックと藍澤和輝が織り成す

RPG風ファンタジーアドベンチャー。

ロード&ナイト プロローグ

～ロード&ナイト～

まえおき

みんなはゲームをしたことがあるだろうか。

俺はその中でもRPGというジャンルが好きだ。

剣と剣が交じり合って火花を散らす、聞いたことも無いような魔法を唱える、

この世界の何処にも居ないような魔物や、獣とも人とも違つ姿をした亜人の類、

魔王と命懸けで戦う勇者…つまり、ファンタジーの世界がこの上なく好きだ。

そして、今まさに魔王に斬りかかるとしている俺を、

「藍澤！…貴様この大事な時期に教室でうたた寝か…」

といふ声とともにもう一人の魔王に叩き起された。

俺の名前は藍澤 和輝、18、要するに受験生だ。

趣味はゲーム、特技もゲーム、成績は中の上位で運動もできる、が部活には

入っていない。その理由はただ一つ。ゲームをする時間が減るからだ。

もちろん授業に対するやる気は殆ど無いが、テストの点だけは良いという状況

が続いていた。そんなことをしていれば、先生にただやる気の無い奴だとばれてしまい、目を付けられてしまった。うちのクラスの担任はこれでもかと言つ

ほどの熱血教師。短髪で、一度見たら脳裏から離れないような濃い顔、さらに、年中ポロシャツ、短パンと見てるだけで気温が上がりそうな服装…まあ嫌いで

はないが、出来るくせに何も努力しない。と俺のことを気に掛けているようだが、いつもとしてはいい迷惑だ。起きると田の前には担任の暑苦しい顔…本当に最高の田覚めだよ。そして、かぶせる様に

「藍澤、お前今ままなら進みたい大学の試験落ちるや…」と言われたので。

「特に無いですよ。」

と答えると、発田の出席簿アタックを貰つた。もうおなじみの光景で周りのク

ラスマイトもクスクス笑つてはいる。放課後、後ろから「和輝、お前また寝てたのか。」

と笑いながら真志が声をかけてきた。真志は俺のクラスメイトで親友。もう、俺には切つても切れない存在だ。

「ちげーよ、大冒険だ。」

と冗談を返すと。

「魔王様の降臨で即終了つてか。」

と乗つてくれた。

「本当に普通、出席簿で殴るか? しかも一回、一回は角だぜ? 頭割れるつて。」

と頭を擦りながら言つてたら真志のやつも

「さすがにあればまずいと思うぜ?」

と普通の返答。酷いもんだ、そこは愚痴なんだから乗れよと言いたかつたがや

つぱりやめた。実際、正論だ。授業中に寝てるほうが悪いが、睡魔

のやつには
勝てない。

もし、もしもだ、この世界が剣で、魔法で、魔物や魔人、亜人そう
いったもの
であふれたファンタジーの世界ならざれほど良いことだらう。何度も
と無く願つ
ていた…いつも…だが、現実は甘くは無い。そんなことでおじや話
の世界が広
がつたら世界は混沌そのものだ。

それでも…もし、それでも違う世界が在るのなら…

そう思いながら俺は、一刻と暗くなるいつも通り慣れた道を、家
をめざして

とぼとぼと帰つていった。

俺は今でも忘れたことがない。その日から巻き起こる存在しないは
ずの物語が、
俺を知らない世界へとこなつたことを。決して…

ロード&ナイト 第一章

「ロード&ナイト」

第1章 名前を入力してください

「ただいま。」

といつても家に帰り着くのは自分が最初の1人。もちろん返事は無いが帰り着いたら言わないとなんかすつきりしないのでとりあえずいつも言つて

いる。家は

何処にでもありそうな住宅街の一軒家、父親が長年の夢だったと3年前にローン

を組んで立てた。詳しくは聞いたことは無いが、父親の台詞からするとそんな家を買えるほど結構な重鎮になっているらしい。母親は専業主婦。ちゅうどこ

のぐらいの時間は夕食の買出しに行つているため留守になる。兄弟は弟が1人、

名前は拓也。俺と違い真面目で勉強熱心でいつも学校が終わるとそのまま塾に行き、終わつてから帰つてくるので帰宅は9時ぐらいだ。そしてし

んと静まり返つた家に最初の1人、つまり自分が戻つてきたわけだ。とりあえず、

荷物を置く

ため二階の自分の部屋をめざす。がインター ホンの音で呼び止められてしまつた。

『こんな時間に誰だ?』

と思いながらも玄関の扉を開けるとそこには少し大きめの荷物を

持った宅配

業者がいた。そして、その男は

「藍澤 和輝さんのお宅で間違いないでしょ？」

と尋ねてきたので、

「ああ、はい。」

と間の抜けた返事をしてしまった。別に宅配業者が来ることは珍しくない。む

しろ当たり前のことだが、その若干若いバイトと思われる男性は、間違いない

藍澤「和輝」といった。俺はその「」とびっくりしていた。親宛ではなく、自分

宛の宅急便であるということに。そのままその男性は

「ここにサインを頂いてもいいでしょ？」

と続けてきた。結局、自分は言われるままサインをし、男性はサインを貰つた

のを確認するとその荷物を俺に渡して

「では、失礼します。」

と言い、事務的に挨拶をし帰つていった。あまりにも急な事だったのですこし

ポカンとしていたが、その自分宛の荷物が気になつたので送り手の名前を真つ

先に確認した。なぜなら、ひとつだけ心当たりがあるからだ。

そして、送り手の名前を確認した俺は狂喜乱舞した。

『？パワー＆ブレイン』

なぜなら、この会社はゲーム好きなら誰しもが知っている超有名ゲーム会社で、

この会社は市場には出さないネット販売オンラインのソフトを売っている。ゲー

ム好きの中でも、相当のマニアなら知っている激レアソフトが俺の元に届いたことになる。ちなみに、販売するソフトは、ジャンルのみを明かしてタイトル

を絶対に教えない。そつやつて新作が出たのをこの会社のファンにしか知らせないようにしている。しかし、なんでなんだろうな…まあ、いいか。

俺はその学生カバンより一回り大きい箱とカバンを持ち上げ、早足で階段を駆け上がり、2階の自分の部屋に飛び込むなりカバンを投げ捨て。そ

の段ボール箱に手をかけていた。まだ開けてすらいないのに期待と興奮で鼓動が速くなり、

手が汗ばんでいた。ガムテープを乱雑に剥がし、いそいそと蓋を開けるとそこにはまさに俺が期待していた物が堂々と収納されていた。

『ロード&ナイト』と書かれた説明書らしきものが一番最初に目に飛び込んできた。もう興奮で今にも心臓が破裂しそうだった。中に入っているものを取り

出すと、分厚い説明書、マイク付きのヘッドフォンらしきものが一つ、三色ケ

ーブル、ACアダプター、そしてゲーム機本体が出てきた。

本体? たしかソフトのはずなのに…

そして、肝心のゲームソフトが入って無かつた。とりあえず、組み立ててテレビに繋いだが、そこでもう一つ気が付く。コントローラーも無い。

それどころか本体のほうはコントローラーを差し込む端子が無い。困ったことにゲームを

始める前にどうしたら良いか、分からなくなってしまった。いつもなら説明書など見ないでゲームを始める俺だが、今回ばかりはそういうかなかつた。渋々

説明書に目を通したが、やはり説明書といつものはどうしても面倒だ。活字がまるで兵隊のようにビビシッと整列したページの群れ。赤字で書かれたどうでも

いい注意事項。そして、ただの説明書でさえ読む気が失せるのに、この説明書

ときたら辞典といい勝負が出来るのではないか、といつほどのやたらと分厚い。

ここまでくると、わざわざ必ず説明書を読んでからプレイする真面目なプレイ

ヤーでも投げ捨てそうだ。しかし、これを読まなければゲームを起動すること

すら出来ない。まさに生き地獄だが、俺は絶対この説明書の全てに眼を通した

りはない。理由はただ一つ、面倒だからだ。すぐさま目次を開き、必要な情報

報のページだけを読んでいった。するとその説明書の操作方法のところには、

いつも書いてあつた。

「このゲームは脳波を付属のアイカムでキャッチし、ゲームに反映させるという

最新技術を用いています。その為、全ての操作は脳波によって行います。」

と書かれていた。

『脳波か…なんかテレビで話題になつてたな。』と思いつつ、

本来はゲームのためではなく、体が不自由な人ための技術らしいが、

パワー &

ブレインがそれをゲームに起用していた事に驚いた、と同時に感心した。この

コントローラーならそういう人や、今まで操作が難しくてゲームというものを触らなかつた人も取つ付きやすいだろ。とまあ、そのことは置いといて。

操作方法がせつかく分かつたのに「プレイしないのはもつたいない」とりあえず

ゲームを起動し、ニューゲームと頭の中で想像していると、画面のカーソルがニューゲームを選択し、決定してくれた。思つていた程苦もなく動かせたので安心した。すると画面が進み、とある画面が映し出された。

〔名前を入力してください〕

どうやら名前入力画面のようだ。早速、名前を入力しようと思つたがその必要は無かつた。なぜなら、最初から入力されている主人公の名前は「ザック」だつ

たからだ。何故、名前を変えなかつたのか。それは、俺はゲームの中の主人公の名前を変えられる場合、必ずザックにしていたからだ。理由は、クラスで

「あいざわくん」と呼ばれた時、ふと「あいざわくん」の「わ」の音が聞こえ

ず、「ざっくくん」と聞こえた時にザックといつ言葉の響きが気に入り、俺が前

プレイしてたゲームの主人公の勇者の名前をザックとしたことが始

まりだった。

自分で中でザックという存在はヒーローであり、同時に、自分が出来ないことを代わりにしてくれるような、そんな理想の存在だった。そのため、元々入つ

ていた主人公の名をそのまま使わせてもらつことにした。その主人公の元の名

前が、ザックというだけでとても親近感が沸いた。

そして、頭の中で決定と念じ、オープニングの画面へと進んだが、俺はオープニングも基本的には見ないため、スキップすることにした。理由は同じ、面倒だからだ。

早送りで、一気に物語の初めへ、最初のやり取りも飛ばしながら映像だけを見て、判断しようとしていたが、予想以上にやり取りが早く、内容はほとんど理解できていなかつた。ある程度すると、主人公と思しき青年が、

「「ザック」それでは行つて来ます。」

といい、村人たちから見送られていた。その中の老人が

「「村長」必ず魔王を倒してくるのじや。ただし、無理はせんよう

に。」

とザックに語りかけていた。

ちょっと失敗したかもしれない。最初のやり取りでもう、何故勇者に選ばれたかの説明があつたようで、既にザックは勇者として今まさに旅立とうとしていた。

そして、彼はこちらに振り返るとこちらを見て、

「「ザック」それじゃあ、よろしくなー。」

と喋りかけてきたのである。俺は、いったい何が起きたのか状況を飲み込めず、ただポカんと画面のやいつを見つめていた。喋りかけてきた…のか？

「「ザック」お~い。どうしたんだよ。早く行こうぜー。」

いや、そんなはずは無い。気のせいだ。

俺は、まだ状況が理解できていない。ところより、理解したくなかった。が、

そいつは俺のそんな思いを無視して、もう一度喋りかけてきた。

「「ザック」なに?ずっと見つめて。俺、顔なんか付いてる?」

こいつしかも俺のこと見えてるのか…

理解したくないが、これが新技術のたまものなのだろう。そのテレビ画面に映るザックは色々とゲームの常識を無視しているが、俺はそう思い込むことにじめた。

た。ザックには俺のことが見えており、さらりと、俺に向かって喋りかけてきている。とりあえず、「い、いや……別に……。」と答えた。まだ動搖しているのがばれたのか、そい

つは、「「ザック」何びっくりしてんの?もしかして説明書読んでないの?」

ギクッとした。というか何故、説明書を読んでいないことがばれたんだ?

「「ザック」あ、図星か。駄目だら、ちゃんと読まないと。」

さらにゲームの主人公に駄目だしまで…ゲームをやってて初めて悲しくなった。

もちろん、違う意味で。

「「ザック」とりあえず読んどけよ。後々面倒になる前にさ。」

「ああ、わかつたよ。」何故、ゲーム内のキャラから指示されてるんだ？普通、逆じゃないのか？とは思いつつも、もつ一度説明書を読み返すこととした。す

るとそこには、

『このゲーム内のキャラクターは、あなたという存在のこと気に付いています。あなたはこのゲームの主人公の君主となり、主人公である騎士ロードを導いてください。』と書かれていた。なるほど、だから何の躊躇も無く、この主人公は喋りかけてきたのか。そのまま、ほかのページも読んでいく途中、そこで俺はある項目の違和感に気がづく。

注意事項

- 1・ゲームをする時は、画面から離れてプレイしましょう。
- 2・1時間に1回、15分ほどの休憩を挟みましょう。
- 3・本ゲームをプレイする際、絶対にクリアするまでアイカムを外さないこと。

アイカムを絶対外すな？どういふことだ？注意事項に書かれているくらいだから、なにか意味はあるのだわ。が、そんなことはできない。RPGというゲームは、クリアするまでに結構な時間がかかる。要するに、この注意書きのとおり

にすると、普通の生活をアイカムを付けたまま行えと遠回しに囁か
ているよう

なもんだ。それを何故、注意書きに書いたのか…外してはいけない
理由でもある

るのか?…と、色々考えていたら

「「ザック」「おーい。まだかよ。待ちくたびれたぜ。」

とこう声に遮られた。なので

「あ、ああ悪い。待たせたな。」

と答え、すぐにゲームを再開すること

にした。もう少し、ザックを待たせてでも、その注意書きの意味を
考へるべき
だった。そうすれば、あんなことにはならなかつたはずなのに…

～ロード&ナイト～

第2章 勇者ケンちゃんが現れた

「「ザック」とりあえず理解した？」

「ああ。とつねん。」

本当にとりあえずである。急かされたせいぢぢなうとしか理解しない。

「『ガジカ』をはじめ、『約束の弓』がついで五種類だ。

目的地？俺は目的地が何処なのか知らないんだが……あ？。もしや、

——[サッケ]どうしたんだよ。一本道だろ? 何迷って……

「ザ・ワールド」の「アーティスト」が、アーティスト

「 そ う だ よ ！ オ ー ナ ー ソ ン グ も 飛 ば し た よ ！」

「一九三九年九月廿九日、日本軍がソ連領東北地方に進攻する。ソ連は日本軍の進攻を撃退するが、ソ連軍の進攻によって、ソ連領東北地方の大部分がソ連領となる。

ンを読んで

「「ヂシフ」」の外觀は、説明圖の如くである。

ブーニングぐる

つ
て
い
る。

なんで俺はゲームしながらこんな惨めな思いをしなくちゃいけないんだ？ゲー

ムのキャラから呆れられるつて、どんな拷問なんだよ。

「仕方ないだろ。面倒だつたんだから。」と言ひ訳をしてみた。が

「[ザック]そこで見てないから、今面倒な目にあつてゐるだろ?」
と言われる。くつ…悲しいことに、非の打ち所の無い正論だ。

「はいはい、すいませんでした。」

と平謝りをすると

「[ザック]仕方ない。説明しながら進もう。」

と返してきた。

何故だらう。こいつの方が俺より大人に見える…泣きてえ

「[ザック]とりあえず、今俺たちがいるのが「カマシ」「村」とい
う場所で、今現

時点の目的地は、この「コウキ・コウシ島」唯一の港町の、「クフ
オカ王国」なん
だ。」

「港? 船に乗るのか?」

と俺が聞くと、再度、呆れた顔で

「[ザック]最終目的地は、最北端にある「ホウカイ島」。その島
には、魔王城

があつて、魔王はそこにいる。最終目的は、その魔王を倒すこと。
そして、今

自分たちがいるのが南端のコウキ・コウシ島なんだ。」

よくありがちなマップ構成だ。魔王を倒すため旅をする勇者は、だ
いたい魔王

城の真反対の位置にあることが多い。なぜなら、その旅の途中で仲
間と出会つ
たり、技を身に付けたり、そもそも敵と戦つて心身ともにどんどん
ん強くなつ
ていくからだ。

「要するに、この島を出てもつと大きな大陸に行くつて事だな。」
と聞いた。すると

「「ザック」なんだ。物分り良いじゃん。これからはひやんとオーピーニングとか、

途中のムービーも見ながら進んでくれよ。」と言わせてしまった。

が、褒められたので少し嬉しい。ん?ちょっと待て。何で俺は、ゲームキャラ

に褒められて、浮かれてんだ?それに気づいて少し複雑な気持ちになつた。

「「ザック」たしか、ここからクフォカ王国までは一本道で、そんなに強い敵も

出なかつたはずだから…」

「途中の村で、武器や防具、アイテムを揃えながら進んで行きやあいいんだよ

な。」

「「ザック」その通り!」

意外といい相性だつたりする。せりやそつか、一応、俺の分身みたいなもんだからな。

「「ザック」それじゃ、クフォカ王国に向かって…」

「出発だ!」

そして、やつと俺たちの旅が始まった。

ザックの言つたとおり、道は一本道。これとこつて田を引くようなものも無い。

『最初は、弱い敵でも倒して…』

と思っていたが、そこであることが気になつた。敵はびりやつて出現するのか。

ゲーム画面の世界はまるで、実際に自分が山を歩き回つてこらぬるほど、リアルな草原や林が広がつていた。故に気になる。茂みから飛び出し

てくるのか？それとも歩き回っているのか。とわくわくしていたが、

実際は

んな可愛らしいものじゃなかつた。

突然、目の前の何も無いところに別の次元に繋がつていそうな大きな穴がぽつ

かりと開き、そこから敵が飛び出してきた。

「ちょ！…なんだこれ！…」

と、俺が驚いているとザックは冷静に

「「ザック」おつ！冒険始まつて初めての敵だ。」

と喜んでいる。

まてまてまてまて…何故、こいつはそんなに冷静なんだ？俺は心臓が破裂つき

そうなくらいじびつくりしたのに。

「「ザック」なんだあラビか。まあ、当たり前だけどな。」

その穴から出てきたのは、手乗りサイズぐらいのウサギらしき生物だった。

何でがつかりしてるんだ？俺が言つてゐる」とのほうがおかしいのか？

「「ザック」さあ、倒そうぜ！」

「いやいやいやいや…ちょっとまで…色々とまで…なんでさらつとこのラビだ

つけ？こいつが空間裂いて出てきたこと受け入れてんだよ！…」

とりあえず聞いてみた。俺の疑問は間違つてないはずだ。ところが

「「ザック」えつ！敵つてこりやつて登場するものなんじゃないの？」

あ…忘れてたよ…これ、そういうただのRPGだったね…

どうやら本当に俺が言つてることのほうがおかしかつたようだ。ザックがあま

りにも自然に話しかけてきたもんだから、これがゲームだとこりこりとを忘れていたよ…

「あー……うん……倒そう……さっさと。」

なんだか、たつた今の一瞬でどつと疲れた。いまさらゲームの常識を持つてく

ると思わなかつた。今までずっと常識を無視し続けていたくせに……

宣言通りさつさとリビを倒し、近くの村を探していった。

最初の一匹以降も、いろんな種類の魔物とちょこちょこ戦つていた。

そのため

経験値やお金も手に入れていたが、結構ダメージも貰つていたので、村で少し

休んだり、アイテムや装備を整えたかったからだ。

少しすると、小さな村が見えてきた。村の入り口の看板には、《モ

クマト村》

と書かれていた。

「しかし、いい位置にあつたな。」

「「ザック」確かに結構疲れてたしね。」

やはりゲームの中の世界といえど、長距離歩いたり、何度も戦闘すると疲れる

のか……なんか、妙にリアルだな……そういうや、お金の単位も「ゴールド」とかじやな
くて円だし……

「とりあえず宿だな。」

「「ザック」宿はいいけど……お金……ある?」

どういう意味だ?普通、この序盤のほうの宿つてのは安いのが相場だ。

「大丈夫だろ?さつきまでの戦闘で結構、金も集まつたし……」

「「ザック」だといいけど……」

宿に着いた。そこでカウンターの人に

「「ザック(フ)」一晩でいくらですか?」
と聞いたらどんでもない答えが返ってきた。

「「宿屋」お一人様、2,000円になります。」

「どんなところまでリアルなんだよ……誰が、いつ、普通に観光気分で宿泊すると言つた！馬鹿か！」このゲームは馬鹿なのか！？」

あんまりなことが起きたので、ついに突っ込んでしまつた。確かに安い。破格

の値段設定だ。だが、それは現実だから安いだけであつて、ゲームの中じや馬鹿みたいに高い。もちろん、序盤でそんな大金持つてているわけが無い。

「〔ザック（フ）〕そこをどうにかできませんか？」

駄目元で聞いてみるが

「〔宿屋〕すみませんが、こちらも商売ですので…」

当たり前か…とすると、回復が恐ろしく困難なことになる。どうするか…と悩んでいた時、ふと後ろから

「〔？？？〕ハハハ…困つてゐみたいだね。」

「〔ザック（フ）〕あ、はい。えつと…あなたは？」

振り返ると、そこには中年ぐらいの優しそうな男性が微笑みながら立つていた。

「〔クラウド〕おお、すまない。自己紹介がまだだつたね。私はクラウド、君と

同じ勇者だ。」

またびっくりさせられた。まさか、もう一人勇者がいるとは思わなかつた。

「〔ザック〕なんで勇者だつて分かつたんだ？」

ちょっと口の利き方が失礼だが、いい質問をしてくれた。何故、見ただけなのにその人が勇者なのか分かるのかとても気になる。

「〔クラウド〕簡単なことや。きみにプレイヤー表示があつたからね。」

「「ザック」プレイヤー表示？」

「「クラウド」プレイヤーが操作しているキャラには頭上に、プレイヤーと書かれているんだよ。」

そう言われ、クラウドさんの頭上を見ると、「プレイヤー」の表記が浮いていた。

そういうことか…気づかなかつたが、どうやってかは知らないがこのゲームは

オンラインに繋がつているのか。そしてプレイヤーは既、勇者のロードとなつている訳か…」ことは

「「ザック（フ）」あなたも宿に泊まれなくて困つているんですか？」

「「クラウド」ああ！忘れていたよ。ちよつと待つておくれ。」

と言い。クラウドさんはカウンターの男に

「「クラウド」すまないが、彼も正真正銘の勇者なんだ。勇者料金にしてやつてくれないか？」と切り出した。

「「宿屋」そうだったのですか…これは失礼いたしました。」

とこちらに謝つてきた。勇者料金なるものがあるのか…

「「宿屋」それでは、勇者料金でお一人様、10円です。」

安つ…勇者つていうだけでそんなに待遇がよくなるのか…

「「クラウド」ちなみに、どの店も、どの町や村のお店でも通用するから覚えておくといいよ。」

と最後に付け足した。

「「ザック（フ）」すみません。いろいろとありがとうございました。それじゃ。」

「「クラウド」会つたのも何かの縁。また会えるといいね。それじゃ。」

そういうつてクラウドさんは、宿屋を出て行つた。

その後姿は、まさに勇者そのものだった。

「「ザック」とりあえず休もうぜ。もつクタクタだよ。」

「ああ、そうだな。ゆっくり休めよ。」

そう言つたが、頭の中ではクラウドさんの後姿をもう一度思い出していた。

『俺もあんなふうになれたらな……』

そんなことを考えながら……

「ロード&ナイト」

第3章 クフオカ王国へようこそ

ゲーム画面が少しの間暗転し、そして、また宿屋の映像が映し出された。

「ザック」おはよう……」とザックの元気な声。

「宿屋」おはようございます。ゆっくり休めましたか?」

「ザック」もちろん! 最高だったよ!」

「宿屋」ありがとうございます。それではお気をつけて。」

こちらでは一瞬だったが、ゲームでは丸一日たつたようだった。暗転する前と

外の明るさが違つたり、その宿屋の食堂にいた人たちが変わつてた
りと結構、手が込んでいる。

「よお。元気そうだな。」

とまあ、普通に聞いてみたが、

「ザック」元気いっぱい、今日も朝からガンバロー!」

と返ってきた。

いくらゲームのキャラとはいえ、寝起きでここまでテンションが高
いとウザイ。

「わかつたよ。とりあえず、武器屋と道具屋行くぞ。」

「ザック」OK! レッツゴー!」

いい加減、イラッとする。もし「いつが修学旅行とかで同じ班だつたら、間違いないなく殴る。

まあ、そのうち元のテンションに戻るだりつ。とりあえず置いといて。その村

の、唯一の武器屋と道具屋によつた。さつを教えてもらつた通りに
言つと、殆
どのアイテムや武器、防具が格安で手に入った。さすが勇者でもさ
まだ。しか
し、クラウドさんにもお礼を言わなきゃならない。クラウドさんの
おかげで、
装備も充実してゐし、体力も回復できたのだから……やつぱり、かつ
こいい……

その後、王国への正確な行きかたをおじいさんに教えてもらい、村
から王国に
向けて再出発した。その道中でも魔物がありまじまに襲つてきたが、
装備も充
実しているし、レベルも上がつていたので難なく進むことができた。
しばらくすると、小高い丘を越えた向こうから、今までと比べると
とてつもな
く大きい城と町が見えてきた。その姿はまるで山を一つ切り崩して
建てたので
はないかと思つぽどに大きく、一際立つ城を中心に山裾のようこ
町が伸びて
いた。実際に見たことは無いが、いわゆる城下町といつものだらう。
「「ザック」すげえ！あれがクフオカ王国か！」
「なんだ、ザックは知つてるのかと思つてた。」
「「ザック」大人たちから話には聞いてたけど、こゝまで大きいと
は思わなかつ
たよ。」

てことは、見たのは初めてなのか。どうでこんなに田をキラキラ
させている
のか……

「「ザック」なあー早く行けーぜー。」
と、急かす。

ああ、そういうやうにこの操作は俺がやつてたんだつたな…俺が操作しないと何

もできないのに、やうやく描画していくし、いつのまにか

オープーン

グ飛ばしたくらいで） 哀れんだ田で見てきたりする。

しばらく歩くと、大きな門があり、番兵がビシッとした姿勢で両脇に立つてい

た。初めて歩く場所のため、ザックは少し落ち着きが無かつた。

番兵の前を通りた時、

「番兵A・B」 より「ナード・クフォカ王国へ…」

ザックはちょっとびっくりしていたが、番兵たちは気にせず、職務を全うして

いた。よかつたなザック、不審者扱いされなくて…

町の中に入るといわゆるかさをまじまじと実感させられた。そりそり立ち

並ぶお店や住居、街に住んでる人や、観光の人、もちろん勇者も
ちりめん田

に付くが、プレイヤーの表示のある勇者といつでない勇者がいると
ころを見る

と、プレイヤー表示の無い勇者は、新米勇者へのアドバイス役だろ
う。

しばらく街中をぶらぶらしていたが、人だかりができるところに
気づいた。

「なんだ？見世物でもやつてるのかね。」

「「ザック」行つてみよ」ゼー」と一言。キラキラと田を光らせな
がり。

田舎から出てきた子供じゃないんだから、何もそんな期待した田を
しなくとも
いいんじゃ？… つていうこやうこつ、田舎出身で俺と同じ年だった
な…

その人だかりの中心を確認しようと寄つていぐが、人が多くて見えない。

「「ザック（フ）」すみません。ちょっとだけ見せてもらつてもいいですか？」

「「勇者A」ああ、なんだお前も盗賊退治か？」

と、その場所を譲つてくれた勇者が聞いてきた。

盗賊退治？なんの「ことだ？」と思ひながらその中心を見てみると、恐らく王宮兵

士と思われるよろこに身を包んだ男が立つていた。そしてその男は「「兵士」国王陛下は今、盗賊退治の任を受けてくれる勇者を探しておられる。

見事盗賊を倒し、その盗賊の頭を捕らえたものには報奨金を払うと申しておられる。だれか退治しに行くものはいないか。」と何度も言つてゐる。

「「ザック」なあ、俺たちで退治しちゃおつぜー！」

「おいおい、冗談だろ？何でわざわざ厄介？」と首を突つ込まなくちやいけない

いんだよ。そのうち誰かが行くだろ？」

と言つたが、その時

「「勇者B」確か、このあたりで有名な盗賊団だろ？確か名前は…」

「「勇者C」黒豹盗賊団だよ。最近ついに船も盗んだらしいぞ。」

なつ！それは困る。船がなきやこの大陸から出られない。くそつ！避けれない

のか…と思つたその時、

『「こんなでかい町なのに、船が一隻しかないなんてことあるわけがない。』

と思つた。が

「「勇者B」中央大陸行きの船もその一隻しかないからな。船を返す代わりに何を要求してくるか…」

脆くも俺の考えは崩れ去る。まあ、そりだよな。ゲームなのに無視できるわけないか…

「「ザック」行こうぜ！早く！」

「分かつた分かつた。その前に準備を…」

「「ザック」兵士さん！俺行きます！」

「人の話を聞け！てゆうか、勝手に喋つてんじゃねえ！まだ準備が…」

「「兵士」おお！そりだよな！早速、国王に…」

そう言いかけた兵士の言葉を制止するよつに駆け寄り、剣を鞘^{さや}ごと抜き、鞘^{さや}で殴つた。

「「兵士」貴様！何をす…」

「「ザック（フ）」何をするじやねえだろ。何、勝手に話進めてんだよ。あ？」

ちはまだ準備できてねえつて言つてんだろう？なーにプレイヤーほつといてゲー

ムキヤラだけで話進めてんだ？あ？」

「「兵士」いや…そなたが…」

「「ザック（フ）」そなたがじやねえよ…」」いつが勝手に言つただけだよ！大体

てめえもだザック！人に話し聞けつて言つといて、てめえは人の話を聞かねえのか？あ？」

「「兵士・ザック」いや…その…ごめんなさい。」

なんか…久しぶりにぶち切れた…俺もよく覚えていないが、小一時間ほど説教

をたれていたので、今度は俺が人だかりの中心になつていた。

「とりあえず分かつたな？もう一度と俺の言つてること無視して会話進めるな

よ。」

「〔兵士・ザック〕はい…」

説教をしてふと我に返る。部屋に置いてある時計に手を向けると、もう9時にな
りかけていた。

「もうこんな時間が…」

そういえばおかしい。もつ母親は帰ってきてる時間なのに、物音が
聞こえない。

腹も減つてきていたので一旦、リビングを見に行こうと思いつい、アイ
カムを外そ
うとした時、きつぎりのところザックが
「〔ザック〕お、おい。アイカムは外すなよ?」と心配やうな声を
出した。

「大丈夫だよ。リビング見に行くだけだから。」

そいつてアイカムを外し、階段を下りてリビングへ…といろがす
ぐその異変

に気づく。リビングの電気がついていない。部屋の電気をつけると、
机の上に

メモと千円札が置いてあった。メモには

「 和輝へ

お母さんちよつと昔の友人と食事に言つてくるわね。
なるだけ早く帰つてくるから、お弁当買つて食べといてね。

ごめんね。

拓也の分も買つといてね。

P・S

お母

「

と書いてあった。

「そういうことか、仕方が無い。」

と呟いて机の上の千円札を取り、外出の準備をした。家に帰つてすぐゲームを

始めたので、まだ制服のままだった。急いで着替え、財布に千円札を入れ、出

かけようとしたが、その前にテレビの小つむさいのに事情を説明しようとしないと

帰つてきた時に、いろいろ言われそうなので、

「悪い、ちょっと買い物行つてくるから待つてくれ。」

とだけ言つて、足早に部屋を出た。最後にあいつが言つたことが気にならるが、

多分、聞き間違いだらう。普通、「死ぬなよ…」なんて言わんだろう。少し不安にはなつたが、そのまま自分がよく行くコンビニへダッシュで行き、

俺と弟の好きな弁当を買い、ゆつくり帰つていた。

いつもならこの時間でも人が多い通りなのに、今日は何故か人に会わなかつた。

街灯の少ない住宅の裏道、ちょうど街灯の明かりが届かない明かりと明かりの

間にさしかかつた時、《ソレ》は音もなく俺の前に現れた。

「ロード&ナイト」

第4章 トカゲ男が現れた

最初はソレがなんだか分からなかつた。ただ闇の中に何かがある。それが分か
る程度だつたが、次第に目も慣れ、そこにいるものの正体がやつと
分かつてき

た。と同時に、恐怖で俺の全てが支配された。

そこには闇の中に薄く浮かぶシルエット、ただの大きな男などです
ますことの
できないサイズ、優に2メートルは超えている。人ではありえない
サイズだつ

たソレは、ゆっくりとこちらへ近づいてくる。いや、正確には分か
つていな

がそんな気がした。もひ、何も考えられない。俺は、反対の方向へ
走り出そう

としだが、その大きな何かは、疾風の「」ときスピードで回り込んで
きた。と同

時に、左腕に痛みが走る。びつやら腕を引摺かれたようだ。もう、
人として在

り得ない。そんなこと出来る筈が無い。在り得るとしたら、そこに
立つてゐる

のは…トカゲ男…

『ああ、俺、ゲームのやりすぎで頭がおかしくなつたか、でなきや
ゲームと現

実が混同したしたか…』

もうそんなことしか思い浮かばない。

巨体、鋭利な爪、人の瞳とは違つ縦長の眼球、どんなに考え直しても当てはま

るもののが一つしかない。もう、正常な考えは思い浮かばない。

『そつか…ゲームなのか…ゲーム画面か…ならポーズをかけばいいんだ。』

そう思い立つた瞬間、そいつは襲い掛かってきた。さすがに、次襲われたら死

ぬ！ そう感じ取り、

『ええい！ もうどうにでもなれ！』

そう思い、心の奥底に隠れていた勇気を呼び起しにして、こう叫んだ。

「ポーズ…！」

その途端、さつきまで襲いかかろうとしてたそいつは、ピタリと動きを止めた。

生物的にではなく、ビデオを一時停止したようだ。

『まさか…冗談のつもりだったのに…しかし、今なら逃げ出せる。』

『…と思つたが、足が動かない。足どころか手や首も動かない。

『…そつか…そういうやポーズかけたら誰も動けないよな…』

ポーズをかけられたおかげで少し冷静になつた。しかし…どうするか

…また振り

出しに戻つたわけだ。一旦ポーズをとつて…いや駄目だ。もう襲いかかろうと

していいるそいつの一撃がかわせる自信が無い。といつよつ、さつきの一撃で左腕にできた小さな引っ搔き傷が、精神的に堪えていた。

『どうする…助けを呼ぶか？』

ポーズをとくために、口だけは動く。といつか動かなきや一生このままだ。し

かし、普通の人間がこの状況を見て、すぐに俺を助けよつと思つだろつか…否、

恐怖でじうじよつもできなくなる。俺もそうだつたよつ』。

『くそつ、じうする…じつする…じうする…』

もつ、一か八かポーズをとつとしたその時、

「何やつてんの？兄貴。」

これほどまでに弟の声が、嬉しく感じたことはないだりつ。

「お、おお！拓也か！拓也なのか！よかつた…」

あまりにホツとしたので泣きそうになつた。だがそんな暇もない。

「拓也！俺の体引つ張つてそんまま家に帰れ！」

「は？え？何言つてんの？」

まあ、そんな反応が普通だりつ。

「いいから！早く！」

必死の思いが伝わつたのか、

「しゃーねーなー。兄貴のおふざけもここまで行くと真剣みがあるよ。」

いや、伝わつてない。

そういうつて後ろからホールドアップするよつに掴み、そのまま引きずつて移動

しだしてくれた。いつも俺の冗談に付き合つてくれるよつない弟だつたが、

このときはすぐにでも抱きつきたいぐらい弟が偉大で優しく見えた。一応言つておくが俺はホモじやない。だが、やうしたくなる気持ちは分かつて

ほしい。ほんとに怖かつたんだ…

『しかしょくこいつに驚かなかつたな…』

そう思いながら少し小さくなつたトカゲ男のシルエットを見つめていた。がし

ばらくするとその姿も見えなくなつた。

『もう大丈夫そうだな…』

そう思い、小さな声で

「ポーズ…」

と呟いた。その途端に、体の自由が利くようになった。が、体が後ろに傾いていたので、そのまま弟のほうに倒れこんでしまうそうになつた。

「拓也～～～！助かっただ～～！」結局泣いた。

「うわあ！何だよ兄貴！」

「本当にお前が来てくれなかつたらどうなつてたことか…」

「え？何？金縛りにでもあつてたの？」

と拓也は笑いながら呟つ。

「しかし、お前意外と勇氣あつたんだな。」

と聞いてみた。

「もう、ホントだよ。あんなところでへんなギャグしてん兄貴引つ張つて帰るな

んで、ほんとに勇氣がいるよ。」

「いやいやいや。まあ、それも勇氣がいるが、そういうじじやなくてあのト

カゲ男のことだよ。」

「え？何？トカゲ男？」

「いや、さつき俺の田の前にいただろ？」

すると、弟は少し考え、閃いた顔をして

「あ～演劇の練習？だつたらしく～～～パントマイマーみたいだつたよ！」

「いや、そういう意味じゃなくて…」

そこで気付く。もしかすると…

「拓也。本当に何もいなかつたか？」

俺が、真面目に聞いているのに気が付いたのか、弟も冗談を言つ顔ではなく、

真面目な顔で

「うん。何も居なかつたよ。」

そう言つた。間違いなくあれは俺にしか見えていなかつたのだ。

『もしかすると… あれは自分の恐怖が生んだ、幻覚なのか? それとも…』

そんなことを考えながら歩いていると意外と早く家に帰り着いた。

「ただいまー。」

「誰も居ないよ。ほら、お前の分の弁当。」

といつて弁当を渡す。

「兄貴、大丈夫? 顔、青ざめてるよ。」

「ああ、大丈夫だよ。疲れただけ…」

そう言つて、足早に自分の部屋に戻る。部屋に戻つて、俺は真っ先にアイカムを取つた。

「「ザック」おかえ…」

言葉を遮るように

「お前、俺が出るときなんていつてた?」

と聞く。もう一度、確認するためだ。あれが本物かどうか… そして、こいつが

そのことに関して知つていたのかどうか… それを確認するため…

「「ザック」死ぬなよって… 言つたけど…」

「そつか…」

間違いない… と言つ」とは… 幻じやなかつた。

「ザック、セーブの仕方を教えくれ。」

「「ザック」メニュー画面に…」

メニュー画面を開き、すぐにセーブ。そして最後に

「さよならだ… ザック」

そう言つた。

「「ザック」え? ちょっと待つて。それどうい…」

ザックが言い切る前に、俺は電源ボタンを押した。そして心にこう誓つた。

『 むう… いのゲームは… やらない… 明日… 電話して… 送り返す… 』

電話しても、恐らく「ひがおかしことゆつだひつ。むじか、そついつてほしい。』

「あなたが異常なのだ」

と。まだ信じられないし、信じたくもない。そういえば、このゲーム機が届いた、初めてザックが話しかけてきた時もそんなことを考えていたな

… やつぱり… 夢なんかじや… もう、それ以上は考えなかつた。腕の傷はそれほど痛まなかつたし、俺はそのまま布団に潜りこみ、泥のよつに歸つた。そして、

最後に『 これは夢。明日、起きれば何も無い、こつもビリの田々が来る。』

そつ心の中で呴いて、眠りこついた。明日になれば…』

翌日、重い瞼を開いた。きちんと寝たはずなのに、体がだるい。

無理もないか。精神的に疲れてたからな。結局、朝になつたといつのにそこにゲーム機はあるし、俺も普段着のまま眠つていた。人生、そう都合よく行くものでは無い。いまは午前7時… もう少し寝てよ… と、思つたが「和輝～朝～はんできたわよ～。」

と母の声。

仕方が無い。起きよう。階段を下りてリビングへ、そこで母が、

「おはよーーつーー昨日は「めんねー。」

「つこ…おはよー。」

えらく元気だな…母れこ…れこや、田友と食事行ってたんだったな。

「どうしたの?元気ないわね。あ、もしかして昨日、遅くまでゲームしてたで

しょーもつれそり勉強しなさこよ。」

残念ながらその逆。昨日はすぐ寝たし、ゲームは…もつれこ出したくない。

「ほりー早く食べちゃこなれこ。」

と俺を急かす。

リビングに入ると、

「おはよー。」

と、父の声。

「おはよー、兄貴。」

続いて拓也の声。

「おはよー。」

父さんはもう食べ終わり、新聞を広げていた。

拓也はまだ食事の途中。

俺も自分の指定席に座り、朝食を食べ始めた。

「和輝。どうしたんだ、その腕の傷。」

と、父さんが俺の腕をまじまじと見ながら見ながら言つ。

「ああ、これ?ちょっとこけただけだよ。」

父さんを心配させたくもなかつたし、引っ搔かれたはずなのにその

傷跡は、ほ

んとこけて擦り剥いたような小さくなつていた。

「そつか…氣をつけろよ。もうこい年なんだし…」

「分かつてゐよ。」

その答えを聞くと、父は新聞紙をたたみ、出かける準備をしだした。

「行つてくるよ。」

「気をつけて行って下さいね。」

父さんを母さんが見送る間に

「いじりそつさま…」

と弟が食べ終わって自分の部屋に駆けていった。

1人になつたのでニユースでも見ながら、飯を食べていたが、あるニユースを見た途端、俺の動きが止まつた。

「では、通津いてのニユースです。今朝、午前5時ごろ、H県、S市で会社員の、

出雲 修一さん、36歳が遺体となつて発見されました。発見した

男性は「惨殺

された人がいる」と言つていましたが、しかし、検察の結果では「刃物などに

よる鋭い切り傷ではなく、なにか強い力で引き裂かれたような痕がある」と、

猛獸などによる攻撃の可能性があるとの見解を強めていました。近隣住民の皆

さんは、不安が隠せない様子でした。それでは、次の…」

力で人間の体を引き裂くなんてことは、熊とかそんなんでも出来る筈が無い。

しかし、俺には一つだけ心当たりがある。そんなことをできる力を持つた生物

を…奴が…トカゲ男が殺した…信じたくないが、同じ市内である以上、あり

得る。顔が青ざめたのが自分でも分かる。

「自分の…せいだ…俺があいつから…「逃げた」から…」

もう、取り返しがつかない。この出雲さんは悪いが、もう一度と起動しない。

死にたくない、死にたくないんだよ!俺だって!敵討ちできるような相手じや

ない。もう、戻れよ。学校から帰つたら……すぐこでも連絡して送り返そ。

『もうこれは《ゲーム》じゃない……そんなモンじゃない。』

「行つてくる……」

「気をつけね~」

と母さんの一言が聞こえる。

でも、俺にはもう、振り返る気力も残つてなかつた。ただ……静かに学校に向かつた……でも……これで終わりじゃなかつた。いや……むしろ《今始まつた》のかもしけなかつた。

「ロード&ナイト」

第5章 セーブした場所から再開しますか?」

いつもの通学路、いつもの光景、全てがいつもと同じ…そう思つていた。

「ガサガサツ…！」

後ろの茂みが音を立てる。そこから現れたのは…猫。何処にでもいるような、

ただの野良猫。

『何をビクビクしてるんだ…もう終わったのに…』

そう思いながらも、心のどこかでは落ち着けない自分もいた。

「こりあ！きちつと挨拶せんかあ！」

といつも通りうちの担任は校門に立つて厳しい指導をしている。ここも何一つ変わりない。何一つ…

「よお和輝！おはよー！」

しかし、俺は声をかけられたのにも気付かなかつた。恥ずかしい話、本気で

考え込んでいた。

教室はいたつて普通、いつものようにクラスメイトがワイワイ騒いでいる。

何も変わらない…しかし、何故こんなことになつたのか…全く見当がつか

ない。そもそも何故、トカゲ男が現れたのか。そして何故、自分にしか見え

ていなないものが他の人を襲つたのか。そんなことを考え込んでいたら、

「…澤…藍澤…藍澤…！」

そこでハツと気つき、前を見ると、こつものよつて担任が暑苦しこ
顔で出迎えてくれたが、その顔は怒つてはいなかつた。

「藍澤、お前具合が悪いのか？顔色が悪いぞ。
かなり心配しているようだ。」

「あ、いえ、大丈夫です。ただ考え方してただけなんで…」
なんだかんだいって、担任は俺のことを心配してくれてるのは分か
つてた。

だからこそ心配させたくなかった。

「そうか…でも、気分が悪い」と思つたらすぐ口に言つんだぞ。」

「はい。」

すぐに授業は再開したが、背中をつつかれていることに気付いて振
り返つた。

すると、後ろの席の真志が心配そうに聞いてきた。

「和輝、お前ホントに大丈夫なのか？朝からそんな調子だろ？」
「そんなことないって。ちょっとと考え事してただけだよ。」
「いいや、おかしいね。朝、俺がお前に声かけたの気づいてないだ
ろ。」

「へ？まじで？」

「やつぱりな。何の悩みだよ。」

「実は…彼女でも作ろうかと…」

「彼女おお！？お前…そんなことで…」

そう言つて、がつくりと俯く真志。悪いな真志、お前にも話せないん
だ…

「内緒にしといてくれ。」

「しゃあねえなあ。そんかわり、俺にも紹介しりよ。」

「紹介料貰つけどな。」

「」の野郎！友達なんかじやねえ！

そんな冗談を話し、いつも通りの他愛ない会話に戻した。
放課後、さつさと荷物をまとめていると、真志が

「お～い和輝、担任が呼んでるや～。」
と、声をかけてきた。

「マジか、めんどいな～。」

恐らく、見当はつく。職員室に行くと

「藍澤、お前、誰かに齧られてるのか？」

「え？ いや…全く…」

「本当か？」

「はい…」

「そうか…悪いなわやわざ来てもうつて。気をつけて帰れよ。」

まさか、やつ解釋するとは思わなかつた。しかし、いまやうながら

本当に血

分のことを、とこづか生徒のことを大事に思つてこるのがよく分かつた。

『よし、やつさと帰つて悩みの種を返そ…』

そつ思つてカバンを手に取つとしたら、一番、見たくないモノが田の前で

『Hンカウント』した。田の前の空間が歪み、暗い、深い穴が急に開いたか

と思うと、何か縁のものを吐き出してすぐに閉じた。そこにいたものは…

スライム。普通なら安心するんだつな…だが、俺にはそんな余裕は無かつ

た。カバンを急いで引っ張り上げ、一田散に走つて帰つた。想像していた中で一番最悪のパターン。

『電源を切つてきたのにアレが出たといつとは…もつ…』

必死に走つて帰つた。何も考えずに。いや、何も考えないために…気がつけば自分の家。すぐに元受話器を取り、電話をかけた。このゲームの送

り主、パワー＆ブレインに。

「お電話ありがとうございます。」あら株式会社パワー＆ブレイン

お客様相

談窓口です。本田はどうこつた用件でしょつか。」

「えつと「ロード&ナイト」というゲームが届いたんですけど、それを返品

したいと思つて…」

「お名前をよろしくですか?」

「藍澤和輝です。」

「少々お待ちください。」

そうじつてキーボードを叩く音が少しの間、聞こえ

「申し訳ありませんが、そのような商品は取り扱っておりません。」

「いや、あの、ネット販売だけの商品なんでもしかすると…」

「もう一度、商品のお名前をいいですか?」

「ロード&ナイトです。」

そんなどはずはない。確かに昨日、俺の家に届いたのだから…

「申し訳ありませんが、やはり当社ではそのような商品は…」

「そうですか…ありがとうございます…」

そういうて電話を切つた。ありえない…ありえない…そんなことは無いは

ずなのに…急いで階段を駆け上がり、自分の部屋に置いてあるダンボール

の送り先の名前を見る。しかし、そこには送り先の名前が書かれていなかつ

た。元々書かれていなかつたかのように、消した跡すらない空白があつた。

もづ、逃げる術は無かつた。いや、元々無かつたのかもしれない。

ここに、このゲームが届いた時点で…

『もう、おしまいか…どうしようも出来ない…』

ゲームの中の存在のはずの魔物が目の前に現れ、確かに一度、俺も襲われた。

そして、一人死んでいる。一コースにもなつてゐるから確かだ。そ

して、ゲー

ムが起動していなくとも魔物がエンカウントした。ところとま、何時、何

処で襲われてもおかしくはないところと。絶望しかない。

しかし、そこであることを思い出す。説明書に書かれていた一文。

そして、

ザックの一言。

「アイカムを外すな。」

そこで、気づく。アイカムをとつたからこうなったのかもしれない。

なら、もし、アイカムを外さなければ何かしろの対抗手段があるところ

となのか

もしれない。そこでもう一つ思い出す。

「死ぬなよ。」

あいつは確かにそう言った。ということは…

「まだ、ゲームオーバーじゃなかつたな。」

そう呟いた。ひとつだけ活路があった。

「ゲームクリアまでは絶対に外すな。」という説明文。なら、ゲームをクリアしちまえばいい。簡単なことだ。ゲームをクリアすれば終わ

るのが分かつてゐる。そして箱に入った説明書に目がいく。

『もう、面倒だつていつてらんないな…』

説明書を手に取り、最初のページからきちんと目を通していく。もしかする

と、何かもつと具体的な対抗策が書かれているかもしれない。それに、今は

文字通り、命懸けだ。救いの手は見逃さない。

『絶対に生き残つて、クリアする!』

そう心に誓つて、説明書を読み進めた。

もう、何時間がたつただろうか…いつの間にかすっかり日が落ちて、

下から

は母さんが料理をしているのか、いろんな音とにおいがしていた。

「和輝ー、『ご飯できたわよー。』

と母さんの声。時計を見ると、もう9時を回っていた。

『説明書も読み終わったし、先に飯食うか…』

どうやら自分待ちだつたようで、みんなもう座つて待つていた。

「いただきます。」

「どうぞ召し上がれ。」

夕飯を食べながら考へていた。もし、あのゲームを捨ててしまつたり、壊れ

てしまつたらどうなるのか…それで全てが終わればいいが、下手すると一生

あの魔物たちを相手しながら生きていかないといけなくなる。あまりにもリ

スクが高いからやる気は無いが、もしかすると、そつなつた場合、いつの間

にか直つてたり、部屋においてあつたりしそうだ。実際、ゲームではないが、

送り先の名前が消えてたからな…

「和輝、お前何か悩んでるのか?」

父さんの鋭い勘がはたらく。

「いや、何も。ただ考へ事してただけだから。」

「あら、珍しいわね。和輝が考へ事なんて。」

「ひどいな母さん。こう見えても色々考へてるんだから。」

二人にも言えない。心配させたくない。しかし、いつかは言わないといけない時が来るだろ?。

「じゅうそうさま。」

そういうて一足先に食卓を離れた。そして、これからが勝負だ。

部屋に戻り、アイカムを装着してもう一度、電源ボタンを押した。

すると

「電源が切られました。以前のセーブポイントから始めますか？」

そう表示された。

「もちろんだ。」

そうじつて頭で〇×と描いたら、そのままゲームが始まった。真っ先に田に飛び込んできたのは、寝袋で寝ているザックの姿。

『ね、寝袋？』

「おい、ザック起きるよ。」

そう言つと、ザックが寝ぼけ眼で起きてきた。

「「ザック」ふあ～。おはよう。」

初めて見た。ゲームキャラが素で寝ぼけているところ。意外とかわいい。

「ザック、悪かった。一方的に終わらせて。」

一応、謝らないと、と思ったが

「「ザック」う～ん、とりあえず気にしないからいいよ。」

案外、さっぱりしてこる。もうちょっとと根に持つタイプだと思つてたんだけ

どな。とりあえず：

「ザック、聞いておきたいことがある。」

「「ザック」何？」

「アイカムをつけてたら、俺は死なないで済むのか？」

実は、そのことに関しては一切、説明書には書かれていなかつた。

「「ザック」もちろん！俺が保障するよ。」

よし、そつと分かればもう、周りの田は気にしない。

「ザック、絶対に魔王を倒してゲームクリアするぞ。」

「「ザック」もちろんだ！そのために旅をしてるんだから。」

こいつはこいやつだ。どんなにひどい扱いを受けても俺のことを信頼してくれ

れてる。ただ気づいてないだけかも知れないけど…

「それじゃ、改めて。ゲーム…」

「「ザック」スタートだ。」

「ロード&ナイト」

第6章 再会

とは言つたものの…さすがに今日一日だけで色々ありすぎて、ゲームの内容なんか覚えていない。確か、どつかの王国に着いて……やつぱり忘れてる。

「なあ、ザック。」

「「ザック」何？」

「俺らつて今から何処に行けばいいんだ？」

凄まじく呆れた顔をしている。仕方ないだろ…」いつだつて色々必死だつた
死だつた
んだから…

「「ザック」え?なに?また忘れたの?」

「色々あつたんだよ!。」

「「ザック」しうがねえなあ。説明するからじやんと聞けよ。」

なんか…上から目線なのが腹立つ…

「「ザック」今居るのがクフォカ王国、そして今は「シン・ホウコ
大陸」に行き

たい。しかし、黒豹盗賊団がたつた一隻の定期船を奪つてゐるから大陸に渡る

術が無い状態。その為、今自分たちが国王の命を受けて盗賊団のア
ジトを叩

きに行く。という状態。分かった?」

そういえばそうだった。そして俺がこいつに小一時間説教をしたのも今回の
事が原因である。しかし…

「なあ、ザック。その黒豹盗賊団のアジト、知ってるのか？」

「「ザック」知ってるわけ無いだろ。俺だって、初めてこの町に来たんだから

さ。」

まあ……そうだろうな……主人公がアジト知つてたらどんなゲームだよつて突つ

込まないといけなくなる。大体こういつものは、この町に住んでる人に聞い

て回るのが定石だ。

「仕方ない。ザック、町の人聞いて回るぞ。」

「「ザック」は？いいよそんな面倒いこと。」

どこの世界に聞き込みが面倒いなんて言う主人公がいるよーつてここに居る

けど……いやいやそういうことじゃなくて……

「ザック。お前、敵の居場所も分からぬのにどうやってのりこむつもりだよ。」

「「ザック」そのへんの洞窟探してりや見つかるでしょ。」

絶対に主人公が口にしちゃいけない言葉じゃねえか：

「おい！お前人にオープニング飛ばすとか言つとこでそれはないだろ！」

「「ザック」それはそれ。これはこれ。大体、そんな都合よく情報持つてる人

間なんて居ないでしょ。」

「そういう問題じゃねえよ。いいから聞いて回るぞ。」

「「ザック」それならお前一人で行けよ。」

何の関わりも無い盗賊退治に名乗りを上げたり、闇雲にアジトを探

そつて

言つたり、こいつは本当に主人公なのか？もつ、時々分からなくな
る。

とつあえず、やつとのことでザックが重い腰を上げてくれた。今から町の人

に聞いて回るんだが…

「「ザック」すみません。知つてますか?」

「「住人」えつ！いつたい何を…」

「「ザック」あ、そうですか。ありがと「ジゼ…」

「ちょっと待て。」

「「ザック」ん? なに?」

「ん? なに? ジヤねえよ…! てめえ全つつ然人の話聞いてないだろ

!! あの

な…聞き込みつてのは…」

あまりにも酷すぎる。聞き込みのきの字も無いようなことをしでかしてく

たせいで、また小一時間、説教してしまつた。

「いいか? 次やつたら許さねえからな?」

「「ザック」はい…すみませんでした…」

ようやく本格的に聞き込み出した。

「「ザック」すみません。盗賊のアジトの場所を知りませんか?」珍しく敬語で喋っている。相当説教が堪えたか…しかし、

「「住人」いや、知らないねえ。」

「「剣士」悪いが、私が知りたいぐらいだ。」

「「兵士」そんなもの知つてたらとっくに攻め込んでいますよ。」

「「住人」残念ながら力にはなれないよ。」

「「ザック」ねえ。見当たらないんだけど…」

「いや…あの…すまない…」

やばい…まさか見つからないとは…

「「ザック」どうする? 結局情報が無いよ?」

「いや、あるはずだ…後、見てない場所は…」

「「ザック」もう、王様に言つて諦めたほうが…」

「それだ！」

「「ザック」え？」

すっかり忘れてた。そういえば、国王にはまだ会つていなかつた。

国王なら

ここいら一帯の情報を持つてゐるだらう。そつと決まつたら早速謁見しに行こう。

「よし、王宮に行くべし。」

「「ザック」いやいやいや。こめそひ無理でしたーなんて言つたら殺されるぞ俺たち…」

「?もしかして勘違ひしてないか?俺らは今から謁見しに行くんだよ。」

「「ザック」謁見?」

「王様に会いに行く」とだよ。それで直接居場所を聞いたほうが早い。

「「ザック」なるほどーってなんでもつと早く気づかなかつたんだよーおかげで歩き回つて疲れただけじゃないか!」

やつぱり…疲れるのか…悪いことをしたな…といふか無駄にゲーム内の人間

がリアルだ。

「悪い悪い。さあ、早く行こう。」

「「ザック」人事だと思つて…」

ブツブツ言いながら王宮にたどり着く。が、

「「ザック」国王に会わせてもらいたいんだけじ…」

ここでまたザックの悪い癖だ。

「「兵士」申し訳ないが、今は国王に謁見することは出来ない。帰つていただ

こう。」

やつぱり断られた。人と話す時は敬語を使わせるようにしないとな……

「ザック、敬語で理由を聞くんだ。」

「「ザック」あんたが聞いたほうが早い気がするけど……」

「お前が出来なきゃ意味がないだろ。」

「「ザック」仕方ないな。」

渋々は言うが、根は真面目なやつだ。

「「ザック」謁見できない理由でもあるんでしょうか。」

「「兵士」実はここだけの話。国王が病に伏せつてこらのだ。しばらくした

ら治りそうだが、今すぐというわけにはいきやうにな。」

「「ザック」そうですか……ありがとうございます。」

まさかそんな理由だつたとはな……しかもこれじゃ……

「「ザック」どうする？また振り出しだよ。」

「仕方ない。町の広場に戻る。時間もたつたし、今なら詳しい人が居るか
もしけない。」

「「ザック」それしかないかな……」

「ザック、なんかやけに素直になつたな……」

「「ザック」これでもちやんと反省はしてるんだからな。」

意外といい奴だつたりする。なんか憎めないキャラだな……

広場まで戻つてくると、広場の中央にまた人だかりが出来ていた。

『今度はなんだ？』そう思いながら近づいていくと……

「「住人」怖いわねえ。」

「「住人」ここもそろそろ魔王軍の勢力が伸びてき始めたな……」

「「ザック」なんのはなし……じゃなかつた。すみませんどつしたん

ですか？』

「「戦士」なんでも、このすぐ近くの平原で旅人が頻繁に魔物に襲
われている

ようだ。そろそろ町の守備を強化しないとな……

「「勇者」中には、ロードのついた勇者もいるようだ。」

「「ザック」ロードのついた勇者？」

「「勇者」ちょうど、君みたいな勇者のことだね。確かに、名前はクラウドだつたかな？」

「そんなまさか！クラウドさん！に限つてそんなことあるはずが無い！」

「「勇者」確かに間違いですよ。大体、ここに来た勇者は把握してたんで…」

「助ける方法はあるんですか？」

「「勇者」な」こともないよ。確かに、蘇生呪文か聖者の聖杯があれば…」

「ありがとうございます！」

そういうなり、ザックを道具屋に向かわせた。すぐに聖者の聖杯を購入し、町

蘇生アイ

テムは購入していなかつたからだ。すぐに聖者の聖杯を購入し、町を出た。

「「ザック」おい！落ち着けって！闇雲に探し回つても見つからな

いぞ！」

「つるさい！そんなこと分かってる…」

俺が必死になつてゐる理由はただ一つ。クラウドさんへの思い入れ？

違う。た

だ助けたい？それも違う。ひとつだけ、ホントにひとつだけ気になること、

そして確かめたいことがあつた。もし、自分の予想が当たつてたら…

「「ザック」いた！あそこ！」

ザックが指差す方向を見ると、一人の勇者が倒れていた。その上にはプレイ

ヤーの表記は浮かんでいない。急いで駆け寄ると、そこに倒れていたのは間

違ひなく、クラウドさんだつた。急いで聖者の聖杯を取りでしてクラウドだつたのは間

ラウドや

んに使ひと、あつとこいつ間に蘇生した。プレイヤー表記も戻つてい
る。」

とはやはつ…

「「クラウド」「ハーヴィン。あれ? ほくは確か、魔物にやられて…」

「クラウドさん。いや、出雲さん。出雲修一さんですね?」

「「プレイヤー」あれ? どうしてわたしの名前を?」

「やつぱり!」コースであなたの名前を知りました。」

「「ザック」え? え? どうこいつこと?」

「おおまかに話すとクラウドさんのローデ、出雲さんは現実の世界

で魔物に

襲われて死んだんだ。」

「「出雲」そうだったのか… ありがとう。助かったよ。」

「「ザック」そんなことか… でも、何で生き返れたんだ? 普通に考
えて無理な
んだけどな…」

言われてみれば確かにおかしい。何故、死んだはずの《人間が》生
き返った
んだ?

「「出雲」とにかく助けてもらつたんだし、お礼がしたいよ。」

「あれ? どういえば今、出雲さんは何処にいるんですか?」

「「出雲」自宅だよ。」

あれ? 確か、外で死んでたんじや…

「「ザック」今、盗賊団のアジトを田指してるんだけど…」

「「クラウド」そつか、ならそれを手伝おつ。」

「「出雲」そうだね。それがよさそうだ。」

なんか話がまとまつてきてるな… しょづがない。今は考へても仕方
がない。

そして、賑やかな盗賊退治が始まった。

「ロード&ナイト」

第7章 魔物の群れが現れた！

クラウドさんが、一時的にパーティーに入ってくれるのは嬉しいが…急いで

出てきたので、結局、アジトがある場所は分かつてない。

「すみません。一度、町に帰つてもいいですか？」

「「クラウド」何か用事でもあるんですか？」

出雲さんのキャラ、どつかのバカと違つて、とても丁寧な言葉遣いだ…

「「ザック」エックシコン…風邪引いたかな…」

「それが実は、お恥ずかしいことにアジトの場所が分からないので…」

「「クラウド」それなら…」

「「出雲」私達は知つてますよ。」

「「ザック」マジで…やつたね！」

「どうして場所が分かるんですか？」

「「クラウド」実は、僕たちは黒豹盗賊団を退治しに向かつ途中だったんですけど…」

が、そこでやられてしまつたんだ…」

なるほど…ということは、俺たちが来る前までは情報提供者がいたのか…

「「出雲」場所は「」から北東、そこにあるつて聞きましたよ。」

「それじゃ、道案内お願いします。」

そこで進みだそうとした時、

「「ザック」そういや、一つ気になることがあるんだけど…」

「何？」

「「ザック」なんであんたは初対面のはずのクラウドのロードの前が分かつてたの？」

「「出雲」ああ、それは私も気になつてたことだ。」

「実は…これといつて確証はなかつたんだ…」

「「ザック」ならなんで？なおさら理由がわかんないんだけ…」

「ただ…ただわ…」

理由…それは、俺にとつて知りたくない事実…でも、逃げないと決めたから

には、必ずクリアすると決めたからには…

「俺は…現実の世界でアイカムを外して外に出たとき、アレニ…トカゲ男に

出会つたんだ…もちろん、敵うはずのない敵だつたからすぐ逃げた

けど、その後、ニユースで出雲さんの死を知つて…俺があの時、逃げ出さず

に立ち向かつていれば、出雲さんという関係のない人を巻き込まずには済んだ

んじやないから…だからクラウドさんが出雲さんであつて欲しい。そう

思つただけだつたんだ…すみません…出雲さん…」

「「ザック」そうだつたんだ…「メン…変なこと聞いて。」

「いや、むしろありがとう。覚悟が出来ずにいたんだから、今度こそしつかり覚悟が出来るよ。」

「「出雲」つまり…君が逃がしたトカゲ男が私を襲つたかもしけないといひにとかな？」

「確証はないんですけどね…」

「「出雲」まあ、よかつたじゃなこですか。つまつ、君のおかげで今、いっつて生きてこりれてるんですから。」

「ありがと「出雲」ね。」

「「出雲」お礼を言わなきゃいけないのね。」

「ありがと。」

「それじゃあ、早速アジトに向かいましょう。」

「「ザック」なんでそななるんだよ。」

「長話し過ぎたからだよ。」

「「出雲」確かにそうだね。よしー早く盗賊を退治してしまおう。」

「「ザック」なんか…引つかかるなー。」

そのまま、アジトがあるとこ場所までまっすぐ歩き出しだ。歩きながら出

雲さんが

「「出雲」そうこえれば、魔法は使えるか?」?」

と聞こてきた。

「自分たちはまだ覚えてないですね。多分、レベル的にももうべく覚えると

は思つんすけどね。」

「「出雲」やうか…とこい」とは、君たちはソルジャータイプのナイトのよつ

だね。」

「「ザック」ソルジャータイプ? 何それ。」

「「出雲」ソルジャータイプのナイトは、先に技をたくさん覚えるんだ。ちなみに、私達はマジシャンタイプのナイトなんだ。」

なるほど…だから技ばかり覚えてたのか…てつきつこつが筋肉バカなのかと思つてた。

「「出雲」魔法をまだ覚えてないなら、先にレベルを上げたほうがいいかもしないかもしないね。」

「そういえば、なんで魔法を覚えてたほうがいいんですか？」

「「出雲」実は、その盗賊団がアジトにしている場所は洞窟でね。その洞窟には、物理攻撃が効きにくく魔物が出るんだ。」

「そんな魔物が…だから覚えたほうがいいんですね。」

「「ザック」着いちやつたよ？」

気が付けば目の前には、大きな絶壁。そしてその根元に大きく口を開けたよ

うなおどりおどりしい雰囲気の洞窟がぽつかりと開いていた。しかし…なん

だ？この感覚…なんか嫌な予感がある…

「「出雲」着いてしまったのか…じょりがない、チームワークで切り抜けましょう。」

「そうですね…できるだけサポートします。」

「「ザック」ちやつちやか行こうぜ！ なあ、クラウド。」

「お前、そろそろいい加減にしろよ！ 敬語使え！ 敬語！」

「「出雲」お気にならざに和輝君も敬語じゃなくていいですよ。話しごくい

でしようし。」

あ、名前表示されてるんだ…ついえばなんで出雲さんの表記はアレイヤー

じゃないんだ？まあ、気にする」とでもないけど…

「それじゃ、お言葉に甘えて…魔法を覚えるまでは、雑魚担当でござま…い

くよ。」

「「出雲」別に無理はしなくていいからね。」

「『じのせなら出雲さんもそんな風に喋らないほうがいい気が…』

「『出雲』私の場合は癖でしてね。この喋り方が慣れてるんですよ。

「「クラウド」ここまで話してるんですか？」

あ、クラウドさんの」と、すっかり忘れてた。

「よし…さつと終わらせよう…」

「「ザック・クラウド」おつ…」

洞窟とはこつたが、かなり明るい。あちらこちらに盗賊が置いたと思われる

松明がきちんと照明の役割を果たしていた。しばらく進むと、こつものよう

に次元が裂け、魔物が飛び出してきた。が、さすがにレベルが上がつてきた

からか、パーティーを組んだからか、その裂け目から出てきたのは一体では

なく、群れで出てきた。そういうえば、再開して初めてのバトルだ。

「「ザック」あの真ん中にいる奴、見たことない…多分あれが…」

「物理攻撃が効かない奴か…そいつはクラウドにまかせるぞ…」

「「クラウド」了解！いきましょうロード…」

「「出雲」もちろん！周りはまかせましたよ…」

仲間がいる安心感。まさかこれほどのものとは…ふつふつ…腕が鳴るぜ！

「ザック！…つけ…回転斬り…」

「「ザック」うおお…」

そういうとザックは敵のど真ん中に突っ込み、剣を思いっきりブン回した。

それなりにレベルを上げながら進んでいたのもあって、周りにいた

半魚人の

よつな奴らをいっぺんに吹き飛ばした。

「「出雲」今です。クラウド…」

「「クラウド」はああ…瞬け雷光！《サンダー》！…」
するとクラウドの手が一瞬、凄まじい光を放ち、真ん中に残つてい
た貝のよ

うな敵をその光が貫いた。まだ、耐えてはいるものの、もう虫の息
なのが目

に見えていた。

【シエルの攻撃！】

「ザック！ここは…」

「「ザック」分かつてる！」

そういうとクラウドの前に立ち、剣を構えた。その直後シエルが突
っ込んで

きた。よし！予想通り！

「「ザック」カウンター！」

シエルの特攻を剣の腹で受け止め、そのまま跳ね返しながら切りか
かった。

が、予想以上に硬かつたようでもつたぐダメージを受けなかつた。

「「ザック」くそ！めちゃくちゃ硬え！」

「「クラウド」僕にまかせて！」

すると、また手を前にかざし

「「クラウド」くらえ！《サンダー》！…」

するとその光はまっすぐ飛んで行き、シエルを再び貫いた。今度こ
そ倒した

ようで、その魔物たちは煙のよつに消え去つた。

「よし倒した！幸先いいぞ！」

「「出雲」タイミングもばつちり！いいコンビになれそうだね。」
確かに！これはかなり心強い仲間が出来た。

「「ザック」よし！この調子でガンガン進もう！」

そうつづつさらに洞窟の奥、黒豹盗賊団のアジトを田指して進みだ
した。

ロード&ナイト 第八章

「ロード&ナイト」

第8章 キャプテンミランダ！」

洞窟というだけあって、奥に進むにつれてかなり複雑になっている。そして

どこからか水の音が聞こえる。

「出雲さん、この洞窟って海に繋がってるんですか？」

「「出雲」よく分からぬけど、そうかもしねえ。」

水が滴り落ちる音ではなく、何回も押し寄せたは引く、そんな感じの音だ。

あ、だから半魚人とか貝の魔物とかだったのかな？ そうすると納得できる。

その後も、魔物の群れを蹴散らしながらしばらく進んでいくと、他の場所よ

りも確実に明るい空間に出た。

「ここが…もしかすると…」

「「出雲」うん、恐らくアジトだね。一旦、隠れて体勢を…」

「「ザック」勇者ザック参上！ さあ盗んだ船を返してもらおうか！」

バカが真っ先に、考えもなしに敵陣に突っ込んでくれた。こののバカ力！ 何考

えてんだ！ 少なくとも戦いながら来たんだから、体勢を立て直す時間が必要

だというのに！

「バカザック！ 剣構えろ！ 連續突き！」

「「バカザック」OK！ って名前が！ バカは余計だよ！ 連續突き！」

その掛け声とともに、目の前にいた盗賊たちを一斉に突いた。

「「盗賊」うわあ！ くそ… 何だこいつ… 早くキャプテンに…」

そこまで言つて盗賊は倒れた。とりあえずよかつた…これ以上悪い事態が起きなくて…

「「盗賊」！何者だお前ら！」
ああもう、分かりましたよ…俺がフラグ立てたんだろ…戦うよ…
結局、そんなことが続いて20人ほど倒したところでやつと人が来なくなつた。

「ザック、一度と勝手に出て行くなよ。分かつたな？」

「「バカザック」なんだよ…上手くいったのに…」

「上手くいってたじやないだろ！このバカ！」

小一時間ほど言い合いが続いた。が

「「クラウド」ああもう、落ち着いて一人とも…」
とクラウドさんにたしなめられた。

「とにかく、ポーションとエーテル飲んでHP、MPを全回復しつけ。」

「「バカザック」了解。」

「「クラウド」こっちも準備OKです。」

「「出靈」よし、行こう。」

そう言つて飛び出してみれば、

「「？？？」あんたらかい？私の子分を可愛がつてくれたのは。」
ぐるつと見渡す限り盗賊、盗賊、盗賊…まあ…そりやそりなるよ

な…あん

な大声で話してりやな…

「「？？？」私の名はミランダ。キャプテンミランダだよ…覚えときな！」

「「ザック」キャプテンミランダ！早く船を返せ！」

「「ミランダ」いいわよ。ただし、一対一の勝負で勝つたらね。こつ
ちは私が行く。あんたらもどつちかがリーダーなんだろ？だったら
そいつと

私が戦うだけや。そして勝つたほうの要求に絶対応える」と。それ

がわたし

の…いや、戦うものとしての道理だ。さあ、さつさと一人出できな

!」

「どうするか…」

二人、いや正確には四人で作戦会議をした。

その結果、出雲さんとクラウドさんが、『J』は魔法が使えるよりも物理攻撃

力が高いほうがいいだろ?と『J』とドザックに任せた。俺はあんまり気が

進まなかつたけどな…でも、ミランダと名乗つたその盗賊は確かに、身軽そ

うな装備、手にはダガーとまさに絵に描いたよくな盗賊だ。そういうでキヤプテンなんだ?まあ…別に気にすることじやないけど…

「「ザック」俺が行く!…でいいんだよな?」

「「ミランダ」はつ!威勢がいいね。そうでなくちゃな!かかってきな!」

かなりの自信、秘策があるのかそろとも元々強いのか…しかし、こ

こは先手

必勝!

「三段斬り!」

中段を振りぬき、そのまま切り上げ、両手で剣を握り、振り下ろした。たす

がにかなり使い込んだ技の一つだからザックの動きもキレがある。

「「ミランダ」やるねえ…じゃあこっちの番だよ!」

そう言つと両手を胸の前でクロスさせ、

「「ミランダ」燃え盛れ炎!《ファイヤー》!」

その途端、ミランダの前に火の玉が現れ、それをザックに向かって打ち出し

てきた。命中!ザックじゃかなりのダメージをもらつてしまつてい

る。

今のは間違いない魔法！まさか魔法で戦うのか！？やばい…それは全く予想してなかつた…

「「ザック」くそつ！魔法おもつきし使つてきてんじやん…魔法が使えりやな

…

「使えないもんはしゃあない！ザック！連續突き！」

力では完全に押しているが、同じ量のダメージをもつてしまつて

いる。や

はり魔法防御の無さが響いている。

「「ミランダ」押し流せ水流！《ウォーター》！」

「回転斬り！」

そこまで大差が無かつたものの、僅かずつ押されだした。

『くそつ！なんとかポーションで回復させていくが、もう回復量が間に合つ

ていない。どうすれば…』

「「出雲」ザック君を信じるんだ！そして、彼のことを心の底から助けたいと願うんだ！」

「「クラウド」魔法は心の力。信じる力が魔法になるはず！」

「…」

『ザック…お前はほつきり言つてムカつくやつだ…でも、優しいやつだつて

のも分かつて。だから…こんなことじで負けられないよな…』

「ザック！絶対に勝つぞ！」

その途端、ザックの体が仄かに光り…

「「ザック」なんだろ？…この心の底から湧き上がる力は…」

「まさか…いや、でも間違いない。ザックから光が溢れると同時に、

コマン

ドの項目に【魔法】が増えていた。

「来た！ザック！魔法だ！」

「「ザック」深緑の力よ、癒しの光よ…《ヒール》…」

その途端、ザックを美しい光が覆い、みるみるしつづけザックの傷を癒していく

つた。

「回復魔法…すごいじゃないか！ザック！」

「「ザック」あんたのおかげだよ…ロード…」

と少し照れくさそうに言っている。

「「ミランダ」へえ…やるねえ…うでなくつちや面白くなつよ…」

氷塊の力！

《アイス》！」

今度は拳大の氷塊を出現させ、それをザックめがけて放った。

「もう一つの魔法を使うぞ！」

まさか一気に二つも魔法を覚えるとは思わなかつた。がここはあえてさすが

勇者だと言つておこう。ザック…すげえよお前…

「「ザック」分かつた。光の力よ、全てを拒絶せよ…《リフレクト》…」

「「ミランダ」何をしたかは知らないけど、補助魔法ばかりじゃ勝てないよ！」

大地の破片！《ロック》！」

今度は拳大の石を数発こちらに飛ばしてきた。しかし、その石は全て光に遮

られ、ミランダにはじき返された。

「よし…これで魔法は怖くない！畳み込め！両手斬り！」

ザックは剣を両手で握り直し、おもいきつミランダに切りかかつた。

長い攻防の末…

「「ザック」とどめだ！三段斬り！」

全てミランダに命中、やつとの戦いでミランダを倒すことができた。

「ミランダ」あつはつは！負けた負けた！私もまだまだね…」

なんか…軽いノリだが…勝つた…勝つた！

「ザック」あ…約束だ！船を返せ…」

「ミランダ」怒鳴りなぐても返すよ。盗賊は義理堅いんだ。受けた恩は必ず

返すし、一度した約束は必ず守る。こままですつと守つてきた暗黙のルールだ。」

へえ…やつぱそうこうとはしつかりしてるとか…

「ミランダ」付いてきな！船はあつちにとめてある。」

しばらくミランダの後をついて歩いていくと、広い空間に出た。田の前には

大きな船、そして船は洞窟の中だが、しつかりと海に浮いていた。

「やつぱりこの洞窟は海に繋がってたのか…」

「ミランダ」やつだよ…いつかじいからあの広い海に出るつもりだつたんだ

けどねえ…」

と少し寂しげな表情を浮かべていた。

「ザック」もしかして、ミランダが最初にキャプテンって名乗つたのは船に

乗りたかったから？」

「ミランダ」ああ、やつだ。本当は世界中の海を又に駆けた船長になりましたか

つたのや…せらーみんなーやつと出航の準備だよー」

「ザック」なら王様に定期船の船長にして欲しつて言えば？」

「ミランダ」え？な、なななにを言つてんだい！私は盗賊だよー」

そんな簡単

に…」

「みんな早く船から離れろー！」

「〔ザック〕どいたんだよー急にそんな…」

嫌な予感、この洞窟に入る時に感じたあの感覚がした。

「いいから早く離れろ！陸地に戻れ！」

「ミランダ」おまえら！聞いたか！や、やと船から離れな！」

「**予分**」わ 分かりやした

それでみんなが船から下りたが、一向に變化が現れなし。

〔子分〕何も起きやしねえじゃねえか……わ、わと出航……

此書之題目，即以「世說新語」為之，蓋其書之內容，實即以「新語」為之。

がら俺が

ずっと感じていた嫌な予感は目の前に現れた。

ロード&ナイト 第九章

「ロード&ナイト」

第9章 クラーケンが現れた！

突如目の前に現れたソレは海から差し込んでいた月明かりを覆い隠すほどの大きさだった。

「なんだあれは！」

「「子分」ク、ク、クラーケンだ！クラーケンが出たー！」

クラーケンと呼ばれたソレはイカともタコとも見て取れない奇怪な姿をして

いた。その巨体さのせいで大きく船が揺れている。まことにまじや船

が！

「「クラウド」瞬け雷光！《サンダー》！」

クラーケンを雷が襲つた。そのおかげで注意がこちらに向き、船が

洞窟の壁

に叩きつけられる心配が無くなつた。よかつた…船が無くなつたら大陸に移

れなくなるところだった…が、こちらに對して触手で攻撃してきた。さすがに

サイズがサイズ。まともに食らえば致命傷は避けられない！

「「クラウド」なんとか倒すしかないですね…」

「「ザック」もつもと倒さないと船が危ねえ！」

「「ミランダ」私もいつしょに戦つよ。」

そつこつてミランダが横に並んだ。

「いじのか？もあんたには関係無いんだぞ？」

「「ミランダ」昨日の敵はなんとやらつてね。それにまだ船は返し

には行つて

ないからね。言つただろ？ 盗賊は義理堅いんだ。」
そうとなると、とても心強い。三人いればなんとかなるかもしだい。

「〔ミランダ〕おまえら！ 早く火薬を持つてきな！ ありつたけだ！」

「〔子分〕了解でさあ姉御！ さあ急げ！ 全部持つてこい！」

みんなも協力してくれてる……やっぱ、悪い人達じやないな……よし！
こつちも

火薬が届くまで耐えないと！

「ザックは援護…ミランダさんとクラウドさんはなるだけそいつを
暴れさせ

ないようこお願いします！」

初めてとは思えないほど息の合つたコンビネーション、幾度となく
繰り返せ

れる触手の連続攻撃、ザックのいいタイミングでの回復、そして誰
一人とし

てクラーケンといつ脅威を目の前にして怯まなかつた。いや、恐怖
以上の信

頼があつたのかもな…そして

「〔子分〕姉御！ 準備OKです！」

そんな声が上から響いてきた。よく見ると上の突き出した岩場の上
に大きな

樽が置いてあつた。

「〔ミランダ〕よくやつたねあんた達！ クラウドだったつけ？ あん
た、ファイ

ヤーは使えるかい？」

「〔クラウド〕はい！」

「〔ミランダ〕よし！ それじゃ 3、2、1 でファイヤーを唱えな！
いいかい？

おまえたちも準備はいいかい？」

「「子分」いつでも大丈夫でさあ！姉御！」

しかし、クラーケンだって黙つて待つてくれるほど優しくは無い。

ここは

ザックに任せよう。今、自由に動けるのはザックだけだ。それに樽を上に

用意した。さらに炎属性の魔法もしかすると…あの樽を？…その後、すぐ

に掛け声が始まり、

「〔ミランダ〕3・2・1！今だよ！《ファイヤー》！」

「クラウド」煌け火炎！《ファイヤー》！

ザックを素早く引かせ、安全な位置まで行くとほぼ同時に、樽が押し出され、

丁度クラーケンの目の前に落ちていぐ。そこには丁度ファイヤーが飛んでいき、

見事命中！凄まじい轟音と爆風がクラーケンの目の前で巻き起つた。

「「クラーケン」ヴォ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、…」

そんな雄叫びとともに海中へ姿を消していった。

「一同」やつたあああ…！」

「〔ミランダ〕よーしーわざわざ出航するよー！」

「「子分」アイアイサー！」

全員が船に乗り込み、ついに定期船は洞窟を出た。そこには広がるの

は美しい

星空、静かな海、そして、賑やかな船の中だった。そのままクラーケンへ

戻り、港に停泊させた。そのまま船を取り戻したことを王様に報告しに行こ

うとした時、ミランダは船に残っていた。

「お前はそこでそうしていいのか？」

「〔ミランダ〕いいよ。もう負けたんだ、せめて最後くらい船に長

くこさせて

くれてもいいだろ…」

そう言つて遠くの海を眺めていた… とても… 寂しげな表情で…

『彼女をこのままにする訳にはいかないな…』

そうは思つたが… 彼女は盗賊の頭… やつぱり… 無理なんだろつか…

そういうしている間に、謁見の間に通され、王様をついに拝むことができた。

「「國[王]」勇者ザック、そして勇者クラウドよ。この度はそなたちの働きによつてこの國の危機は免れた。そなたちには大いに感謝している。」

「「クラウド」もつたいなきお言葉。」

そこでもまだミランダの刑のことを考えていた。あいつは悪い奴ではない。

だからなんとかしようと色々考えた結果、あることを閃いた。そして國王にミランダを定期船の船長にしてくれないか提案した。もちろん國王は断つた。

そこまでは計算内さ… だが、こちらにも考えはある。

「しかし、今回の定期船奪還は彼女の協力があつたため実現しました。」

國王はそのことを聞くとかなり驚いた表情をしていた。よし… もう一押しだ！

「それに今、魔王軍の勢力が強力になつてきています。今回もクラーケンと

いう強力な魔物が出ました。そのためこのままなら定期船の運航に支障が出る恐れがあります。それなりに戦える人が船長でないといつ沈むことか…」

そんなことを言いながら俺は心の中でほくそ笑んでいた。なぜなら

言い返す

ことができないはずだからだ。最近魔物が増えているのは事実、そして定期

船かミランタたちに奪われたことも事実、そして今回のクライケン、これが

一番のこの申し出を断れない理由た
ちが、証拠に無くても証言といへ事
実がある。

「彼女は……」ランダは本当は船長になりたかったんです。だから彼女を船長

にすればもう、懸念はしないこと夥こめすよ。」

その後、謁見の間から出てきた。そのまますぐには船に戻り

「おーい!!」「ハシタ!! お前やんの形が決まいたそー」「ハラハラ」「ダメダメ!!」ニヤニヤ、剥き肉がいい匂いが

「これから死ぬまで定期船の船長だ！長い刑期だな！」

と、あえて皮肉うて言つた。もちろん満面の笑みを浮かべていた。

ランダの船長就任の知らせを聞いていた子分たちが、自分たちで身を引こう

必要だ……

としていたが引き止めた。船は一人じや動かないからな……クルーが

美しい月明かりをバックに、一際定期船が美しく見えた。その上に
もっとと美

その後、いい仲間たちを乗せて…

「ぐい、エ」余回はおおじて苦笑様。あたしはかかれていた。
いね。」

その言葉を最後にクフオカ王国でクラウドさんたちと別れた。今度は…もつ

と強くなつて出会いたいもんだ。

「「ザック」あー終わつた！みんな嬉しそうだつたな！それで…この後どうすんだ？」

ふと時計を見ると、もうだいぶ夜も更けていた。明日も学校だしな…「悪いな。一旦、セーブして寝るわ。続きはまた明日、学校から帰つてからだ。」

「「ザック」そうか。分かつた。今度は絶対にアイカムは外すなよ」。

「分かつてるよ。お休み。」

そう言ってセーブをし、電源を切つた。もうアイカムは外さない。必ず生き残つてみせる！つて…なんでアイカムつけてたら安全なんだ？…

ま、知りたくないが…そんなことを考えながら布団へ向かい、大きな欠伸をして眠りについた。今度は…俺の大冒険が始まるなんてな…思いもしなかつた。

「ロード&ナイト」

第10章 視線が集まるーー

「和輝、ご飯よ。」

そんな母の声で起された。しかし、昨日とは打って変わつてとても寝覚めのいい朝だ。わいわと一階に下りて、リビングに飛び込んだが、やはり…こ

のアイカムが気になるようなんだ…完全に一点を凝視している…

「和輝…それ…なに?」

まあ…当たり前の質問だ。流行りのアクセサリとでも言つていいまかす手もあるが、これは…流石に無理があるか…正直に言おう。もちろん、常人の考えられる範囲で。

「あ、これ、携帯の会話をこれで出来るかテストしてるんだ。当分の間外せないからやるといふよ。」

ほぼ同じ説明を父さんと卓也にも話した。まあ、卓也は薄々感づいているよ

うだが…あえて触れないでいてくれた。

朝食をすぐ食べ終わり、学校に行く準備をするついでに、テレビの電源とゲーム機の電源を念のためチェックした。よし…りゅあんと電源も落ちてる。そ

れを確認して学校へと向かった。昨日と同じ変わらない通学路。変わった

のは自分の心持ちだけだ。昨日に比べて本当に気が楽だ。しかし…それを差し引いても有り余るほどのものがある。それが何か?言わなくても分かる。

学校に近づくたびにどんどん強くなる視線、視線、視線…さすがに…そこまで凝視されると…かなり堪える…校門にはいつも通り担任

が立っている。まあ、生徒指導だから…説明しようとしてたらやつぱり二つ

ちに気が付いた。

「藍澤…何だそれ?」

「あ!…これっすか?…これはあれですよー前、説明してた…」

「…氣付け!…担任!…これはみんなの前で言えるような代物じゃない!…後で説明す

るから!…そんな念を送った。

「あ、ああ…そうだつたな…あれか。氣をつけろよ。」

と適当に話を合わせてくれたやつぱり俺のことをよく分かってくれてる。そ

の後、付け加えるように俺の背中に向かって

「あ、そうだ藍澤。後で渡さなきゃいかんものがあるから、後で職員室に来てくれ。」

と言ってきた。まあ、要するに後で事情を聞くって事か…

教室に入つても依然続く痛いほどの視線。というかホントに痛い…

そんな目

で見るな…つて言いたくなる…しあうがない…死にたくないし…力

パンを机

の横に置き、そのまま職員室へ向かつた。が、真志に止められる。

「おい和輝!…お前それなんだよ!…なにつけて来てんの!…」

かなり取り乱している…とりあえず落ち着いてもら…

「和輝！あんた何考てるのー！」学校よー！その変なもん取りなさいよ！」

続けざまに理沙が突つ掛かってきた。あ、そういうやまだ俺の友達を紹介して

なかつたな…

最初に俺に話しかけてきたやつが灰山真志。成績優秀、運動抜群、性格も優

しく、ルックスも最高という完璧超人だ。

「誰が完璧超人だ。言つとくがお前に勉強でしつかり勝つことはないから

な。」

人の紹介に対してもこむなよ…本人曰く、俺が一度も勉強で本気を出した

ことがないのに、点数にさほど差がないのが理由らしい。

次に、自分に突つ掛かってきた方が秋山理沙。普段は明るく優しい、清楚な

女生徒だが、俺の前ん時だけ何故かいつもこんな感じ…なんでだよ…「そりや幼馴染だからに決まってるでしょ！なんであんたにそんなよそよそ

しく接さなきやいけないのよ…面倒くさいのよ…」

お前も説明につつこむなよ…まあ、そんな感じの奴らだ。あと一人いるが…

とりあえず、ここから逃げ出そつ。そう思い、不意を突いてダッシュで教室

を出た。そのまま職員室に行くと

「おお！来たか藍澤。さつきは聞かなかつたが、それは何だ？」

この人には…正直に話しておこう。全てを…

家にゲームが届いたこと、ゲームのキャラが喋つたこと、敵が現実でエンカ

ウントしたこと、そして…このアイカムと出雲さんの死亡事件の真

相…全て

話し終わると

「俄かには信じ難いが…」ここで嘘を言つ必要も無い…そうか…それで昨日は

沈んでいたのか。」

かなり真剣に悩み、そしてもう一つ質問してきた。

「藍澤。 その事件というのは本当に昨日あつたのか?」

何故それを聞いてきたのかは分からなかつたが、一応説明し直した。

「昨日の朝のニュースで放送されていました。俺がそのトカゲ男から逃げた

のが一昨日の夜。両方ともよく覚えていいます。」

その言葉を聴いた途端、また考え込みだした。

「悪いが私は朝のニュースは毎日欠かさず見てている。しかし、昨日はそんな

ニュースは見ていない。」

ニュースを見ていない。というよりも、そんなことは知らない。といつた顔

だ。そこで気付く。

『もしかすると…出雲さんを生き返らせたから?』

もしそうだとすると…みんなにも聞いてみるか…そう思い、担任に最後に一

礼して教室に戻つた。真つ先に真志と理沙が俺の元にやつってきたが、聞かれ

る前にこちらが質問した。

「お前ら、昨日の朝のニュース見たか?」

あまりにもいきなりの質問で少し戸惑つているが、一人揃つて見たと答えた。

そこで昨日、出雲さんの事件を聞いて見たが、やはり一人とも知らなかつた。

ところ事はつまり、昨日あつた出雲さんの死亡した事実だと無かつた。

たことに

してしまったようだ。なんかもつ…ゲームビ…じゃないが、それ以外ありえ

ない。勝手に納得した俺に食つて掛かろうとした一人だったが、それをおさむ

れを遮る

ようにもう一人飛び込んできた。

「和輝！池沼から聞いたぞ！お前大変な目に遭つてんだってな。」

そいつの名前は剣崎猛。さつき紹介し忘れた最後の一人。筋肉馬鹿。

「俺の説明そんだけかよ！もつと色々あるだろ！」

分かつたからなんでも皆、説明につっこめるんだ！あ、そうそう猛が

言つてい

る池沼とは俺の担任のこと。猛だけ隣のクラスだからな…勉強は全く出来な

いが、小、中、高と野球をやり続けている根っからのスポーツマン。もちろん運動神経は抜群、確か4番でピッチャーという恐ろしい奴だ。性格はとに

かく明るく、元気がよく、ガサツ。しかし涙弱く、困っている奴を

見るとほつとけないという優しい一面もある。まあ、よりもよつて一番面倒な奴に

事を伝えやがったな…担任の野郎…

「いつでも助けになるからな？絶対一人で考え込むなよ？絶対だからな！」

「分かつた分かつた…とりあえず教室に戻れよ。ホームルーム始まんぞ。」

猛は渋々帰つていったが…こち一人にはなんて説明するか…

「和輝。放課後ゲーセン行こうぜ。多分、ここじゃ話せないことだろ？」

流石真志…と言いたいところだが、出来れば説明したくない。巻き込

みたくな

いつてのが本心だが、ここで断りや問いただされるだらうしな…

「分かったよ。放課後付き合つよ。」

そう言つてひとまず、一人には納得してもらつた。

授業が始まつたが、担任があらかじめ先生達に言つておいたのか、

アイカム

に関しては誰もつっこまなかつた。

そして放課後。四人とも集まり、久しぶりにゲームセンターに遊びに行つた。

そういえば…四人で集まるなんてことも久しぶりだ。みんな受験勉強で忙し

く、基本的には学校が終わると皆、即行で家に帰つていたからな…

俺ぐら

か…ゲームしてるの…

久しぶりにいろんな事を皆と喋りながら歩いている。それだけでもかなり嬉

しかつた。ここまで俺のことを心配してくれてるんだからな…

ゲームセンターに着いたが…さつきの言葉を取り消したいぐらい全員、普通

に楽しんでいる…なんだかなあ…

理沙と猛は格闘ゲームのコーナーに、実は理沙は格ゲーの世界では名の知れ

たプレイヤーだったりする。地元じゃ「リーサ」の名前を知らない

格ゲーゲ

ーマーはいなほど強かつたりする。

真志はクイズゲーム。ちなみに俺も強制参加。そんなことをして時間潰し

ていたが、ゲームの区切りがついたところで真志が俺にこいつ言つてきた。

「和輝、全部話せ。包み隠さずな。」

そんなこと言われても話せるわけがない。適当に言つていまかそうとしたが、

見抜かれた。そして

「俺はお前のこと親友だと思つてゐる。だから助けになりたいんだ。

「悪いが、知れば危険な目に遭つかもしない。だからこれ以上は言えないな。」

「ならなおさらだ。そんなことで離れるほど関係じゃないはずだろ?」「

そんな問答が続き、そして俺が諦めた。といふかその通りだ。結局、親友に

隠してどうなる?余計心配せられるだけだ。そして全て話した。まあ、驚きは

隠せなかつたみたいだけだ。当たり前だ。こんな話をまともに聞ける奴の

ほうがよっぽどおかしい。

「そりゃ… それじゃそのゲーム機つてやつを見せてもらおうかな。真志曰く、自分が見たことの無いものだつたら、なんとかその情報を探して

見る。だからそいつた面で協力してくれるそつだ。一人には秘密で。

そして格ゲーに夢中になつてゐる一人を無理やり連れて俺のうちに行くことに

なつた。

ま、これが全ての事の発端になるんだけどな…

ロード&ナイト 第十一章

「ロード&ナイト」

第11章 新たにパーティーメンバーを加えますか?」

「やっぱ大きいな、和輝の家。」

と真志が呟く。そういうえば久しぶりだったな…みんなが家に来るの…

「和輝の部屋つてどこだったつけ?」

と理沙が聞いてきた。

「階段を上つて、左に曲がった突き当りの部屋。先に部屋で待つてくれ。」

そういうつてリビングに入つていった。

「何やつてんだ? 和輝も来いよ!」

と猛が、つて綺麗にみんな一言ずつ喋つてんなあ…

「久しぶりに来ただろ? 飲み物と菓子ぐらい出すよ。」

「さつすが! 気が利くう!」

猛がいい反応をしてくれる。

「それじゃ、先に上がらせてもらつや。」

「いいけど、ゲームには触るなよ。」

その言葉を聞くと、皆すぐに上つてこつた。

『「そういうえば…久しぶりだな…」』
『「やつて家にみんなが来るのも…』

ゲーセン

で遊んだのも…みんな受験勉強で忙しくて、最近じゃ会話も殆どしてなかつたからな…』

もし、卒業した後バラバラになつたら…いや、卒業した後はみなバラバラの道に進むだろ? もしそうなつたとしても、またみんなで『やつて集まる

機会があるのか、どうでもいい話で盛り上がり出来るのか、俺のことを

覚えていてくれるだろ？…そんなことを考えながら、適当に人数分のコツ

プを取り、菓子を適当にお盆に乗せ、炭酸飲料を手に取り一階の自分の部屋

に向かった。なんだか楽しそうな話し声が聞こえる。

『久しぶりだから、皆楽しそうだな…たまには誘わないとな…』

そう思いながら扉を開けると

「ねえ！見てよ！私にそっくりじゃない？可愛い〜。」

と理沙が言っている。

「自分で可愛いって言つ奴があるかよ。」

と猛、

「みんな良い感じに似たキャラクターで良かつたな。」

と真志、そうか…キャラクターを作つて遊んでたのか…よかつたよ
かつた…

つて！良くな〜！！！

「お前ら人の話し聞いてたあ？ゲーム触るなつて言つたろ！」

扉を開けるなりそう言い放つたが、全員極めて何が？…という顔をしている。

あ〜もう！最悪だ…最悪の展開だ…よりもよつて全員巻き込んでしまつた。

「ていうかなんで起動したんだよ！なんでみんなで遊べてるんだよ！」

一気に質問したが、真志が

「テレビも本体も元々電源が入つてたぞ。それにアイカムも三つダンボール

の中に入つてたし…」

うん、もうそういうのには慣れたよ…勝手に電源入るわ、一人用だ
つたはず

のゲームにアイカムがあと三個付属してるわ、何故かキャラ製作画面が増え

てるわ！もういいよ！飽きたよ！このトンデモゲーム！

「俺はみんなに迷惑かけたくなかつたから真志にだけ話したのに…」

なんで止

めてくれないんだよ…」

そう頭を抱えながら言つていると

「だつたらなおさら起動してよかつたな。」

と言いやがつた。

「お前どれだけ人が悩んで…」

そこで言葉を遮るように

「俺らはそんな薄っぺらな関係じやなかつたはずだ。はつきり言つて隠して

一人で解決しようとしたのが迷惑だ。だからみんなにも危険性があることを言つたら快く引き受けたぞ！みんなそんぐりいお前のことを心配してゐる

んだよ！和輝！」

あまりにも堂々としている、といつか…俺がみんなのこときちんと分かつて

なかつたな…

「悪かつた…そうだつたな…お前ら昔から…」

人が困つてたら全身全靈を懸けて助けてた。俺もそうだつた、そうやつてみ

んな仲良くやつてきてたのにな…

「なあ和輝、これどうやつて操作するんだ？」

と猛が聞いてきた。

「これはアイカムをつけて脳波で操作するんだ。簡単に出来るからやって見せるよ。」

そんなことを言いながら、ゲームをみんなで遊んでいた。昔みたいに…

終わらないけどな。

しかし…パーティーメンバーが増えたことにかなり安心しているが、恐らく今やつと作ったばかりのキャラだ。レベルが1だろ？ そうなると新大陸に行くのは少し危ない。レベル差が激しいせいで恐ろしく厳しい戦いになってしまうだろ？

「「ザック」大丈夫だよー。みんなレベル合わせたから。」

早速、ザックが話しかけてきた。

「おお！ すげえ！ ホントに喋んのか！」

と猛が驚いている。そういうやみんなのキャラはどうなってるんだろう。と思

つたが、予想以上に分かりやすかつた。

「「グレイ」よろしくお願ひしますね、みなさん。」

マジシャン

この丁寧に挨拶してる奴が真志だ。見た目からすると魔道士。

黒衣に杖、そして「大層な本を持つていてる。見るからに魔道士だ。

「「リーサ」どうもよろしくお願ひします。」

次が、女性キャラという時点で理沙だ。見た目からすると祈祷師（

ト）。全体的に白を基調とし、手には何も持たないが、ロザリオの

ネックレ

スをつけていた。

「「ヒッジ」おうおう！ よろしく頼むぜえ相棒！」

分かりやすい。こいつが猛だ。見るからに武道家だ。

身動きのとりやすそうな服装、そしてこれといって何も装備していない。も

う思い当たるものが武道家しかない。

「なんで俺が武道家かなー。普通、俺がなるなら騎士ナイツとか暗殺者（アサシン）とかだろ。」

どの口が言つているーとつっこみたいが、そんなことを言えぱーいつは…

「あんたにお似合いじゃない。筋肉馬鹿で拳一筋なんて。」
理沙のやつが言つてくれやがつた。

「なんだと！ お前のほうがお似合いだろー！ この男女！」

「なによ！ 格ゲーで勝てないぐらいで…」

きれいに言い合いを始める二人… つてああもう…

「落ち着けよー！ 一人とも！ 理沙は変なこと言つうなー！ そして猛も突つ掛かるな！」

まだ腑に落ちないようなので

「猛、いいかモンクつてのはな見た目は確かに筋肉馬鹿だ。でも要するに武

器に頼らなくとも戦える武道の達人なんだよ。すげーと思わないか

？」

そんなことを言つてみると

「確かにーよーしー！ モンク極めるぜえー！」

と完全に意気込んでくれた。単細胞は扱いやすい。

「「ザック」パーティー組んだんなら隊列を決めたほうが良いぞ。」
とザックが言つてきた。確かにそうだ。こういづ RPG で大事なのは隊列。誰を

前衛に出し、後衛からサポートしてもらひうか、きちんと考へないと後々きつ

くなる。とりあえず…

「どんな隊列の型があるんだ？」
と聞いてみる。

「「ザック」えーと… 一文字、一点突破、守備一徹、臨機応変、先手必勝、細

工流々… こんなもんかな。」

えらく漢字が並んでるな… どうあえず「」せどんな状況にでも対応

できたほ

うがいい。臨機応変の型がひし形で最も使いやすそうだ。が、近距

離戦闘組

が二人だからなあ…「」は一文字か?いや、そうすると全員横並び、遠距離

戦闘組がダメージを受けやすくなる。一点突破が一番良いな。縦並びの型なら

一一番真価を發揮できるだろ?」

「ザック、一点突破でお願いする。」

「「ザック」OK!順番は?」

「ヒッジが一番前、一番田がお前、二番田がグレイ、そして最後がリーサ。」

そつ言つとみんなが指定された場所に並んで確認を取つてきた。間違いなさ

そうだな。

「なんで俺のキャラが一番前なんだよ…」

猛、どんだけ不満だらけなんだ…

「お前のキャラ、モンクだろ?どうせつて一番前以外から攻撃するんだよ。」

もちろん攻撃力は下がるが、一番田ぐらいでいい。

「あ、そうか!」

ホントに単純で扱いやすい。一応言つておくが親友だ。いいように扱つたり

はしてない。絶対にしていない。

「それじゃ田指すはシン・ホウユ大陸!大航海の始まりだ!」

そつ言つて定期船に乗り込んだ。勇者は定期船がタダらしい。ホントに勇者

つてのは得だなあ…船が進みだしてしばらくした頃、

「〔ミランダ〕 おお！恩人が乗ってるじゃないか！どうだい？」の船は。」

そこにいたのはミランダ。つていうか船長が船内フラフラするなよ…とつづ

こんだが、操舵はクルーに任せてるから安心との事だつた。ミランダとも出

会い、楽しく話をしていたが、船外から大声が聞こえた。

「「クルー」姉御ー！！海が荒れきました！」

「〔ミランダ〕 その呼び方はやめな！それに海が荒れたぐらいでなにビビッてんだい！」

しかし、そのクルーの様子がおかしい。

「「クルー」 それが空が急に暗くなつたんですよ。いくらなんでもおかしいです！」

急に暗くなつた？まさか…

「〔ミランダ〕 分かつた。クルーには乗員を全員船内に避難させるように言いなさい。」

そう言つてミランダは甲板へ上がつていつたが、嫌な予感がする…もしかする

るとあの時みたいに…

「〔ミランダ〕 なんだいありやあ！？」

そんな声が聞こえた。つまり何か得体の知れないものがあつたというふことだ。

すぐに全員甲板に上つたがそこに待つていたものは、俺の予想を遥かに超えていた。

「ロード&ナイト」

第12章 水のアルラグナ！

甲板に出て最初に見えた景色は、さっきまでの快晴が嘘のような大嵐。そして遠くに見える竜巻。さらにいつぞやのクラーケンまで…どうやらこいつらこんなにいつぺんに集まるんだよ！

「？？」アッハハハハハハ！あんたらかい？私の可愛いクラーケンをこんな姿にしたのは。

そんな声が聞こえ、ふと横を見るといつの間にかそこには薄く透き通ったよ

うな女性が立っていた。

「ミランダ」なにもんだい？あんたは！

そんな質問に一つ高笑いをし、緩やかな口調で答えた。

「アルラグナ」私の名前かい？私は魔王軍四天王が一人、水のアルラグナ！

クラーケンをこんな姿にしたんだ、タダで済むと思わないことね。そのアルラグナと名乗った女性は、確かに魔王軍四天王と言った。薄く透き

通り、全体的に水色がかつた姿、だが袖のよつた部分が常に揺れている。確

実に人間ではないのは分かっているが、魔物と言うには少し人間っぽ過ぎる。

が、一瞬で得体の知れないものだということを知らしめてくれた。アルラグ

ナがクラーケンに近づき、そつと触れただけで傷だらけだったクラーケンが元通りになってしまった。

「「アルラグナ」たあ、こんな船真つ一いつにしておしまーー全て海の藻屑とな

るが良いわ！」

くそつーどうするーーこままじやーーしかしその時、

「「ミランダ」主砲、放てつ！！」

そんな声と共に一気に爆音が木靈し出した。ミランダの掛け声で一気に大砲

を撃つていたのだ。

「「ミランダ」ここの船をなめんじやないよーあたしが船長である限り、ここの船

には傷一つ付けさせないよー面舵一杯ーー曰距離を取るよー船員は大砲が使えない間は銃で応戦しなー

流石はミランダ。もう船長が板についてる。

「「ミランダ」ザック！あんたもなにボーッとしてるんだいー自分

の仕事をし

なー」

そうだつたなーこっちのも相手しないといけないのがいたなー

「「アルラグナ」キイイーー小癪なー人間風情が！」

相当頭にきてるようだ。

「「ザック」覚悟しなーその人間風情にやられるんだからよーー」

剣を真っ直ぐアルラグナに構えてそんな台詞を言つザック。こっち

もなかな

か勇者が板についてきたなー

「いくぞー三段斬り！」

手始めは様子見、とりあえず物理は効くのか？そう思つていたら意外とダメ

一ジを「えられた。よし！」の調子で…

「ねえ、どうやって攻撃とかすればいいの？」

と理沙が聞いてきた。あ、そういうや説明はちゃんとしてなかつたな…「えつと…自分のキャラが動ける番が来たら、コマンドの中から…ちやつちやと説明したが、皆ゲーマー。簡単に理解してくれた。

「要するに私はサポートーね！任せて！」

そう言い、防御の姿勢を取つてターンを過ごした。

「次は俺だな…よし！魔法の…多分水棲だから電気が効くだろ…サンダー！」

と…

みんな慣れてるなあ…

「グレイ」裁きの雷！《サンダー》！

見事的中、アルラグナに大ダメージを与えていた。

「よーし！俺様の番だ！いけえ！正拳！」

これも見事命中、みんなホントに順応早いなあ…

「アルラグナ」逆巻き激流！《スパイラル》！

そう言うとなんと海の水が甲板に上がつてき、巨大な渦になつてこちらに攻

撃してきた。くそつ！威力からすると恐らく中級魔法…ならば…！

「ザック」光の力よ、全てを拒絶せよ…《リフレクト》！

すると自分を守るように光の壁が出来上がりつた。が一度で作れる光の壁は一

個までのようだ。

「よし！今度はアイスを唱えるんだ！」

真志はさつきから的確に水棲生物を弄つていてる。何の恨みが…

「グレイ」零度の氷塊！《アイ…」

そこでクラーケンが触手をこちらに呑きつけ詠唱を遮る。流石にミランダた

ちが応戦してくれていいといつても限界がある。結局、前回だつて

全力で戦

つて撃退することは出来たものの、倒すには至っていない。それを乗組員と

「ミランダだけでどうにかしようとしているのだから…

「ミランダ！無理をするな！そつちの相手もするから援護を頼む…」

「ミランダ」すまないねえ…相手は任せたよ。」

そう言って船の操作と大砲の指示に回った。後はこっちの仕事だが…

「アルラグナ」なめられたものね…私の本気を見せてあげるわ…」

そう言ってアルラグナは魔力を溜め、それをクラーケンに向かって放った。

その途端、まぶしい光に包まれ、一瞬見ることが出来なくなつた。

「「アルラグナ」またせたわね。これが私の本気よ！」

そんな声が聞こえ、そちらに目をやると、なんとアルラグナとクラーケンが

ひとつ体になつていた。

「「アルラグナ」海の藻屑となりなさい！」

そう言って触手でなぎ払つように攻撃してきた。流石にダメージが大きすぎ

る！くそつ！即行でケリをつけないと先に船がやられる！

「一連斬り！」

颯爽と駆け出し斬りかかるが、剣撃が全て受け流されるように滑り殆どダメ

ージを『えられなかつた。どういうことだ？全く効かないなんて…

「俺に任せな！要するに防御を無視すりや良いんだろ？いけエッジ！牙撃

い！」

猛が指示を出すと、エッジの拳がまるで獣の牙のようなオーラを纏い、鋭い

一撃をアルラグナに打ち込んだ。がそれも受け流され効果なし…

「グレイ」さつきのお返しだ…零度の氷塊！『アイス』！

そう言って拳ほどの氷塊を出現させ、アルラグナに飛ばすが、凍り

つくるもの

の、すぐにその氷が剥がれ落ちてしまう。氷さえも効かないなんて…

「「アルラグナ」フフフ…無駄よ…そんな攻撃は通用しないわ…」

くそつ…どうなってんだ?何故全ての攻撃が通用しないんだ?

「「アルラグナ」逆巻き激流!《スパイラル》!」

しかし、その魔法も無駄だ!リフレクトの効果がある限り、魔法は受け付け

ない!がその効果が裏目に出てしまう。なんと跳ね返した水流がアルラグナ

に当たると、やつとのことで与えた僅かな傷が治っていく。

「「アルラグナ」アハハハハハ!ありがたいねえわざわざ回復までしてくれる

なんて。でも私はそんなに甘くはないわよ!」

そう言つてもう一度触手で攻撃してきた。流石に一度は辛い。早く回復したい所だが…またリフレクトが足を引っ張つている。どうにかしないとな…そ

んなことを考えていたら。

「「エッジ」じゃあ俺がその盾、消してやるよ。粉碎拳!」

そう言つていきなりザックに殴りかかった。まあ、リフレクトは消えたよ…

ザックは瀕死だけど…

「「リーサ」迷える子羊を癒す力よ…《ヒール》!」

すかさず回復してくれた。ありがた…

「「アルラグナ」!」^{スパイラル}

ちょっとは空氣読め!くそつ…俺も回復に徹さないと間に合わないな…

「「ミランダ」何やつてんだい!主砲、は…」

「「アルラグナ」させないよ!津波!」

そういうて津波を大砲にぶつけた。これじゃ自分の間大砲が使えそ

うにない。

「〔ミランダ〕よくもやつてくれたね！お返しだよ！」

そう言つて銃でアルラグナを撃つた。ギリギリのところでかわされたが、何

故かい今まで全く焦つていなかつたアルラグナが急に発砲され焦つていた。

なんでもさつままで特にダメージを受けていないはずの攻撃であれほど焦つて

いるんだ？…まさか…！

「真志！グレイにファイヤを唱えさせるんだ！」

「ファイヤ？相手は水属性だから効かないと想ひついで。」

「いいから！はやく！」

そう言つと真志が渋々ファイヤを唱えさせてくれた。真つ直ぐアルラグナに

飛んで行き、命中。同時にアルラグナが激しく燃え上がりだした。

「〔アルラグナ〕キヤアア！熱い！何故、弱点が分かつた！」

そう、俺は途中でることに気付いた。打撃はともかく、斬撃や氷が効かな

いのはおかしいと思つた。そして鉄砲に対してもそこまでの焦りよう。つま

り当たれば大ダメージを受けるからだ。そこでもしかすると今、アルラグナ

を覆つている光沢は水ではなく、油ではないのかと思い攻撃した。まさに読み通りの結果になつた。アルラグナは一旦、海中に潜り火を消して

いるようだ。チャンスは今しかないな…そう思い、甲板ギリギリに立ち、そして頭の

上で剣を構えた、たつた一度のチャンスに備えて…

「〔ミランダ〕なにをしてるんだい！そんなところにいると落ちるよ

!

「ミランダが心配しているのが分かるが、これに賭けるしかない！」する」とアル

ラグナが浮上してくるのが見えた。

「ザック」今だ！両手斬りいい！！

そう言って剣を振り下ろしながら船から飛び降りた。剣はちょうど

アルラグ

いく。
ナの脳天を捉えていた。そこから下まで真っ一いつ行しながら落ちて

そしてそのままアルラグナと共に海中へ…やばい！忘れてた！ザツ
フが着て

かしアル

「「アルラグナ」ここなら大丈夫そうね…若き勇者よ、息はできますよ。」

場を作つ
てくれた。

「『アルラグナ』あなたの力は見せてもらいました。あなたなら魔王を倒すことができるかもしませんね……」

狀況が理解できない。どうなつてんぞ？

とかでさるかもしねえんれ……」

「ロード&ナイト」

第13章 パーティーと一時離脱しますか?」

「「アルラグナ」受け取りなさい。若き勇者、いえザック。水の力を…」

そう言うとアルラグナの体が輝き、小さな青色の光がザックに向かって飛んで行き、ザックにぶつかるとその光はザックの中に吸い込まれるようになってしまった。

「「アルラグナ」今すぐ使いこなせるとは思いませんが、いずれ必要になり、

この力を使う時が来るでしょう。」

「「ザック」待って!あなたは一体!?」

何者なのか聞こうとしたが、

「「アルラグナ」時が来れば分かります。行きなさい。」

そう言つてザックを水柱の上に乗せ、船の上に乗せるとそのまま後ろに倒れこむように海に消えていった。そこに残つたのは倒れこむときこできた波だ

け。空もいつしか晴れ渡り、何事も無かつたかのように田の光が射していた。

「「リーサ」ザック!大丈夫!?」

続けてみんなの声が聞こえた。

「「ザック」ああ、大丈夫だ。」

しかし…アルラグナの最後の変容、ふり…何かありそうだ…しかも魔

王を倒せ

…か…考えれば考えるほど分からぬ。

「〔ミランダ〕とりあえず、一件落着だね。さー氣を取り直してシン・コウキ

大陸を目指すよー。」

そう言つてまた大陸を田指して船が進み始めた。その後、何事も無く無事シ

ン・コウキ大陸の港町、ヤチマグ王国に着いた。新大陸初の王国に胸躍らせ

ていたが、どうもそんな空氣ではなかつた。恐ろしいほどに国全体が廃れているというか、活氣がないといつか…国民の顔にも余裕が無く、國中の空氣が淀んでいるかのようだつた。

「〔エッジ〕なんか…みんな元氣がないな…」

悪いがエッジ、今俺が言つた。

「〔ザック〕とにかく、この状態は異常だ。国王に直接会つて聞いてみよう。」

そう思い、王宮に向かつたが…王宮とは思えないほど酷い有り様だつた。

「〔国王〕おおー…來てくれたか旅の勇者よ…何卒私の話を聞いてくれぬか。」

そう言つてこの国の惨状を話し始めた。なんでもこの国は今、近くに住んで

いたアーマーリザードという魔物によつて食料を奪われ、家を壊され、さら

には王宮兵士では歯が立たない状況だと教えてくれた。

「〔国王〕すまない。先を急ぐ身であることは重々承知しているが、この国の

ため力を貸してはくれぬか?」

「ザック」もちろんです!」

返事するまでもないけどな。困っている人を放つておいて魔王を倒しに行く

なんて勇者としてあるまじき姿だ。

「「魔王」おおーなんとも頼もしい…それでは宿屋と武器屋、防具屋、道具屋

に無料で支援するように言つておく。十分準備を整えてから向かってくれたまえ。」

良い事をすれば必ず見返りがある。まさにそんな状況だ。よし…さつさと支

度をして討伐に向かおう!」

「和輝。ちょっと待つた。」

と真志が止めに入つた。

「どうしたんだ?」

「流石にこれ以上は時間がまづい。俺たちは帰らせてもらひや。」
そう言われて時計を見ると、もう結構時間が経っていた。時間の流れは無情

だ…皆がアイカムを外して帰らうとしたので、急いで止めた。

「待て待て!アイカムは絶対に外すなよ!言つたと思うがアイカムつけてな

いと死んじまうぞ!」

「え?あれマジで言つてたのか…そうか…仕方ないな。」

そう言つて真志がアイカムを取つた。

「今日和輝に言つたばかりなのに…私もこれつけて学校行くなんて

…」

「マジ…貰つていいの…やつたね!これかっこいいな!」

そう言つて二人ともアイカムをもつて帰つてくれた。一人だけノリが違う気

がするが…まあ、多分外さないでいてくれるだろう。見送る時にも再三言つ

たし…よし…続きを読むか…そつ思つて部屋に戻ると

「「ザック」みんなのロードは帰つたのか？それなら俺一人では行動できないぞ。」

そんなシステムなのか…面倒だな…まあそういう時にアイカムつけているから

ありえそうではあつたけど…どうするかねえ…

「「ザック」一応、仲間と離れて単独行動できるナゾ、ロードのいない勇者や

そのパーティーはその間、無防備だから安全を確保してやれよ。」

そういうことが…どうにかして確認を取つておきたいな…

「「ザック」アイカムはロード同士でも会話ができるぞ。会話したい人を指定して話せばいいから。」

ホントに便利だなあ「コレ…そんじゃ早速…

「真志。聞こえてるか？」

一応、確認を取る。と

「ああ、聞こえてるぞ。どうした？ていうかこんな機能もあるのか

…」

おおー真志の声だーすこになコレ。

「えつとな。今、みんな移動してるだろ？その間に進めたいんだけど、別行

動になるらしくいんだ。だからとつあえず宿にでも置いてから移動していいか

なつてそう思つたんだけど。」

「そういうことか。分かった。一人には俺から言つとくよ。じゃ、また明日、学校で。」

そう言つて通信を切つた。ひとまず、このみんなのキャラを宿に動かさない

とな……とつあえず誘導して宿屋に入った。ついでなので体力の回復も行った。

「「ザック」よしーだいぶ船旅の疲れも取れたことだしーさつと終わらせよ

うー

やつぱり疲れるのか…まあいいや。もう慣れっこだ。

「待て、その前に折角装備を整えられるんだ。きつちり準備して行こう。」

とは言つたものの、やはり国中が疲弊しているため、あまりいいものは無か

つた、が折角の「」好意だ、ありがたく使わせてもらおう。そして支度も終わ

り、そのアーマーリザードのアジトに向かうこととした。パーティーを組ん

だというのにまた一人でダンジョン攻略か…そう思ひながら町を出た。

新大陸始まって始めてのフイールド、気を引き締めないと魔物のレベルも上

がつてゐるはずだからやられてしまふかもな…それだけは避けないと…そう思

つていると早速、敵のお出ましだ。しかも相手はトカゲ男。フフッ…いづぞ

やのリベンジマッチといかせてもりおつか!

「勝負だートカゲ男ー!」

そう意気込んだが、

「「ザック」いやいや…アーマーリザードだよ。」

的確に訂正される…ちょっと恥ずかしい。

「知るかーどっちでもいいんだよー!」

「「ザック」よくないよー名前間違われて、その名前で呼び続けられたら嫌だ

ろー」「

確かにそうだが…何故そこまでトカゲ…アーマーリザードを庇つ…

「ア、アーマーリザード…勝負…」

「「ザック」先に謝れよ…」

久しぶりにザックが冷たい…泣きそうだ…

「ごめんなさい…」

とりあえず謝ったが、はっきり言つてアーマーリザードのまつも突然のこと

で困惑している。まあ…当たり前だ…とにかく、仕切りなおして…

「ザック！三段斬り！」

素早く駆け込み、三連撃を「えた。手応えあり！一気に畳み掛けるぞ！」と思

つていたが、あっけなくアーマーリザードは倒れてしまった。あれ

？…どうい
うことだ？

「「ザック」ロード…俺らも強くなつてんだよ…？そりゃあしょっ

ぱながらあ

んな強力な技使えば…」

うん…そうだつたね…この大陸に入る前に結構、強敵と戦つたからな…なん

だかしょつぱいリベンジ戦になつてしまつたが、勝ちは勝ちだ。ザ

ックは知

らんが俺にとつては宿命のライバルだったからな…

その後、しばらくすると人が倒れているのが見えた。ここはまた蘇

生用アイ

テムの出番だ…そう思い、近づいて早速アイテムを使おうとするが、反応が

ない。あれ？…どういことだ？

「「ザック」」の人、ロードが死んだから死んだみたいだね。これ
じゃ蘇生で

きないよ。」

今…何て言った…？

心臓の鼓動が自分で聞き取れるほど大きな音になつたことに気付く。
「待て待て…出雲さんは…クラウドさんはロードが死んでたんだぞ
…どうい

う」とだよ！」

「「ザック」そうだつたの？ てっきりクラウドさんが死んでたから
蘇させた

のかと思つてた。」

まさか…そんな…それじゃあ…もし俺が死んだら…みんなが死んだ
ら…

「ホントに蘇生できないのか？ 出雲さんは生き返つたぞ！」

そう言うと逆に驚かれた。

「「ザック」多分、バグとかだとは思つけど…まありえないよ。
出雲さんの蘇生でかなり安心していた…もし死んでもゲームをやつ
ている誰

かが助けてくれる。そう思つていたからだ…しかしそんな甘い考え
も簡単に

消し去つてくれた…本当にクリアするまでゲームオーバーになるこ
とができる

ない。それを考えるとより一層気を引き締めなければならない。改
めてそう

考え直し、その場を離れた。蘇生できない以上、連れ回せば自分の
動きを制

限する。まさに自然界の厳しさをそこにして現したよつた状態だ…俺
にできる

ことは唯、冥福を祈るのみだつた…

「ザック…本当にアイカムをつけてたら大丈夫なんだな？」

そう聞くと

「「ザック」大丈夫！ 必ず死なせないよ！」

そう自信満々に走ってきてくれた……たとえそれが心配させないための嘘だつ

たとしても、今の俺にとっては十分安心できる言葉だつた……

そのままじょじょに歩き続け、ようやく田舎の筋肌が見えてきた。国

王から聞

いた通り、ぽつかりと洞窟が開いていた。しかし、アジトとはよく

言ったも

んだ。中からこじらに気が付いたアーマーリザードが二匹現れた。よ

し……

「さつせと終わらせるぜー！ザック！」

「「ザック」当たり前だ！ぜりやああああーー！」

そう言って勇ましくアーマーリザードに切りかかった。さあ……ゲー

ムスター

トだ！

「ロード&ナイト」

第14章 武人の心！勇者の意地！

またしても洞窟な訳だが、前回よりも荒々しい。流石に魔物が作ったアジトだからな…松明は一應置いてはあるが、乱雑でかなり暗くなつている場所もある程だ。よくこんなので見えるな…！

「「ザック」かなりの数だな…」

ザックもすぐ気付き物影に隠れたが、本当にかなりの数がいる…流石に今出て行けば、弱いとはい、数で攻めきられる。それに見た限りでは剣を持つ

たもの、ボウガンを持つたものなどそれまでまったくないので、恐らく下っ端だけじゃないのが予想できた。ギヤー、ギヤー騒いでいるようにしか聞こえないが、

それで皆が動いているところを見ると、恐らく指示を出しているのだろう。

しばらく待つてみると、少しづつ数が減つた。どうやら戦力を散らしたようだ。

チャンスは今だが、流石にまだ早い。ヘタをすれば全員戻つてきてしまう。

ここは時が来るのを待つしかないか…

「「ザック」ロード！あいつ！」

ザックが小声で、指をさしながら言った先には、完全に他のアーマー

ーリザー

ドとは姿や装備が違う一体がいた。そつか…あが親玉か…よし…今しかな
い…

「「ザック」ゼリヤあああ…！」

素早く突つ込むが、流石にそこは魔物の反射神経。すぐにこじらり元気付き、

戦闘態勢をとつた。しかしそのまま斬りかかる。速攻で終わらせなければ

んどんこじらりが不利になるからだ。

「？？？」フン…人間にしてはなかなかやるな…」

なんとそのアーマーリザードが喋りだした。剣から力を抜いたつもりはない

が、はじき返されてしまつ。綺麗に着地し、相手に向け剣を構えたままで

「「ザック」喋れるのか…？お前は一体何者だ！何故、人間を襲う！」

そう聞くと

「「シヨウグンリザード」我が名はシヨウグンリザード！何を言い出すかと思

えば…やつてこむ」とは貴様らと同じ一生きるために奪つただけだ

！」

剣をこじらりに向けてそう言つてきた。

「「ザック」違う…みんなの安全を守るために、お前たちのように駄々奪をしたり

なんかしていいない！」

「「シヨウグンリザード」笑わせる…貴様らが我らの土地を奪つたというの

に何も奪つていないといつか…！」

凄まじい剣幕で叫ぶ。そつか…その怒りは分からんでもないが…

「「ザック」それは俺はなんとも言えないが…だからといって俺も

引くわけにはいかない！」

「そう言つてもう一度斬りかかるが

「「シヨウグンリザード」それは「あらじて同じ…」

「そう言つてもう一度剣を受けられ、弾き返される。力はあちらの方が上か…

「「ザック」だつたらやることは一つ…」

「「シヨウグンリザード」どちらが己の信念を貫くか！」

下段から素早く振り抜くがあちらもきれいに受け止める。

「「二人」斬り合つて確かめるのみ！」

ギヤリン！と剣同士が擦れ合い、火花が散る。まさに漢と漢の意地の張り合

いだ…負けるわけにはいかない！お互引くことを知らないため長い長い斬

り合いへと発展する。しかし、時間が経てば経つほど体力の差が現れてくる。

こちらは既に肩で息をしているが、シヨウグンリザードはいまだ呼吸すら乱れていない。

「「シヨウグンリザード」どうした？さつきまでの威勢は…貴様の信念はその程度か！」

くそつ！もう二人は大技に賭けるしかない！アルラグナ戦直後に覚えた技だ。

確実に大技のはず…

「四聖剣！水！」

そういうとザックが力を溜めだした。ザックの下に魔方陣が現れ、水の飛沫が上がる。そしてその飛沫が剣に集まり…それが全て散つてしまつた。

「「ザック」な！？何で…」

かなり動搖している。それもそのはず。技が発動する前に失敗したのなんて

初めてだからだ。

「落ち着け！もう一回だ！」

しかし、結果は同じ。再度剣に飛沫が集まりきる前に四散してしまつた。

「「ショウグンリザード」無駄なことを何度もするのが貴様の本気か！拍子抜

けだな…」

そう言つて剣を鞘にしまつた。

「「ザック」待て！まだ勝負は終わつてないぞ！」

「「ショウグンリザード」勝負は日に見えている。貴様では私には

勝てん。ヤ

チマグ王国を攻撃するのだけはもうやめてやろ。」

そう言つてじりじりに背を向けた。その途端、周りを取り囲んでいたアーマー

リザードたちも引いていった。

敗北ではないが…それに近いものだ。相手に自分の実力を見限られたのだが

ら実質、負けたのと大差無い。なんともいえない感情を抱きながら洞窟を後

にした。とりあえず、もう攻撃はしないと言つたんだ…その報告だけでもす

るか…そつ思い、トボトボとヤチマグ王国を田舎して歩いていたが、ある程

度進んだ時、目の前で誰かが魔物と交戦していた。

「「クラウド」燃え上がれ業火！《フレイム》！」

あれは…！クラウドさん…彼が唱えた魔法によつて彼を中心に炎の渦ができ、

それを両手を構えて集め、巨大な火球を作り上げ敵に向かって放つた。命中はしたが、敵も相当強いのか倒すには至っていなかつた。そのまま敵の亀み

たいなのが反撃してきた。

「ザック」カウンター！

そう言つてその攻撃のラインに割り込み、攻撃を受け止めながら反撃した。

「クラウド」おお！久しぶりだね！

言つほど時間も経つてないと思つが…ていうかこの人、もうこんなところまで

来てるつてホントに社会人なのか？

「ザック」まさかこっちでも合えるなんて思つてなかつたぜ…

そう言つて亀を滅多斬りにするお前が怖い…

「クラウド」そうですね！『スパーク』！

そう言つて以前より巨大な雷を放つた…こいつら…非道さに磨きがかかるつて

ないか？そして戦闘終了後…

「出雲」ハハハハハ…実はあの後、このアイカムをつけたままじや仕事に行

けないなーと思つて有給を取つたんだ。

なるほど…確かにそうだ。

「出雲さん…聞いてもらつてもいいですか？」

「出雲」なんだい？話してごらん。

俺はさつきのショウグンリザードのことがまだ突つ掛かつてた。この人なら

相談しやすいと思い、全て話した。

「出雲」ふうん…魔物にも色々いるんだね。そのショウグンリザードもただ

負けられないから戦つただけだろうし、聞く限りではかなりの武人

のようだ

ね。だからザック君を攻撃しないで返したんじゃないかな。」
意外と他人に淡々と言わると堪える。しかし事実だ。要するに俺
が弱かつ

た、そして発動すらしなかつた技に全てを賭けたことが気に食わなかつたの
だろう。それだけなら殺してもいいだろうが、あいつもあいつなり
に俺に強
くなつて欲しかつたのかもしれないな…

「「出雲」いいのかい?」こんなとこひで油を売つて。勝ちたいん
だろ? その
好敵手に。」

確かにそうだ…負けたわけじゃない。見逃されたんだ。もう一度、
真っ向か
ら勝負を挑まないとな…

「ありがとうございました。とりあえず今日は宿で休んで、もう一
度挑んで
きます!」

「「出雲」その意気だ。彼もそれを望んでるだろしね。」
そしてお礼を言い、出雲さんと別れ、宿にやつてきた。

「ザック。まどろっこしいことはナシだ。全力で己の持つ力をぶつ
けよう!」

「「ザック」あたりまえだ! 次は絶対勝つ!」
そう言つてザックは床に就いた。しかし翌朝…

「「国民」大変だーーー! リザードマンが攻め込んできた! 早く逃げ
ろー!」

そんな慌ただしい声によつて起された。そんなまさか!…確かに
約束して

いた。それにあいつが約束を破るような奴には見えない。この田で
確かめる

しかないか…そう思い、宿を飛び出して、攻め込んでくるリザードマンたち

を切り払いながら…リザードマン？トカゲ男じやねえかよ…結局、

トカゲ男

で間違いなかつたじやねえかよ…くそつ…ザック、後で覚えてろよ…

「「ザック」ぜやあ…みんなは早く安全な場所に避難して！」

流石にもうザックも勇者らしいな…言葉遣いはまだ治つてないけど…

「「リザードマン」ギャア…ギャア！」

「「ザック」うるせえ！雑魚共…引っ込んでろ！」

そう言って次々に切り払つていぐが…なかなか数が減らない。次々相手をし

ている途中、横から矢が飛んできた。危な…矢隊か…多分、今までの感じ

からして恐らく名前はアーチャーリザードだ。近寄つてすぐさま一

でも攻撃

したいが、アーマーリザードの物量攻撃がなかなか止まないため、動こうに

も動けない。くそつ…こんな時に魔法が使えた…

「「ザック」そういう魔法使えるよ。グレイに教えてもらつたし…」

そういうことはもつと早く言え…ていうかゲームなのに教えてもらつて魔法

とか覚えてんじやないよ…

「「ザック」炎の力よ、燃え上がり！《ファイヤ》！」

初の攻撃魔法は真っ直ぐに飛んで行き、見事に命中した。

「よし…この調子で蹴散らしながらあいつのところまで行くぞ！」

そして何故、こんなことをしたのかを聞かなきやならない。が

「「ショウグンリザード」何を一人の人間相手にしてこすつている…さつさと倒

せ…」

あちらから出向いてくれたわけだが…おかしい…以前と雰囲気が違

う...なん

とこうか...威圧といつものは前からあつたが、今のシヨウグンコザ
一ドから

感じるのは...それとは全く別の、おぞましい気配だつた。

「ロード&ナイト」

第15章 黒い気配…！」

なんだ！？あの異様な雰囲気は…確實に以前会ったショウウグンリザードなの
だが、まるで別人がいるようなそれほどまでの異質な気配を纏っている。そ

う…喻えるなら黒い…ドス黒いオーラを纏つたような雰囲気だ。

「「ショウウグンリザード」ハツ！誰かと思えば、あの時の腰抜け勇
者か！」

喋り方まで違つ…どうしたことだ…？

「「ザック」お前は一体何者だ！」

「「ショウウグンリザード」知れたことを…我が名はショウウグンリザ
ード！」の

大陸の入り口であるこの王国を攻め落とすよつ、魔王に命ぜられた
者だ！」

どういうことだ？確かに前会つた時は『生きるため』と語つた。し

かし、今は確かに、魔王に命ぜられたと言つた…なんなんだ？この変容振り
は…？

「「ショウウグンリザード」邪魔をするといつのならたとえ貴様とて
切つて捨て
る…覚悟しろ…！」

あれ？今、一瞬だけ…その瞬間、凄まじいスピードで間合いをつめ
て斬りか

かつってきた。危ない…気を抜いてたら一瞬でやられ…！

「ザック！あいつをもつと今までのショウウグンリザードだと思つたよ

！絶対に

手を抜くな！」

「「ザック」分かつてゐよ！それに元々、手を抜いて勝てる相手とも思つてな

い！最初から全力だ！」

そう言つて今度はこちらが間合いを詰め、渾身の三段斬りをお見舞いするが、

なんなくそれを受け止める。雰囲気は違えども、そこにこじるのには間違ひなく

ショウグンリザードだとこいつことを思いで出せせるような剣捌きだ。

「「ショウグンリザード」やはり……貴様との一騎討ちは心が躍る……このような

形だが……それでも十分だ……」

鍔迫り合いになり、間合いが近づいた時に、不意にそつと放つた。やはり

見間違ひではなかつた。一瞬、ほんの僅かではあつたが先日と同じ

ショウグ

ンリザードがそこに居た。

「「ショウグンリザード」貴様らも何をモタモタしている…さつさと王國を崩

壊させろ！アーチャーリザードとブレードリザードは私の援護をし

る！」

何！一騎討ちじゃないのか！くそつ！だつたら間合いが大事だ……

「ザック！一旦離れろ！周りの敵を先に倒せ！」

ショウグンリザードも一旦距離を取り、弓矢隊の一斉射撃が来た。流石に避け

けられる数じやない。何発かは当たつたが、まだ痛手ではない。先手を打た

ないとどんどん苦しくなつてしまつ。

「「ザック」回転斬りいい……」

次々切り落つていいくが、それでも数が尽きない。さりとて国中にただ暴れまわるだけのリザードマンたちもいるほどだ。終わりが見えない。

「「ザック」卑怯だぞ！あんたはそんなことするような人？じゃなかつた！」

「「ショウグンリザード」なんと言われようが知つたことか。私の目的はこの

王国の陥落。貴様の相手ではない！」

流石に一対多じや勝ち目が無い…しかし！負けるわけにはいかない！

「「ザック」あんたに真っ向から俺の本当の力を見せなきゃ意味が無いんだ！」

「「ショウグンリザード」私の知つたことではないわ…！…わざと終わらせん

か！この出来損ない共！」

俺のことをけなそうが何しようが構わん…でも…

「「ザック」あんたはそんな簡単に仲間を捨て駒にするような人？じゃない！

前言つてただろ！私が戦うのは生きるためだつて！一族のためだつて！

生きるためは言つた。だがザック。一族のためなんて一度も言つてないぞ。

「「ショウグンリザード」よく聞けえ！若き勇者よー貴様の前にいるショウグ

ンリザードは、もつ貴様の望んでいた敵ではない！私は既に魔王の忠実なる

僕！私の意志は信念は、もつこのショウグンリザードには存在せぬ

！」

そつ遠くの丘から大声で言つてきた。どうにつけだかは分からな
いが、要

するにもう、今のショウグンリザードには生きるために、ただ

強いもの

と真っ向から戦いがために見逃したあのショウグンリザードではないと自分

で言つているわけだ。それでも……！

「「ザック」あんただつて武人なんだろ……そつじゃないとあんなことは……俺を

過ちに気付かせ、もう一度真っ向から戦うチャンスを『えたりなんかしない

はずだ！いつたまにがあんたをそんな風にしたんだ！」

それでも未だ、弓矢隊の攻撃は止んだものの、ブレードリザードの猛攻が続

いていたため、一瞬たりとも気が抜けない。

「「ショウグンリザード」何度も言わすなあ……私の意志は魔王様の意思！魔王

様のためならば己の信念なんぞ、すぐにでも曲げて見せるわ！」

そういうことか！魔王の奴……昨日ザックが寝てる間に何かしやがつたな！そ

うしなきや武人が簡単に自分の意志を曲げるものか！

「「ザック」邪魔なんだよ！雑魚は引っ込んでやがれ！俺が用があるのはあい

つだけだ！武人の心を持つた……搖ぎ無い信念を持つた……頑固でただの負けず

嫌いで意地つ張りなだけのショウグンリザードなんだよ！散れええ

！！回転

斬りいい……！」

「「ショウグンリザード」言つたはずだ！諦めろ！もうそんな奴はない！こ

こにいるのは魔王軍支配下の内の一人、土竜のショウグンリザードだ！貴様

の望んだ武人はもはや死んだ！」

「「ザック」死んでなんかいない！確かにあなたはそこにいる！そして少なくとも俺に助けを求めてる！それだけは分かる！」

「「ショウグンリザード」誰が人間風情の助けなど受けたか！貴様も早く野

たれ死ぬがいい！」

くそつ！くそおおおお！誰だお前は！誰だ！武人のプライドをそんな簡単

に踏みにじる奴はあ！！

「「ショウグンリザード」相手はたかが一人だ！量で押し切れ！何人犠牲にな

ろうと構わん！これは魔王様のためだ！」

くそつ！駄目だ…流石に多すぎる…このままじや…あいつに会つ前に負けち

まつ…

「「？？？」押し流せ！激流！《アクア》！」

誰かがそう唱えると、ザックを避けるように水流が流れ、周囲にいたリザード

ドマンたちをいとも簡単に押し流してくれた。

「「？？？」構ええ！撃てええ！！」

その号令とともに一斉に銃による射撃が行われる。

そうか…忘れてたな…こちらにも俺の友達以外に…

「「クラウド」周りの敵は任せてくれださい。リーダー。」

「「ミランダ」なんかい？派手なパーティーするんなら呼んでおくれよ。」

仲間がいる！

「「ショウグンリザード」チイイ…さつさと始末しろ！たかが数人増え多だ

けで…」

「「子分」姉御…大砲の準備が出来ました…いつでもいけます…」

「〔ミランダ〕いいー私のことはキャプテンって呼べって……いや……

今はそつち

のほうがいいね。射撃体勢で待つてなー私の号令で一斉発射だよー」
気が付けばミランダの後ろには軽く50人は超えるほどの人が、銃

やら大砲

やらを構えて待つていた。

「〔ザック〕みんなークラウドー」

「〔クラウド〕因縁の相手なんだ。きちんと決着をつけないと……もちろん横槍

は入れさせませんよー！」

「〔ミランダ〕言つただろ？ 賊つてのは義理堅いんだ。一生賭けて

でもこの恩

は返させてもいいよー！」

いこことはやつぱしたほうが良いな……必ず返つてくる。どんな形でも、その見返りつてのはなー！

「ありがとうー！ 一人ともークルーのみんなー！ 気に勝負を仕掛けるぞー！」

全力でショウグンリザードに向かつて駆け出す。ある程度はクラウドさんが

倒してくれるが、倒し損なつた敵もいたため、そいつらを斬り払いながら速

攻で間合いを詰めた。

「〔ショウグンリザード〕流石だな……それでこそ勇者、勇ましき若き勇者だ！

我が全靈の剣で応えよー！ 来いー！」

「〔ザック〕ぜりやああああー！」

凄まじい剣撃の応酬。お互いに一步も引かない、譲れないといふ思いののみで

ぶつかり合つた。そこにあるのは《負けたくない》……その思い、その

意地だけ

だつた。しかし…

「「シヨウグンリザード」いいのか？私なんかの相手をしていて…」このままで

は国民がどうなることか…」

入れ替わり立ち代りで登場する「いつが、二人の決闘を邪魔してくれる。

「「ザック」知つたことかよ！それにみんなが食い止めてる！後ろを気にする

必要なんかないんだよ…」

「「シヨウグンリザード」フハハハハハ！それが勇者の台詞か！弱き者を助け

ずして勇者を名乗るか！所詮は貴様も屑のよつな人間だと言つ」とだ！」

無視だ！このいつの言つてることはシヨウグンリザードが言つてゐる」とじやな

い！

「「シヨウグンリザード」どうした！剣の動きが鈍いぞ！貴様はその程度の覚悟で私に挑み直したのか！」

「「ザック」誰が！絶対に負けられない！あんたを倒さなきやいけないんだ！」

そう言つて再度剣撃を加える。なんとかシヨウグンリザードの言葉で揺らぐ
心を抑えてくれる。しかし、やはり体力の差がまた現れだす。一度
剣を弾き、
間合いを取り直す。

「「シヨウグンリザード」どうした？もう息が上がつてゐるじゃないか。そろそろ大技で決着をつけんと負けてしまつぞ？」

くわおおおーー「つるせーー」その声でそんなことこうじやねえ！

「～～～」ザック

どいからともなく声が聞こえる…

「～～～」ザック…よく…聞け…

この声は…シヨウグンリザードー・ビーフィーとだ～皿の前でいつも話してこるの…

「シヨウグンリザード」貴様の剣、しかと受け止めた。今度こそ迷いは無い

ようだな…

当たり前だー…わざから何度もあこひに揺れぶられてるが、あなたとクラウ

ドさんの言葉で俺は剣を握られるんだ…

「シヨウグンリザード」私が自我を取り戻す」とはもつ無い…このままであ

れば私は…生きる」とが出来るかも知れん。だが…武士として…一族を率い

るものとして生きていこうとは出来ない。やつなることだけは避けたい…こ

んなことを頼めるのはザック、貴様だけだ…どうか、どうか私を武士として

死なせてくれ…それが私の最後の望みだ…頼む…

最後にそう、言い残してその声は聞こえなくなつた。

「シヨウグンリザード」まあ…見せてみなーお前の大技を…最強の剣技を…

完全に誘つてやがるな…いいだろ？…見せてやるよ…

「ザック」これが俺が使える最強の剣技だ…食らこな！

そつとつて剣を後ろにしまつように構える。その途端、シヨウグンリザード

が一気に突つ込んできた。

「「シヨウグンリザード」馬鹿がーその時を待つてたんだよー死ねえ！」

そう言い、剣を振り上げた。

「「ザック」悪いなーお前の予想通りじゃないぜー俺が応えた最強の剣技は…

お前なんかの望む技じゃなく…シヨウグンリザードの望んだ技だ！」

「五月雨斬りいーー！」

その瞬間、凄まじい剣撃の嵐を打ち込んだ。

「「シヨウグンリザード」なにー四聖剣じゃないとー？」

そのまま連撃を加え続け、最後に真っ直ぐにシヨウグンリザードの胸を深く突いた。

「ロード&ナイト」

第16章 間の波動！

「シヨウグンリザード」何故だああああ……貴様は確かに最強の剣技とおお

お……魔王様ああああ……申し訳ありません……」

その捨て台詞と同時にシヨウグンリザードの体から黒い霧のようないいものが溢れ

出してきた。しかし、それは体から離れると同時にまるで煙氣などでもなった

かのよう、空の色に溶けていった。

「シヨウグンリザード」よくぞ私を武士として死なせてくれた……有り難う。

若き勇者よ……」

気が付けば、田の前にいるシヨウグンリザードはいつも通りの、威厳溢れる

姿に戻っていた。しかし、その胸には、突き刺したままの剣が……

「ザック」ごめんよ……でも、確かにあんたに見せたぞ……俺の最強の剣

技……だから……もう一度、もう一度真剣に戦いたいんだ！死なないでくれ！」

そつ、涙ながらに語るザックだったが、シヨウグンリザードは

「シヨウグンリザード」ハハハハハ……すまないな。残念ながら私はこの程

度の傷では死なん。リザードマンの一族は、魔物といつものはかな

り丈夫な

のでな……」

そう言って胸に刺さった剣を引き抜いた。

「「ザック」なんだよ！死なないんなら殺な」と、口で罵りて脣かすなよ！」

と虚勢を張つてこる。やつをまだ泣いてたのは、ついでやつ……

「「シヨウグンロザード」確かに私は生きてこる。武士として、一族を率いる

者として……だが、私は魔王の命を果たすこと出来なかつたのだ。

その意味

は分かるな……」

そう言つた途端、空が暗くなり……いや、暗くなつたなんて言葉では表現でき

ない。まるでこの世の終わりでも来たかのよつた、紫とも黒とも言えない色

に空一面が染まつた。

「「ザック」なんだ！？一体どうなつたんだ！？」

うろたえるザックを宥めるよつこ

「「シヨウグンロザード」魔王は、命令を下し、もし、その命令をした者が何

らかの理由でその命を達成できなくなつた時、その役立たずを始末する……つ

まり、私は魔王にとつて不要な存在といつわけだ。」

そんなんとも言えないような色の空から、どす黒い何かが真つ直ぐにこち

らへ向かつて落ちてくるのが見えた。

「なんだあれは……」

「「シヨウグンロザード」あれば、その命を果たすことが出来なかつた者への

制裁、といったところだらうか……ああ……早く私から離れるのだ、若き勇者よ、

「……では眷を添えを喰う。」

そう言つてザックの背を押して、離れたせよつとしていた。

「「ザック」待つて！それじゃせつかく生き残れたのに…元に戻つたのに意味

が無いじゃないか！…」

「「シヨウグンリザード」せめて、私を武士として生きさせてくれて有り難う。

だが、私の命はここに尽きるしかない。魔王の制裁は、我々魔物には避ける

ことが出来ないのだ。」

だんだん黒い閃光が近づき、辺りがさらに暗くなつたのが分かる。

「ザック！早く離れるんだ！シヨウグンリザードのせめてもの氣遣いを汲み取つてやれ！」

「「ザック」くそお！嫌だ！せつかく元に戻れたのに…」

まだ離れる気が無いようだが、もうこれ以上近づいたら危ない。

「「シヨウグンリザード」せつと離れんか…貴様は蛮勇ではないはずだ！」

若き勇者よ、いや…ザックよ！魔王を倒すのだ！貴様にしか出来ん！さらば

だ…！」

その言葉と共に、黒い閃光が降り注いだ。凄まじい衝撃と轟音、そして粉塵が原因で一人の姿が見えない。まさか…一人とも直撃したか…しばらく経

つと、煙が晴れてきた。そこには地面に倒れこんだ一人の姿…

「「シヨウグンリザード」何故…助けた…命を危険に晒してまで…どうやら間一髪のところで当たつていなかつたようだ。まったく…

冷や冷や

させやがる…ま、俺もその場に居合わせたらやつしてただろうけどな。

「「ザック」よかつた……死んだと思つた……ギリギリセーフってと
こか……」

ザックがショウグンリザードに思いつきりタックルでもしたのだろう。着弾

地点の凹んだ大地から離れた位置で、ザックがショウグンリザードの上に乗つたまま、硬直していた。今になつて怖くなつたか

「「ショウグンリザード」今一度聞う。ザックよ、何故、命を賭けてまで私を助けた……」

「「ザック」へ？いや……なんでつて言われても……考えるよりも先に、体が動い

たつていうか……助けなきやつて思つたつていつか……」

「「ショウグンリザード」フ……フハハハハハ……やはりお前さんは面白い！

魔物である私を、助けなければならんと思つたか……やはり私が見込んだだけ

はあるようだな……ハハハハハ……！」

そう言つてとても楽しそうに笑つた。

「「ザック」なんだよ！……そんなに笑わないでもいいだろ！」

フフフ……悪いな、ショウグンリザード。ここつは俺の映し鏡みたいな奴だ。

だから、こいつはそういう奴なんだ……後先考えず、ただ困つてる奴を助けた

かつただけだ。

「「ショウグンリザード」ハハハ……すまない、すまない……しかし……

そもそもどうでもいいだろ？……のままで私は起きられんぞ。」

いてもらつてもいいだろ？……のままで私は起きられんぞ。」

そう言つたショウグンリザードの言葉にザックが反応した。

「「ザック」……そだ！……忘れてた！……まだ飛んでくるかもしねの

「…」

そつぱつと急いで起き上がり、空を見上げるが、セヒにまつも通りの空が

広がっていた。

「「シヨウグンリザード」心配する」ではない。魔王の制裁は魔物が動くこと

ができる。だからこんなことせよ想していないのだ。まさか勇者が体を張つ

て魔物を助けたなどと夢にも思つまい。」

そういうことか…しかし、それで死を確認せずに断定するなんて、魔王もか

なり甘いな…まあ、動けないんだつたな…

「「ザック」ホント！良かつた…あー…でも…どうじょつか…」

そう言つて後ろを振り返る。ともう攻撃はしていなかつたが、既に

街はボロ

ボロだつた。

「「シヨウグンリザード」我々リザードマンが始めたことだ。さうに私は約束

まで破つていい。非はこちらにある。直接国王に話やつ。」

しかしながら…そつは言つても…色々と言いたい事があつたが、どう

見ても聞

く気が無かつたので、仕方なく国王の元へ案内した。

「「国王」つまつ…そなたがこのリザードマン達の長であり、今回の一件の首

謀者であると…そういう事かね？」

国王に向かつて、シヨウグンリザードは今回起きたことを事細かに説明した。

国王は、玉座から動かずに、しかし穏やかな表情でその話を聞いていた。

「えつとですね…要するに、彼が望んでやつたことではないんですね

よ。その

……なんだっけ？魔王の放った黒い波動だっただっけ？それによつて操られてそ

うするよつに仕向けられたんですよ。だから……その……彼に……ショウグンリザ

ードさんに本氣で街を破壊する意思は無かつたといつか、なんといつか……」

必死にショウグンリザードの弁護をするが……どう聞いても苦し紛れだ。」（ん

な変な弁解を国王が聞く耳持つはずが無い。やう思つてみると。国王は二口

りと笑い、緩やかな口調でこいつ言つた。

「「国王」そうか……つまり、ショウグンリザード。そなたが望んでいたことで

は無かつた。それは真なのか？」

ショウグンリザードの返事は……頼む！素直に、素直に答えてくれ！

「「ショウグンリザード」はい、確かに私が望んで行つたことではあります。

しかし……私がこの国を襲い、崩壊寸前まで追い込んだのも事実。一族の命は

救つて欲しい。だが、全ての者を許すことは無い筈だ。故におこがましい事

ではあるが、どうか私の命を持つて償う、みなの今後は触れないでいて欲し

い。後生だ。」

そう言つて膝をつき、深々と土下座をした。

「「ザック」え！ええ……いや……あ、あの……どうか……」の……」

完全に動搖しているザック。そんなザックを横目に、国王は

「「国王」ふむ。確かにそうだ。此度の襲撃によつて、国は崩壊寸前、国民に

は搖ぎ無い恐怖が植え付けられただろ。ならばナジメはつけねばなるまい。

しかし、そこまで頼み込まれるとはな…どうしたものか…

口に手を当て、物難しそうに考え方をしてくる。が、はつきり言つてこつち

は氣が氣じやない。もし、国王が首を横に振ればそれで全てが終わる。俺も

ザックもただただ祈るのみだつた。

「〔国王〕そりゃ…いこことを思つて。シヨウグンリザードよ、顔を上げてくれ。」

「〔シヨウグンリザード〕はー。」

そう言つて、正座のまま国王の方を見る。すると国王は、嵐のような険しい表情をし、

「〔国王〕あなたや、リザードマン達への怒りや悲しみ、憎しみを持つた国民が多い。もし、そんな中にそなた達が行けば、すぐに非難囂々となり。」

そこまで言つて、今度は太陽にも似た笑顔で、

「〔国王〕そんな中で、この国を再び、人が住めるようになるまで再建する」

と。それが犯した過ちへのけじめだろ。よろしくかな?」

そう言つた。

「〔シヨウグンリザード〕しかし…それでは私の氣が治まりません。」

そんなことを言つシヨウグンリザードに対し、極めて笑顔で

「〔国王〕確かに、私がそなたの首を刎ねることは簡単だ。しかし、そんなこ

とをしてしまえば、再建にかかる時間が延びてしまう。だから、一

刻でも早

く、再建をして貰つた方がいいととしては得なのだ。分かるかね？」
そう言つてひきあらひ田配せをしてくる。ああ……なんて心の広い方なんだ…

「「ショウグンリザード」フ…もしかすると、私は人間というものを誤解して
いたのかも知れないな…分かりました。一族総出で、再建に当たら
せていた
だきます。」

そう言つてもう一度、深々と頭を下げた。

「「国王」なに…我々とて、魔物というものを誤解していた。これからは共に

力を合わせるべきだ。そつは思わんかね？」

そう訊ねると、ショウグンリザードは無言のまま小さく頷いた。

「「ザック」流石は国王だ！あんたすげえよ…」

と本人は国王に感謝しているのだろうが…

「ザック！いい加減にその言葉遣いどつにかしろ！相手は国王だぞ
！」

と叱つた。すると国王がこちらを宥め、ザックに

「「国王」私は気にはしていないが、そういうことを気にする者も
この世には

たくさんいる。氣をつけなければそのうち、牢獄送りにされるかも
知れんぞ。

いいのかい？そつてしまつても。」

と優しくザックに説教をした。いやもつ、仮のよつな人だ…流石に
ザックも

身にしみたようで、きちんと謝つていた。

「「ショウグンリザード」では、これにて。私は皆と共に王国の復
興に当たり
ます。」

そう言って、王宮を出て行つた。

「「ザック」あ、待つてよー！」

そう言って学習能力の無いザックが、ショウグンリザードを追いかけていつた。

～ロード&ナイト～

第17章 未来への架け橋

「〔国王〕おおー、勇者ザックよ、少し待ちなさい。」

そう言ってザックを引き止める国王。

「〔ザック〕そなたにも感謝しておる。そなたのおかげでこの国は救われた。」

そう言ってザックに深々と頭を下げるが、

「〔ザック〕いえ、はつきり言って俺、自分は何もしていないので

…クラウド

さんの、ショウグンリガードの、マリンダさんや定期船のクルーのおかげで

す。」

そう言つと国王は困った顔をして

「〔国王〕ふむ… そりか… なれば、そのクラウドとマリンダとその仲間にお礼

を言わねばならんが… その者たちは今、どうしてここのかね？」

そう訊ねてきた。あー… そういえば… クラウドさんはあの後直後に、

「〔クラウド〕すまない。私のロードはあまり時間が無いやうだ。

先を急がせ

てもううよ。それじゃ、また縁があつたら会おう。」

そう言って別れ、ミランダは、

「〔ミランダ〕すまないね。定期船を遅らせるわけにはいかないから、もう行

かせてもらひよ。でも、私に出来ることがあればなんでも手伝つか

らね…」

そう言って定期船に戻ったのだった… 一人ともいないな…

「「ザック」えーと…その…一人ともすぐ戻つてくると思いますし、戻つてきた時にでも…」

その言葉を聞いて、国王は

「「国王」そうか…一人がいないのであれば、そなたが代表になるべきではな

いかね？」

そう言つてきた。本当にこの国王は頭が切れる。

「「ザック」いや…でも…」

「ザック、素直に認めな。国王はお前を認めてんだよ。」

事実、ザックが今回、動かなければどうなつていたか分からぬのだから…

「「国王」そうだ…せめて何かお礼がしたい。なんでも言つておくれ。」

そう申し出してくれた国王。そうか…だつたら…

「「ザック」あの…それじゃあ…一つだけお願いしてもいいでしょ

うか？」

二人とも頼みたいことは決まつていた。

「「国王」二つか…面白い者達だ…申すがいい。」

そう言つて贅沢にも二つの願い事を聞いてくれた。

「「ザック」えつとですね…」

「「国王」なるほど…一つは既に叶つている。では、早急に二つ目の願いを

叶えよ。」

そう言つて快く、願いを聞き入れてくれた。その後、お礼を言い、

足早に王

宮を出てショウウグンリザードのところに走つていった。

「「ザック」おーい・ショウウグンリザードーー」

呼ばれたことに気付いたのか、ザックのほうを振り返り、

「「ショウウグンリザード」ザックか…どうしたのだそんなに慌てて

•
•
•
L

「ザック」ショウグンリザード達が街を修復し終わつたら、みんなここに住

んでいいって！国王から許可が下りたよ！」

そう、嬉しそうにショウウグンリザードに喋りかけるザック。

「シヨウグンリザード」それは有り難いが…流石に我々もそこまで世話をこな

「…」

少し困った表情をしてショウグンリザードは答えたが、ザックはどうしても

「……みんなと暮らして欲しいと、駄々をこねる子供のように言つ

すると

「〔国王〕親しき仲にも礼儀あり。ですぞザック殿。」

そう言いかば田かやこできたら俺がいいだまほのいいと金へ置くかないく

やうに……日本へ國へのふれあひのかり言ひうとを聞あやがる。

「國三」それにはさうして「アシタサ」一風吹きがこの國に残つてはく

れぬだろ？ 我々が魔物と人間の新しい架け橋になろ？ ぞ。」

れでは我々

「 」

כטערן

たが、ザックがそれを呼び止め、

「サ、タ」「ああせん」「…」田の願いの言葉…

「〔国王〕大丈夫じや、早急に当たらせておる。そなたは本当に優しき者だ。」

そう言つと今度こそ王宮へ帰つていつた。その背中にザックはお辞儀をしていた。

「「ショウグンリザード」国王に何を頼んでいたのだ?」

「「ザック」ああ……それは……」

町外れ少し前までリザードマン達がアジトとして使つていた洞窟に行く途

中の道、そこにショウグンリザードを連れてやつて来た。ザックがお願ひし

た二つ目の頼み事とは……

「「ザック」この人です。この人の供養と埋葬をお願いしました。」

そう言って、見せたほうにいたのは……以前置いていつた名も無き勇者の遺体

だつた。

「「ショウグンリザード」この者の供養を……ザック、そなたは自分の願いをせ

ずにこの者のために国王に頼んだのか……優しき心を持つてゐるな……」

そう言ってザックのほうを見直した。

「「ザック」いいんです。自分の中でも心残りだつたし、それに……」

結局この人に何もしてあげることが出来なかつたので……別に欲しい物もなかつたですし……

これが一番して欲しかつたお願いなんで!」

ザックも少しずつ変わりつつある。ただの世間知らずの少年だったザックが、

今では周りのことも気遣える優しさも持つてゐる……なんていうか……

子を見守

る親の感覚見たいなもんなのかな……嬉しいけど、ちょっと寂しい……

「「ショウグンリザード」ザック、我々リザードマン一族は互いを認め合つた

時、親しき仲として相手を認める。私はザック、お前を友としたい。

「 急にそんなことを振られたので、ザックは少し戸惑っていたが、内容を理解

するとしても嬉しそうな顔をして

「 「ザック」もちろん…よろしくお願ひするよ…」

「 「ブライ」私の一族での本当の名はブライ、我が名を示してザック、そなた

を真の友とする。」

そう言つてザックの胸に拳を当てて言つた。ザックに同じようにしてくれと

言つて

「 「ザック」俺の名前はザック、我が名を示してブライ、そなたを真の友とする。これでいいのかな？」

そう言つてブライの胸に拳を当てた。すると

「 「ブライ」これからは互いに親友だ。私が出来ることならば全ての力を持つ

て手助けしよう。」

そう言つて氣高き武人、ブライは残りの仕事があると言つて、町に帰つていつ

た。その後、その遺体はきちんと埋葬されたそうだ。時間も結構長い時間に

なつてきたし、そろそろ止めて飯でも食つか… そういうや… 何か忘れてる気が

するけど… ま、いいか…ザックを宿に帰し、セーブをして下の階に降りた。

あれ？ そつこや物音が聞こえない。部屋も暗いし… あれ？ なーんかこのパタ

ーン前にあつたな…リビングに行くと、部屋が暗い。電気を付け、

テーブル

を見ると、またしてもメモが…

「

和輝へ

おかえりなさい、和輝。実は今日は結婚記念日なので一人だけで外食にいっつます。ゴメンネ 記念日ぐらうに夫婦水入らずつてもいいわよね？お弁当代置いておくから弁当を買ってきてね。それじゃ、後はよろしく！

母より

P・S

卓也の分も買っておいてね♪

「

まったく…そこまで期間空いてないのに、また夜の道を一人歩きかしちゃう

がない。行かなければ飯は無い。それに今回はもし万が一、いや億が一出た

としてもアイカムがある。ザックの言葉を信用しよう。やつ思つて外に出ようとしたとき、

「和輝！なんなのよコレ～！ホントにびっくりしたわよ！」
と、急に通信が入った。理沙か。ことはエンカウントしたのか…
そう思つ
てこると

「和輝！コレ面白いな！しかもこんな機能まで！便利だな～。」
声の主は猛だな。こいつだけ状況を楽しんでるな…

「お前ら、あんまはしゃぎすぎんなよ。はたからみりやただの馬鹿
だ。」

さらりと真志も加わる。

「あんまり無茶すんなよ。それとおもちやじやないから人に向かつ
て使うな

よー」

「はーはー、分かってる。」

「大丈夫だよ。そこまで馬鹿じゃねえ。」

あれ？ 真志から返事が無いな… もう切つてたのか… でも… なーんか
おかしい

な… そんなことある奴じやないのに…

「じゃ、また明日。学校で。」

そう言つて通信を切り、家を出た。前回同様、行きは何事も無かつ
た。

『このまま帰りも何も起きないでくれよ…』

そんなことを思いながら、弁当片手につりを田指して帰り路につい
た。前と

同じならあの場所、街灯と街灯の、明かりの届かない場所から出で
くるだろ

う… 足早に通り過ぎると何事も無かつた…

『よかつた… よしー早く家に帰ろー。』

そう思つた矢先、やつぱり登場した。なんだかなー… 僕がフラグ立
てたから

か？ 仕方ない… わあ… こいつヤセのリベンジマッチだ！

「あーもしもし~。ロード~戦つならサポートするよー。」
あ、そういうシステムなのか…じゃあ、改めて…
「ゲームスタートだ!」

ロード&ナイト 第十八章

「ロード&ナイト」

第18章 再戦！リザードマンー！

「ロード、とりあえず説明するか。」

説明つて…相手は待つてくれそうにないんだけど…

「とりあえず、今何装備してる？」

「装備？いや、何も装備して無いけど…」

「出かけるなら剣ぐらい装備しとけよ…」

いやいやいや！剣とか持ち歩けるか！銃刀法違反になるわー…と言ったかった

がこいつらの世界では普通だつたな…

「じゃあ剣技は使えないか…まつたく…」

持ち歩けないがこいつの反応は腹立つ…しかし、そんなことを考える間に

もリザードマンは容赦なく俺を攻撃してきた。ただの引っ掻きだが、ただの

人間が喰らえば恐ろしいことになる。紙一重で避わし続けるが、遂に背中が

壁にぶつかる。

『やばい…！…のままだと死ぬ…！…』

腕を構えて防御するが、恐らく意味は無いだろう。次の瞬間、腕が

切り裂か

れた感覚が脳を直撃した。

「痛つ……くない…？」

腕を見ると、確かに攻撃を受けたはずなのに、腕はきみんとそこ

くつつい

ていて、しかも血はあるが、傷一つついていない。どうこうことだ？

「ロード、今攻撃受けたね。257ダメージもらつたよ。」

ダメージ?といふことは…

「もしかして今、俺の受けた攻撃つて…」

「全部ダメージ計算されてるよ。アイカムをつけてる間は、受けた外的外傷

は全部ダメージに計算されるから。」

そういうことか…ついに俺がゲームになつたか…なんだかもう、何が起きて

も驚かないつもりだつたが、流石にこれは驚いた。

「それじゃ、俺の残りHPは?」

「257喰らつて…2580だな。」

意外と俺のHP高いな…とは言つても…一応、殴り返してみたがザックの情報

によると、15ダメージ。素手でそのダメージなら結構すごいもんだが、相

手のHPは1400もあるらしいので蚊ほどのダメージ量だ。このままならHP

の減り方だけで見ると、圧倒的にこちらが不利だ。

『やっぱ逃げるしかないか?…』

そんなことを考えていたら

「そういうや魔法使えるよ。」

そういうことはもつと早く言つて欲しい…今までちまちまカウント一の要

領で殴つてた自分が馬鹿らしい…一旦、距離を置き

「赤き力よ…火の力よ!『ファイヤ』!」

そう、唱えて火球を手からリザードマンめがけて放つた。見事命中!つてそ

ういや、ファイヤだけ言つつもりだつたのに何故か最初の文まで勝手に唱え

てしまつた。なんでだ?

「最初の魔法詠唱は、必ず詠唱の台詞を言わないといけないから早めに全部

使つたがいいよ。ちなみに今のダメージは354だつたよ。」
そういうことか… とかまさか本当に魔法が使えるなんてな… 夢みたいだ

が、夢じやないから困る。とりあえず後、2、3発唱えたら倒せるか? そん

なことを考えながら、両手を構え

「青の力よ…水の力よ! 『ウォータ』! & 『ファイヤ』!」

そう言って、両手から別々の魔法を放つた。見事、両方命中。案外魔法つて

のは簡単なもんだ。そんなことを思つていたら予想以上に接近していたリザ

ーダーマンから反撃をもらつてしまつた。

『予想以上に気が抜けねえ…ザック達はいつつもこんな極限状態で戦つてん

のか…』

そう思つと、少しザックのことをすこしと思つた。少しだけな。

「黄の力よ…雷の力よ! 『サンダー』!」

今度は手から雷を飛ばして攻撃、よし! あと一息だ!

「とどめだ! 白の力よ…氷の力よ! 『アイス』!」

氷塊を手から放ち、見事リザーダーマンを倒した。

「よつしゃあ! 見たか! リザーダーマンめ!」

そこに倒れているリザーダーマンに向かつて高らかに言つた。

「ロード…何かあったのか?」

不思議そうに聞いてくるザック。まあ、そうだろうな…普通、俺はこんなこ

とは言わないからな…しかし…戦闘が終わつて氣付いたが、かなり息が切れ

ている。結構きついもんなんだな…

「ロード、初勝利で浮かれてるっこ失礼だけど、早めに回復しどいたが良い

よ、残りHPがかなり危ないから。」

「もしかして…息が切れてるのって…そのせいなのかな?」

「恐らくはね。俺は人間じやないから分かんないけど。」

一応、容姿は人間だろ…まあ、いつちばん最初に自分がゲームキャラである

ことは認めてたけども…まあいや、さっさと回復して帰ろう。

「兄貴、こんなとこでまた何してんの?」

「デジャヴか? デジャヴなのか? そこで何でまたお前が登場する!」

「拓也か…やつとリザードマンを…倒したんだよ…」

そう説明しながら倒れてるリザードマンを指差すが

「何? またやつてんの? もう演技はいいよ。」

と冷たくあしり。そこでちょっとイラッとした。

「お前…気付いてたんじゃねえのかよ!」

「何に?」

薄々気付いてくれてるもんだと思つてたんだけどな…信頼した俺が馬鹿だつ

たのか? いや…それが普通の反応か…俺がもつおかしいんだよな…

「このアイカムだよ…ゲームをプレイしてる間は…外せないんだ…

それと、

これのせいで色んな…魔物に襲われるようになつまつたんだよ。」
そう説明するが、俄かには信じ難いのか、まだ疑り深い目で見ていく。

「ロード、さつさと回復しなよ。どうなつても知らないよ。」

「ああ、分かつてゐつて。ちょっと待て…すぐ回復するから。」

ザックもザックで空気を読まないし…

「誰と話してゐるの? もしかして一人芝居?」

信用する気の無い正常な弟。あ、そうか! 回復魔法を使えばいいの

か!

「見てな、実際に魔法を使つてやるから。」

「そう言つと

「いいよ！恥ずかしい！いい年こいて厨一病？」

と必死に俺を止めようとする。そんなことはお構い無しに

「縁の力よ…森の力よ！《ヒール》！」

そう言つたとたんに、自分を美しい縁の光が囲み、体を癒してくれたのが分

かつた。流石に息切れも治つたな。

「え…嘘…今どうやつたの？」

流石にそんな現象を目の当たりにして動搖が隠せないでいる拓也。

「だから魔法だつて。ホントに使えちゃつたりするの。」

と少し面倒臭いがもう一度説明した。

「さ…流石に冗談だと思つてたよ…まさか本当に使えるなんて…す

ごいや…

結構びっくりした…」

久しぶりに拓也からほめられたせいで少し天狗になつた俺は

「もつと誉めな、大体こんなもん使える人間なんていないんだから。

」

と少し見栄を張つた。

「NASAに行つたら？多分、大注目されるよ。」

と、半ば本気の目で俺に話しかけてきた

「一度と帰つて来れなくなるよ。それにアイカムがなきや意味が無いしな。」

流石に人体解剖とかは御免なので正直にネタばらしした。その後は他愛の無い

い話をしながら家に帰り着いた。意外と激しく動き回つたにも関わらず、弁

当「名は無事生還していた。

「ほり、こつちお前の分。」

そう言つて拓也の好きな生姜焼き弁当を渡す。俺はカツ丼。崩れな

かつたの

が不思議だ……ちやつちやと食事を済ませ、部屋に戻つていた。そしてテレビ

ビを見ると、予想以上の速さで王国が復元されていた。リザードマン一族：

恐るべし……ほぼ全ての場所が元通りになつており、残りは城壁や石置だけになつていた。そしてザックを見るとブライとなにか話していた。

「ザック。何の話をしてんだ？」

「「ザック」ああ、戻つてたんだ。おかげり。それでえつと……そうそう！今、

ブライが一族に伝わるつていう剣技を教えてくれてたんだ。」

剣技：しかもリザードマン一族伝統の、か…そりや期待できそうだな…

「「ブライ」今ので全てだ。見事リザードマンに伝わる剣技、『地竜斬り』を

使ってみせよ。」

地竜斬り……やべつ……今までの中で、一番厨二臭くて強そうな技だ…

「「ザック」はああああああ…大地よ…我に力を…」

そう言つて力を溜めるザック。しかし、確かに俺には地面からの力がザック

に、剣に竜が天に昇るよつに滑り込んでいくのが見えた。そしてザックが剣

を腰の辺りで横に構え

「「ザック」地竜斬りい…！…ぜやああああ…！」

素早く剣を振り抜き、連續の刃を振るつた後、剣を地面に刺し、

「「ザック」はああああ…！」

そつ言つて剣を前に突き出すよつに引き抜くと、地面が盛り上がり、

衝撃波

が地面を割つて吹き出した。その衝撃波は、まるで地の奥底に眠つ

ていた竜

を呼び覚ましたかのよつに、竜の形をかたどり、天高く突き上げた。

「「ブライ」お見事。流石は私を倒した勇者だ。」

そう言つてザックの奥義習得を祝つてくれた。流石に伝統の技だけあつて、

かなり威力も高そうだ。

「「ザック」やつたよー一発で出来たーかつけー！地竜斬りかあホントにあ

りがとうブライ！」これからもどんどん使わせてもらひよー！」

そう言つてお礼を言つてはいるが、相当嬉しかつたのか、気に入ったのか、満

面の笑みを浮かべている。しかし、そろそろ俺のまづが時間がやばいな

「ザック、悪いが実践使用はまた明日だ。俺は今日はもう寝をせてもらひよー…

…あー…やっぱー…！」

「「ザック」どうしたんだ？」

完全に忘れていた！そつこいえばみんなを宿に置きつぱなしにして今まで行動

してたんだつたーしかもリザードマンの襲撃もあつたし、大丈夫なのか！？

流石に慌ててザックを宿屋に向かわせた、みんな…無事でいてくれよーーー！

「ロード&ナイト」

第19章 隠り…」

「宿屋」いらっしゃる……」

「ザックみんな！無事か！？生きてるか！？」

店主の主人の接客を聞くよりも早く、大声で呼びかけた。もちろん宿に泊まつ

てる人間も居たからかなり驚いていたが、慌てた様子のザックを見ると

「宿屋」どうかなさいましたか？」

流石に声をかけるわな…

「ザック」昨日、ここに俺の仲間を預けてたと思つんですけど、昨日の襲撃

の時は…グレイ達は…どに × % ! ? 「

落ち着け…なんて言つてるのか俺でも分からん…なんとか落ち着かせよ

うとするが…駄目だ…もつこつぱにいっぴで周りが見えてない。仕方ない

な…

「すみません。昨日…にグレイ、ヒッジ、リーサと一緒に一つのパー

ーの仲間を置いていったと思つたんですけど、リザードマンの襲撃を受けた時に彼らはどうなったか知りませんか？」

「いらっしゃー！店主の肩を揺するなー落ち着け！そんなことを思つたらそれ

を見ていた他の客が、ザックを店主から引き剥がし、大人しくさせ

るために

ホールドアップしてくれた。助かる…すると店主は

「店主」ハアハア…えつと…昨日のお客様でしたら昨日の夕方頃に各々店を

出て行きましたよ。なんでもザックには負けられないとか言いながら…

そういうことか…連絡があつた時点でみんな自分のキャラクを回収してたか…

良かつた…けどひつけ良くねえ…落ち着けザック…

それから數十分後…

「「ザック」なんだ…やつだったのか…良かつたあ…

やつひとつひとつと落ち着いたザックが冷静に話を聞いてくれて、皆の安否

が分かつて安堵していた。もう…いいよな…俺寝ても…

「それじゃ、ザック。今度こそセーブして寝るから。」

そう言ってセーブをし、ザックにおやすみと言つと普通に返事をしてくれた。

それじゃ、明日も早起をつとめよう。そう思い、電源を切りベッドに潜

り込んだ。そういえば…各々動き出したてことは…あいつらの家にゲーム

が届いたってことか…本当にひなつてるんだろうな…このゲーム

…今更考

えたところで何も変わらはないが、出所も不明、コントローラーの詳細も

不明、外箱や説明書、備品に至つては勝手に増えたり、書き直されたりして

るし…更には現実の世界に《ゲーム》をしている人間にしか見えない

『敵がエ

ンカウントしたり、魔法やら剣技が使えるようになつてしまつたり

るため

と、持つ

ているだけで自分の周りが滅茶苦茶になつていつてるのが分かる。

結局のと

「、このゲームの目的は一体なんなんだうな……今度、ザックに聞いてみる

か…といつか、ゲームキャラが自分で考えてモノを喋るつてのもおかしな」

とだが…あーもう…一考えたら考えただけ訳が分からなくなつて、く…ひつ

セと寝よう…そしてわっせとクリアしてしまおう。

『やういや…もし、俺がゲームをクリアしたら…ザックは…寝よう…』

もう…考えない方が良い…今の俺には結論を出すには早すぎた…どうせクリアすれば分かることだ…最後にそう思い、重たい臉をゆっくり閉じた。

「和輝…」『飯できたわよ…起きなさい…』

いつも通り母親の声がする。いつものようにそのままの声で起き、リビングへ向か

う。やはりいつも通り父親と拓也は既に朝食を食べている。

「おはよう。そんでいただきます。」

そう言つて席に着き朝食を摂る。一人からは朝の挨拶の返事、母親

からは朝

食を摂ることに対する返事が聞こえた。今日は昨日の罪滅ぼしなの

か、えら

く家にしては豪華な朝食だ。日本の心白飯に、何故か魚の塩焼き、

俺はそこ

まで魚に詳しくないからこれが何の魚だかは分からんが、とりあえず白身魚

である」とぐらりこな分かった。それとお浸し、煮物、卵焼き…など

など…家

でこんな愚まつた和風の朝食が出ることは滅多に無いからすべに分かつた。

いつもは飯と味噌汁とポテトサラダ、あと運がよければ美味しいそうなおかず

が出る。まあ、家の朝食のメニューなんて聞きたくもないか…しばらく飯を

食つていたら、いつも通り、というか家では朝食の時はニュースが定番なの

で嫌でもその速報を見なきゃならない。

「昨夜未明、○県在住の…」

覚えているだろ？…恐らく名前は分からなかつたが、昨日俺が埋葬してや

つた勇者のロードであつただろ？人間の惨殺死体が見つかつたというのだ。

怖いもんだな…その事件がではなく、俺がその状況に慣れてしまつたことに

対して、だ。いつも隣り合わせの死の恐怖。それはこの世を生きる生物なら

全てのものに対して言える言葉だ。だが、俺の中で何ががぶつ壊れたのか、

その二コースを見てもなんとも思わないじろりか、何故そんな雑魚にやられ

たのかといつも小馬鹿にした感情さえ湧いてしまつた。わざと終わらせない

とやばいかもな…俺が…

「…」

そつ言つていつもなら一番最後に食べ終わる俺が最初に食べ終わつた。理由

はさつきも言つたとおり、残りのみんなは二コースに釘付けになつ

てる。俺

は慣れてるからそのまま飯を食い続けた結果だ。一階に戻り、学校の支度をして一応、アイカムでザックに連絡を取る。きちんと返事が返ってきた。よ

し…一行くか…

「行つてきます。」

そう言つて出ようとしたら、

「気をつけてね…最近物騒だから…なにかあつたら大声で助けを呼ぶのよ。」

「分かってる。気をつけるから…それじゃ行つてきます。」

やつぱり心配になつたのだろう。だが、大声を出してもソイツから逃げるこ

とはできなからな…むしろ戦いにくくなる。気をつけるけどな。流石に通学路では出ないのか、それともただ運が良いだけなのか、魔物とは

遭遇していない。学校の校門にはいつも通り担任の姿、だが一いちに気付く

なり駆け寄つてきて耳元で小声で

「和輝和輝和輝…！何でお前の友達までつけてるんだ…！危ない代物なんだ

ろ…！？」

と言つてきた。あ、そんな解釈なのか…

「えつとですね…色々あつてつけなきやいけなくなつたんですよ。」

口からでまかせ。本当はあいつらが勝手につけただけとは口が裂けても言え

ない。なんとか理解…いや、無理やり納得したな…そんな無理をするなよ…

そのまま校門を過ぎると、珍しいことに真志の奴が前にいた。まだこつちに

は気付いてないし…久しぶりに驚かしてみるか…フフフ…
「よー！真志！何してんだー？」

そう言つて思いつきり真志の背中をとーんと押した。真志は数歩歩いた後止

まりこちらに振り返ると同時に

「だれだ…この俺を突き飛ばしたのは…」

そんな台詞を吐いた。

「あ、な、なんだ…和輝か…お、驚かすなよ…心臓止まつてもいいのか？」

次に喋つた言葉はいつも通りの真志だった…とりあえず…

「あ、ああわりいわりい。いつもやられてるからその仕返しに一

みたいな

感じだつたんだけどな。やりすぎたか？」

とりあえず話をあわせた。その後は他愛の無いいつも通りの話だけになつた。

教室につくとまあよく注目を集めること。このアイカム、目立ったい奴にく

れてやるつか？遅れて理沙、彼女も友達から質問攻めにあつていてる。猛は隣

のクラスのはずなのに、何故かうちのクラスに来ている。本人曰く、居場所

が無いそうな…しかし非情にも朝休みの終わりを告げるチャイム。

担任が入

つてきた。それから授業がいつも通り始まつた、が…

どう考へても朝の真志の様子はおかしい…一瞬、たつた一瞬だったが、真志

の姿が恐ろしく見えた。だが、その後、俺を見るなり元に戻つた。

一体なん

なんだ？あの変貌つぶりは…なにかあったのか？

だれだ…この『俺』を突き飛ばしたのは…

絶対にそんなことを言はずの無いあいつがそんな言葉を迷いなく放った。

しかし、それ以降真志にそんな兆候は現れなかつた。が、心配だな

…声をか

けてみるか…そう思い、放課後真志の姿を探すが、もう帰つたのか見当たら

なかつた。おかしい…何かがおかしい…本当に帰つたのか…？

『やつぱり、学校をもう一回探し回つてみるか…まだいるかもしないし…』

日はまだ傾いてないが、流石に疲れる…久しぶりにこんなに学校を歩き回つ

た…え？なんでアイカム使わないかつて？連絡が取れないんだ…後は…探し

てないのは…屋上か…まあ、いる訳ない…

ドゴオオオオオ…そんな爆音がすぐ上から聞こえた。上？一箇所しかない

な…！階段を駆け上がり、生徒立ち入り禁止の扉を開け、そこに広がる光景

を見た瞬間、俺は絶句した。

屋上のど真ん中から赤い炎と煙が立ち込めていた。しかもその炎の周りに煤

が付いて汚れていることを見ると、恐らく爆発でもしたのだろう。

「ひいい…！化け物だ！逃げる…！」

そう言つて煙の向こうからうちの学校では有名な不良が引け腰で走つてきた。

そいつを捕まえ、

「おい！ここで何があつたんだ…？」

そう聞いた。不良とはいつてもこんな状況だ。素直に何があつたか言つてくれた。

「あい、あいつが…いきなり炎を…わああ…離せ…逃げさせてくれえ…！」

おいおい…ほとんど錯乱状態じやないか……まさか…魔物…！？

いやそん

な筈は無い。アレは俺みたいなローラー＆ナイトプレイヤーにしか見えないん

だ。こいつはアイカムをつけてないし、それにそんなゲームをするような奴

にも見えない。じゃあ一体何だつてんだ！？

「おこおこ…わざとまでの威勢はどうしたんだよ…あ？俺をボコボコにする

口にする

んじゃなかつたのか？」

声…といふことは人間…でもちょっと待て…おかしくないか？…どうやつたら

普通の人間がこんなことできるんだよ…学校に爆発物でも持つてきたつて

言うのか…？そりや不良も腰抜かすつて…そんなことを思つているとだんだ

ん煙が晴れてきた…

「さつさとかかつてこいよ…ただの人間風情が…」

その声の主は…見覚えがある…いや…そんなはずはない…なんでお

前がここ

にいるんだよ…嘘だ…夢だ…！…頼む……醒めてくれ…そんなことを願つても

叶はずも無い…そこにはいる奴は俺もよく知つてる奴だ…でも…えて俺は

聞いた…そつでないと信じるため…

「真…志…？」

「ロード&ナイト」

第20章 心の奥底！

「和輝か？邪魔だ。そこを抜け。」

いやいやいや……おかしいって。何か悪い夢を見てるだけだ……頬を抓れば……い

たい……分かつてる……夢じゃないことぐら……

「どかねえ！真志！お前今何してるのか分かつてんのか！？」

不良を庇つように立ち塞がると、真志は

「分かつてんや、今までの仕返しだ。力も無いくせに俺に楯突いた罰だ。」

ああもう……何言つてるとか意味が分かんねえ……今にも泣きそうだ……

「何が罰だ！魔法をただの人間に使つてんじゃねえ……！」

「正義面してんじやねえよ……いくら和輝だろうが止めても無駄だ

……！」

やる気か……だが……

「何でそんなどしなきやなんないんだよ……」

恐らく、無駄な質問だ。

「お前には一生かかっても絶対に分かんねえよ……努力しなきや認められな

いのに、努力をすれば田の敵にされる奴の心なんて……！」

どういうことだ？……まさか……俺もお前を……苦しめてたのか……？

「炎の力よ燃え上がれ！《フレイム》……」

速攻で魔法を打つて来るか……躊躇なんてもんは無いな……！

「光の力よ！聖なる力よ！《リフレクト》！」

火炎が飛んでくるすんでのところで光の壁を作り上げた。そのまま

火炎は光

に弾かれ、そのまま真志に向かつて飛んでいった。やばい！

「真志！避ける！」

跳ね返しておいてなんだが当たってほしくない。しかし、リフレクトは必ず

魔法の詠唱者に跳ね返る呪文だ。嫌でも当たる。そのまま炎は真志を覆いつ

くすが、向こうもアイカムをつけているためダメージで計算されたようだ。

まあ、そこまで分かつてないと弾き返さないけどな……そんなことより！

「大丈夫か！？」

「人に弾き返しておいてその言い草か……やっぱむかつくなお前……流石に痛手にはなっていないようだが……火に油を注いだ状態だな。『魔法を人に向かつて打つ奴がいるかよ！？それにお前なら安全だろうが！』

とはいえ……流石にこのままじゃまずい……何とか止めないとな……

「真志、俺もリフレクトを張つたし、ここから動く気も無い。もう止めてくれないか？」

そんな言葉に対し、真志は

「なんだ、不良を助けて親友を翻るか？結局正義面したいだけじゃねえか！」

聞く耳を持たないどころか、悪くなる一方だ……それでも……！

「もう勝負はついてる！これ以上は無駄だろ！？もう止めろ！？」

そう言うと真志は、一つ大きな笑い声を上げ、

「アツハハハハハ……勘違いしてないか？俺が何もしないとでも？」

何故か余裕の表情だ。あいつには魔法しかない、体力も俺があるからもし殴

りかかるつて来たとしても、どうにかできる自信がある。何故だ？

「怒れる大地よ全てを碎け！《ブレイク》！！」

そう唱えると、真志の周りに石が現れ、俺目掛けて飛んできた。

「いつただろ！！魔法は無意味…」

その瞬間、弾かれる筈のその石の散弾は、リフレクトにぶつかると、リフレ

クトを碎き、一緒に消え去ってしまった。まさか！しまった…！

「相殺魔法…いや、魔法補助効果を消すための魔法ってのもあるんだぜ…そ

の舞い上がりきつたおつむによーく教えとくんだな…！裁きの雷撃
よ降り注

げ！『スパーク』…！

その途端、俺の真上から雷が真っ直ぐに俺へと落ちてきた。流石に
ダメージ

で計算されるといつても、痛みは伴う。全身をその雷撃の痛みが一
瞬で駆け

抜けた。普通なら意識不明の重態に陥るであろう雷撃を喰らうても
なお、意

識があるのは恐らくアイカムのおかげだ。

「ははははは…」これで魔法は弾けないぜ…ビリするんだ？正義
のヒーロ

ーさんよ…！『ファイヤ』…！

躊躇なく火球を飛ばしてきた。体を張つてその火球を止めたが…そ
うか…

お前は…止める気は無いか…だったら俺が助けてやんないとな…

「おい…なんか棒状の者持つて来い。」

後ろで小さくなっている不良にそういうと、素つ頓狂な声を上げた。

「ふえ！？棒？そんなもんでどうする気だよ…？」

「いいからさつさと持つて来い…！」

そう大声で怒鳴ると

「は、はい…！」

そう言つて引けた腰のまま、階段を全力疾走で降りていった。

「なんだ？逃がしたのか？勇者さんよ……！」

「まだそんな喋りかたしやがるか！－！」

「違ひ、お前を倒すための物を取りに行かせただけだ。」

「おうおう優しいねえヒーローは－－逆巻く水よ押し流せ－『アクア』－！」

今度は鉄砲水を呼び出して俺に攻撃してきた。流石に体力がもたねえ！

「『リフレクト』－！」

「利くかよ－！『ブレイク』－－『アイス』－－！」

一瞬でリフレクトを崩し、わざと氷塊で攻撃してきた。魔法の腕はあちらの方が上だ…

「『ヒール』－！」

「『フレイム』－！」

そんなやり取りが数分続き、やつと不良が帰ってきた。

「はあはあ…持つて来たぞ…鉄パイプしか見当たらなかつたけど…」

俺はそれをおもむろに奪い取り、

「遅い！さつさとここから離れろ！－！」

素早く真志に向き直し、その鉄パイプを剣のよつに構えた。

「なんだ？それでどうにかするつもりか？舐めやがつて！」

そう言つて魔法を打とどしたが、

「遅い！はああ－！」

それよりも早く踏み込み、二太刀浴びせた。

「舐めてたのはお前のほうだつたな…」

俺がそう言つとのと同時に、真志は崩れ落ちた…

「忘れてたよ…お前が剣技使いだつたつてこと…やつわと殺れよ…空を見上げながら真志がそんなことを言つて…」

「立て、そんでそこに真つ直ぐ立て。」

そう指示すると素直に従つた。はあ…炎を据えないとな…

「さあ、お望みどおりだ…さつさと殺しな－－！」

そんなことを言つ真志の脳天に一発、鉄パイプで剣道張りの面を見舞いし
た。

「あだだだだだ……この野郎！頭かち割る氣か……」
流石に効いたのか悶えている。

「当つたり前だ！これでも分からならホントにかち割つてやら
あ……」

そんなことを言つた途端、真志は…泣き出した…う、それはそれで
困る…と

りあえず…泣き止むまで待つか…

10分後

「なあ、和輝…何でこんなことになつたと思つよ…」
そんなこと聞かれても困るが…

「こんな力、アイカム外しや無くなつちまうんだよ。だけど、真志
はそれを

自分の力と思い込んだんだ。だからこんなことをやるつと思つたと
思うし、

それに…俺は真志じゃないから全部は分からぬけど…お前のこと
をきちん

とわかつてやつてなかつた俺も悪かつた。」
そう言つて謝ると

「もしかすると、心の何処かでそう思つてたのかもな…俺、ホント
はそんな

ことは言つともりはなかつたんだ…確かに和輝、お前ははつきり言
つて腹の

立つ奴だ。勉強してないくせに、しつかり点だけは取つて…でも、
分かつて

た…それがお前の才能だつて事も、そんな和輝が自分の才能をひけ
らかした

りしないことも…俺のほうにこそ悪かつた…」

なんだかんだ言つて……やっぱり真志はいい奴だな……俺の「」にも頼め、全てを

見直して自分が悪いなんていえる奴は、ほとんどいなこと思ひ。

「仲直りだ、もう絶対に魔物との戦闘以外で使うなよ?」

そう言つと、

「だな、たまにお前相手に試し打ちさせでもうつかどな。」

そんなことを言いながら夕日の眩しい屋上で一人で笑い合つていた

：

「ロード&ナイト」

第21章 ザックはレベルが上がった！

その後、あまり遅くならなければ家に帰った。もう真志の顔は雨が上がり

た様に晴れていた。真志は元に戻ったが、もし、あれが普通の人だったら…

もし、止めてくれるような人がいなかつたら…これは本当に恐ろしいものに

なりうる可能性を秘めているのか…気を付けないとな…

「ただいま。」

とまあ、いつも通り誰もいない家に帰宅したことを見せる。

「あら、おかえり。」

返事が返ってくるとは予想していなかつたため、かなり驚いたが、そこには

母親の姿があった。聞いたところによると、タイムセールがあったとかで、

いつもより早めに買い物に行っていたらしい。

「そんじや、自分の部屋に戻つてゐるから。」

そう言ってその場を立ち去ろうとしたその時、

「和輝、あなた私に隠し事してない？」

心臓が跳ね上がつたのが分かる。バレた…？いやいや…バレるはずがない。

一度たりともそんな素振りを見せたことも無いし、言つたことも無い。なら

何故…親の勘…か…仕方ないな、隠し通せることでもないし、正直に話そ

う。

「母さん、えっと…今から『』とは全部本当のことだから…心して聞いてくれよ…」

母親は小さく頷き、俺の話に耳を傾けた。俺もこの《ローデ&ナイト》が『』についてからのことと、全て包み隠さず話した。流石に信じれなによつて事ばかりだ。実際、俺も未だに信じれなこともあるぐらいだ。親は流石に信じれはづが無いと思つていてが、

「なるほどね。それじゃ、ちやつちやと終わらせなさい。」

まさかの返答だった。いやいや…失礼かもしれないが、まさか信用するとは思つていなかつた。

「母さん…今の話、本当に信用するの?」

あまりにもせりつと理解したため、一応聞いてみると

「自分の息子の『』とを信用できない親がどこの世界にいるのよ。分かつ

たらちつとそのへンチクリンなの取りなさい。」

小さく頷き、俺は無言で自分の部屋に向かつた。母親に背を向けてから俺はずつと、ずつと、涙をこらえて歩き、部屋に着いて号泣した。もちろん、

声を殺して。母親といつもがこれほどまでに偉大に感じたのは、生まれて

初めてかもしけない。尊敬する』とはあっても、それ以上の感情は湧かないはずだが、もうそんな感情の領域を振り切つていた。

それから15分

やつと泣き終り、ようやくゲームをつけることができた。

「「ザック」よおーーローデーおはよーーつてあれ? 泣いてんの?」
流石にやつかもまで泣いていたから、目が腫れていたようだ。という

か前から

疑問に思つていたんだが、何故、ここではテレビ画面から俺が見えるんだ?

カメラでもアイカムにつけてるのか? ああもつー考えても仕方が無い!

「「うわーーわざと先に進むぞ!」

そう言い放つと、流石に泣いていたことは察してつゝしまなくなつたが、

「「ザック」その前に、みんなに連絡しないとまた一人旅になるよ?」

なんと面倒なシステムなんだ…まあ当たり前か…みんなプレイヤーなんだ

から。仕方ない。

「みんなー。ゲームできる常態かー?」

全員に確認を取る。

「和輝か、こつちは問題ないぞ。」

「私も大丈夫よ。」

「よつしゃあーさつわとやうわゼー!」

一人だけ気合入つてんなあ…猛だけなーんか意気込みが違う気がするんだよ

な…まあいいや。

「ザック、みんな準備オッケーだ。」

そう言つと

「「ザック」了解、こつちは準備できるよ。」

そつ言われ、画面を見ると、ザックの周りにいつの間にかみんなが集まつて

いた。よーし…それじゃ、

「ゲーム…」

「「ザック」スタートだ！」

最近、気が合つようになつてきたな…俺も色々あつたが、ザックも色々やつ

てるみたいだからな…互いに成長してるので…

「「リーサ」あの…気のせいじやなかつたら、町中に魔物が溢れかえつてるん

ですけど…」

リーサがそんなことを言つ出した。確かに周りを見れば、そこひらじゅうにリ

ザードマン達がいる。まあ俺らは知つてるからなんとも無いが、知らなければ

やそんな反応になるだろつ。

「「ザック」えつとね…昨日の間にリザードマン達と仲良くなつたんだ。それ

でみんなもここに住んでるつてわけ。」

説明不足にも程がある。これじゃ云々るものも云々ならない。また、結局俺が

説明か…そう思つていたら、

「「ブライ」おおーザックか。精進しているか？」

ナイスタイミングだ！ブライ！この人？に直接説明してもらおう。

「「ブライ」…とこうわけだ。国王とザックには心から感謝している。」

ブライの説明のおかげで、皆納得したようだ。

「「ザック」ブライさん。ここから一番近くの国なら、トトツリ砂漠の王国だな。ますか？」

お、言葉が綺麗だ。雨でも降るかな…

「「ブライ」ここから一番近くの国なら、トトツリ砂漠の王国だな。

」

砂漠…これはまた…

「「グレイ」砂漠越えをするなら準備をしたほうがいい…」

「…そりいえば初めてグレイの声を聞いた。意外といい声だ。」

「「ヒッジ」準備なんて必要無いぜ！砂漠の魔物なんてこの俺様が
ちょちょい

のちょいだ！」

何故か恐ろしく自信満々のエッジ。よく見るとリーサも…どういう
ことだ？

「実は、猛と協力して昨日のうちにかなりレベルを上げておいたの。
」

「おい！理沙！そんな」としてる場合じゃないだろ！勉強しろよ！あ
あ…俺も

か…やっぱり言わないでおこう…

「「ヒッジ」俺もリーサももう、レベル38だ！すげえだろ…」

うん…流石だよ…集中してやりすぎだよ…レベル上げなんてしてな
い俺が馬

鹿に見えるわ…

「「リーサ」グレイさんは何レベルになつたんですか？」

「「グレイ」28だ…」

今更だが…こいつら平然とレベルを持ち出してきたな…人間味があ
るのに、

そういうとこだけゲーム内の人間だから困る。親近感を持つて接し
ていたら、

急に口ボットな所を見せつけられてまるで、崖まで一緒に海を見に行
つて、

そのまま後ろから突き落とす崖ドラのようだ…分かり難いって？大
丈夫だ…

俺もよくこの状況が分からん。

「「ヒッジ」だっせー！かつこつけてるくせに、全然レベル上がつ
てねえのか
よ…」

それが仲間に對して言つた言葉かよ……と言つた皆、元々集まつた時のレベ

ルは18、だから十分上がつてゐると思つんだが……ザックに至つては……

「「リーサ」あの、ザックさんは今何レベルですか?」

ほいきた。この町の「ザイザヤ」、正確には倒してない敵ばかりやらで全

然レベルが上がつていない。

「「ザック」19だよ。」

流石にその言葉には皆、驚いていた。まあ、当たり前か……一晩で1レベルし

か上がつてないからな……

「「グレイ」ならお言葉だが、技や魔法はどのくらい覚えたんだ?」

流石にムッとしたのか、少し強めの口調でエッジに聞き返していた。すると

エッジはにやけた顔のまま

「「エッジ」5つだよ。しかも結構使える技ばかりだ!」

と胸を張つて宣言していた。が

「「グレイ」俺は15だ、結局、やつていたのはレベル上げだけか

……

と鼻で笑いながら言つてゐる。何気にあこづら良いコンビになりそうだな……

「「エッジ」なんでそんなに覚えてるんだよ……」

流石に天狗になつた鼻を折られてびっくりしてゐる。

「あー、和輝か?なんかこいつらが勝手に話しだしたから俺が説明するよ。」

真志、ナイス!

「このゲーム、説明書読んで分かつたけど、どうやら主人公達はそれぞれ戦

いや、出会い、会話などで経験を積むと、技を覚えるみたいなんだ。つまり

ただレベルを上げても技を覚えるけど、色々経験させてやつたほうが技を覚えるみたいだ。」

あの説明書を読んだのか…ちなみに俺は前回、読んだと言つたが『**読んだ**』

だけだ、内容は重要そつのしかよく覚えていない。死にたくないだけだか

らな…前も言つたが、説明書は…活字は…大つ嫌いだ…

「「リーサ」…そうなんですか…それじゃ、ザックさんはどのくらい技を覚えたんですか？」

技…まず、グレイから基本四台魔法である、ファイヤ、アイス、サンダー、

ウォータを教えてもらつた、その後、アルラグナ戦直後にザックが四聖剣

『水』を覚え、さりに自分で連続突きの強化版、五月雨斬りを覚えて、洞窟

挑戦後に出会つたクラウドさんから中級魔法のフレイム、フリーズ、スペー

ク、アクアと中位魔法のウインンド、ロック、シード、メタル、を教えてもら

つてた、その後、ミランダと別れる際に、陣形の後方支援と技のヒットアウェイを教えてもらつてた、ブライから地竜斬り、リザード流剣技『**陽炎**』を

教えてもらつたらしく、さりに最後につきあつた、中位補助魔法のブレイクとアッシュドを教えてもらつていた…つづきつ…何個だ…？

「「ザック」…えっと…全部で19こだね。」

ザック…自分で言つてて馬鹿らしくならないか?エッジは20レベ

ル上げて

5こなのこ、お前は1レベルで19じだぞ？覚えすぞと囁つか、濃

厚な1レ

ベルを送るなよ…ホント」「うつといは人間味がありすぎる…

「リーサ」えつと…ザックさんのロードさん、エッジさんが氣絶しました。」

最悪のタイミングで、最悪の台詞を聞いたな…仕方ない。エッジが起きたら

トトツリ王國を手渡して出発だな。その前に、時間がもつたいたいから買い

物を済ませといつ。

「集合場所はエッジで、各自、必要な物を買っておいてくれ、分担

作業だ。」

そして、一旦解散した。エッジを置いて…

～ロード&ナイト～

第22章 砂漠の王国トトツコーー

「「ザック」熱い……熱……」

いきなりザックが大声で叫ぶのも無理はない。今、プライから説明してもら

つたトトツリ王国を目指して進んでいるのだが…

「「エッジ」なんで…見渡す限り砂漠なんだよ…ホントに王国なんてあんのかよ？」

既に30分程砂漠を彷徨ついている。いへり準備してきたとはいえ、

こう砂漠

を歩き回り続け、

「「リーサ」来ました！魔物です！」

ちょこちょこ襲い掛かつてくる魔物を相手にし続けるのは辛いだろう。ん？

俺は辛いわけないだろ。ゲームプレイしてるだけなんだから。

「「エッジ」もういいよ…一旦、田が落ちるまでじっとしようぜ！」

何気に、一番体力がありそうなエッジが最初に音を上げた。

「「グレイ」夜に砂漠で動くのは自殺行為だ…」

グレイも辛そうだが、キャラを保ちたいのか真っ直ぐ立っている。いやいや

変なところで意地を張るなよ…

「「ザック」夜の砂漠は恐ろしく冷える。動き回るなり田中しかな
いんだよ。」

「「エッジ」なんだよそれ…昼は灼熱地獄、夜は極寒地獄つて…や

つぱにこんな

ところに王国なんてあるわけが…」

そこまで言いかけたときに

「「リーサ」見てください！ありましたよ！」

あつたのか…ところがす「」にタイミングだな… そのやつと見えた王国に向か

つて歩き出した。数分後、やたらでかい城壁に包まれた巨大な王国にたどり

着いた。

「「ヒッジ」でけー… 一体何のためにこんなでかい城壁立てたんだ…？」もしか

すると… 戰争でもやつてんのか？」

戦争つて… 発想が怖いよ… せめて魔物の襲撃とかそういう喻えにしてくれよ。

「「兵士」」の城壁は砂嵐から建物を守るためですね。建物よりも高くないと

風に乗った砂が原因で建物の老朽化が早くなつてしまつんです。」

なるほど… 要するにこの城壁は砂漠の王国ならではってことか…

「「ヒッジ」」なあ、わざとこんな暑苦しいとい出よつぜっ…このま

まじや干物

になつちまう。」

さつきからお前、文句しか言つてないよつな氣が… えらべメンタル面の弱い

モンクだな…

「「ザック」」あの、すみません。この王国から一番近い王国は何処になります

か？」

「「兵士」」から一番近いの国は… オカサオ王国ですね。しかし、

今は向こ

う側には抜けられないんですよ。」

なんだ?確かにこ^ノは砂漠のど真ん中の国のはずだから、向こう側に抜け^ル

なんて簡単なことのはずな^ルこ^ノ…

「「ザック」なら…なんでわざわざこ^ノなとこ^ノに^ハ国を建てたんですか?」

うせなら、砂漠から少し離れた位置に建てた方^が…

確かにその通りだが…少し失礼な気がする…

「「? ? ?」それはこの王国が長い月日と共に砂漠に飲み込まれたからだ。」

誰だ? いきなり違う人物から話しかけられた。

「「リーサ」えつと…てことは元々この国は砂漠に建つていたわけではないと

いうことですか?」

「「? ? ?」そういう「う」とだ。」

へえ…そんなことが…つひこ^ノこ^ノは一体何者なんだ。えらべこ^ノの国のこと

詳しいから、この国の住人であることは分かるけど…

「「? ? ?」そして、聞くところによるとこの砂漠を抜けたいと、

そういうこ

とかな?」

抜けれるのか…というよりは抜け方を知つていい、と言つたまうがよさそ^ル

だな…

「「グレイ」その前に名前ぐら^イ名乗つたらどうだ…」

「「ゼス」俺の名はゼスだ。俺はこの砂漠の抜け方を知つてているが

ゼスと名乗つたその男性は、頭から足先までこの国独特と思われる

黒っぽい布でできた服を着て^ルいる。むしろアラビア系と言つた方が分かりやすいの

かな？そんな服装だが、顔は極力隠し、腰にはダガーらしきものを一本だけさしている。

「「グレイ」知ってるが、どうしたんだ？その先は…」

「「ゼス」そこには恐ろしい魔物が住んでいる。そこで交換条件だ。俺はそこまで案内する。そしてお前達はその魔物を倒す。どうだ？」

そういうことか…だつたら

「「ザック」引き受けん…要するに唯一の出口がそいつのせいを使えなくなつ

てるんだろう？だつたら見捨ててはいけないな！」

それぞれが自己紹介をし、改めてその場所と、この砂漠の成り立ちについて

教えてもらつた。

「「ゼス」この国は、元々平原に建つっていた王国だつた。が数年前から近くで

砂漠化が進み、今に至るわけだ。彼らはこの砂漠は別名無限砂漠と呼ばれて

いる。」

「「ザック」無限砂漠？」

「「ゼス」この砂漠は不思議なことに、入ることは出来ても出るこ

とが出来な

い。しかし、こんな蟻地獄のような砂漠でも、出る方法がある。」

「「グレイ」それがその抜け道だということか…」

なるほど…そして…

「「ザック」その唯一の出口をその魔物が陣取つていて…ならな

おさらだな

「よし！準備をしてすぐそこに向かおつ！」

その通りだな…！俺達がぐずぐずしてたら、先にも進めないし、この国で暮

らしてゐる人たちが困る期間が延びてしまつ。まだエッジがぶつぶつ言つて

いるが、無視して準備を整え出発した。流石にこの辺の土地に詳しい同行者

がいたため、目的の洞窟にはすぐに着いた。というか洞窟が多すぎやしない

か？まあ、今回は洞窟と言つよつては巨大な一枚岩同士の隙間と言つ感じだ。

「「エッジ」これまたでかいな……しかし……こんな狭い隙間の奥にホントにそ

んな厄介な魔物が棲んでるのか？」

確かに……こんな狭いところに多くの冒険者を退けた魔物がいるとは到底思え

ない。

「「ゼス」入り口は狭いが、中は開けている場所が何箇所もある。その一番最

後の場所にいる魔物……ヴァルバロアが今回の目的の魔物だ。そしてその奥が

お前達の目的地である出口だ。」

ヴァルバロア……なんだかようやく強敵と言える魔物の名前を聞いた気がする

な……なかなかどうしてそんな名前の魔物が登場しなかつたからな……

あ、決し

てプライのことを批判している訳ではない。どうも名前が人間じみてるから

つい……

「「ザック」よしー速攻で終わらせるぞ！」

全員から威勢のいい返事が帰ってきた。それを合図に砂漠の渓谷に入つてい

つた。しばらく進むとゼスが言つてゐた通り、開けた場所に出た。

そういう

場所には魔物が溜まるよう…

【アントウリオが現れた！】

「「ザック」一気にかたずけるぞ！」

アントウリオ…見た目はアリジゴクつてところだな…だつたら…「遠距離から攻めるぞ！スパークだ！」

予想通り動きも早くなく、遠距離からの魔法連射で簡単に倒せた。その後も同じ様な敵しか出なかつたからサクッと奥まで来れた。渓谷内だか

ら出てこれる敵に制限がある。見たいな感じなのかね…？

そして…遂にヴァルバロアのところに辿り着いた。見た目は蛇と蠍を足して

2で割つたような姿だが、でかい、めちゃくちゃでかい。ゆうに3メートル

は超えている。だが、怯んでいられないな！速攻で終わらせる！

「ごめんよ…ホントに速攻で終わつたよ…

「「ゼス」まさか…ここまで強いパーティに出会つとは…」

一応、補足しておぐが、ザックLV19、グレイLV28、エッジLV38、リー

サレLV38だ。ザックがレベル的には一番弱いはずなのだが…一番活躍してい

た…このゲームにおけるレベルという概念は一体なんなんだ？ちなみにゼスも戦闘に加わっていたが、LVは35、軽く見積もつても要する

にこのレベルが必要つてことなんだろう…多分…

まあいい！そんなことはおいといて…これで砂漠も抜けられだし、トトツリ

王国も救えた！一件落着かな？

「「ザック」それじゃ…ゼスもこれからがんばれよ…」

そういうつて別れようとしたが、

「「ゼス」待つてくれ。せめて国王からお礼を言わせて欲しい。」

国王つて…流石にそんなにのんびりする時間は…つて、あれ?今、

言わせて

欲しいって…

「「ゼス」すまなかつた。今まで黙つていたが、私がこの砂漠の王國の元国王、

ゼス・ブランフォーゼだ。心から礼を言つ。有り難う。」

こ…国王だったのか…流石に国王には見えない。いくらなんでも若すぎる…

恐らく、ザック達と同い年だ。その齡で国王とは…

「「ザック」そ…そ…うだつたんですか…しかし…なぜこんな危険を冒してまで

我々に同行したんですか?」

確かにそうだ。若さ故かもしれないが、いくらなんでも危険極まりない行動だ。

我々に同行したんですか?」

「「ゼス」今まで通りでいい。同い年なんだ。それに…我々砂漠の民は、代々暗殺者^{アサシン}の系譜だ。故に部外者に力を借りたがらない。俺はこのままでいいないとと思う。アサシンの力は伝えていかなければならぬいし、い

つまでも一つのことにこだわり続けていても将来的には何も変わらない。伝統を捨てずに、新たな知識や技能を取り込んでいくべきだと俺は思うんだ。

だからこそ、あえて俺は独断で動き、外の世界の人間の技量を見たかったの

だが…予想以上だったな…

やはり同じ年だったか…しかし、流石にそこは国王。ここまでたく

さんの」

とを考えているとはな……しかし、残念ながらここにはおひるい

程に強い

だけだ。勘違いしないように！

「「ザック」そうか……それじゃあ、じつせなら外の世界を見て回つたら？」

流石にその言葉は軽薄すぎる気が……

「「ゼス」やうした」とこりうだが……生憎、俺も国王だ。国民をほつたらかして

動き回るような軽薄な行動は行えない。いずれ國にも多くの旅人が来るだろ

うからそういう人たちから情報を得るよ。また会おう、ザック。」
そう言って右手を差し出してきた。お互にしっかりと握手をし、別れた。

革変を望む国王、ゼス。いずれまた会えるといいな……よし、こっちもさつとも世界を革変しちまおう！

「「ザック」よし、オカサオ王國を田指して、再出発だ！」

「「一同」おー！」

しかし……やつからHラジがぶつぶつひるむこな……もつ……そうして、砂漠を後にした。

「ロード&ナイト」

第23章 商いの国オカサオ！」

トトシリ王国を離れてそれほど経つていなかつたが、魔物などにもほとんびり出会わず、真っ直ぐオカサオ王国へ來ることが出来た。しかし、この国の中

一印象は…国と並ぶよりも大きな市場のような場所だ。所狭しと並ぶ店、店、店…そのほとんびりが食品や装飾品のよつた一般生活やおしゃれで使うよつたなものばかりだ。一応武器屋や道具屋もあるが、規模がそういう店と全然違う。宿屋に至つては…田に付くといひには見当たらぬ。もしかするともしれないな…

「「ザック」なんだか…店ばかりだな…」

「「エッジ」武器屋とかの品揃えは別に悪いわけじゃないぞ。」

そんな会話をしていたら、突然町の中央辺りからファンファーレが聞こえてきた。急いでそつちに向かうと。

「「？？？」レディースアーノドジョントルメイン…！本日、この瞬間をもつ

て、『ニュー・シレッ』がリニューアルオープンする。宝石が欲しい』婦

人も、おいしい食材が欲しいグルメたちも一度は立ち寄らないと損だ！それ

では「ゆっくリショッピングをお楽しみください。」

そう壇上にいた男が言つた途端、集まつていた人たちが流れになつて一気に

その「ヨー・シレッ」による建物に流れ込んでいった。あまりにもあつとい

う間の出来事だったので、ポカーンとその光景を眺めていたら

「「？」皆さんはショッピングをお楽しみにならないんですか？」

とその男が話しかけてきた。

「「ザック」えつと…私たちは魔王討伐に向かつてる途中なんで、消耗品とか

武器、あとは防具が買えたら助かります。それと…」」から一番近い国も…」

ザックがそう聞くなり

「「？」ああなんだ、勇者とその御一行か…装備ならその辺の店で適当に整えな。魔王城に近い国は」」からだとヤカトウキ王国だ。そんでさつたと

出でいきな。」

恐ろしいほどの対応の変わり方だ。

「「ザック」別になにもそんな言い方しなくて…」」

ザックが言い返そうとしたが

「「？」悪いが、この国はお前らのような勇者を喜ばせるような施設は存

在しない。」」の国は…オカサオは商売の国だ。宝石から食材、武器や骨董品

まで何でも揃つてる。しかし、勇者を優遇できるよつた懷は持ち合わせていないんでな。」」は貿易で栄えた国だ。分かつたらひとつとと出でこきな。」

言い方がきついが……そういうことか……全ての国が打倒魔王を掲げているわけではないのか……

「「ザック」せめて名前だけでも教えてください。」

「「ブリッツ」俺はブリッツ。一応、この国の国王で全ての商売を取り仕切つ

てる男だ。じゃあな、勇者御一行様。」

そう言つてこちらに背を向けたまま手を振りながら去つて行つた。

「「エッジ」なんだ？あいつ。ホントに国王なのか？ガラ悪いな。」

エッジ……悪いが今のお前の目つきもガラが悪い。そんなに睨む必要も無い。

しかし、遠くから声が聞こえる……

「「国民」大変だーーーまた盗賊が現れたーーー」

それを聞くなりブリッツは振り返り、その男のほうに向かつていた。それ

違いざまに、

「「ブリッツ」またか……まったく……やっぱり兵士の一人ぐらい雇うべきかね。」

そう呟いていた……ってことは……

「「エッジ」まさか兵士が一人もいないのかーーー？」

「「ブリッツ」そうだよ。十露盤は弾けるが、兵士を扱うのは慣れてないんだ

よ。お前らー速攻で商品をかき集めろー被害総額を最小限に抑えるんだ！南

商店街ゲートを封鎖して足止めしろ！それから……」

手馴れているのか、慌てている商人達に次々指示していく。

「「ザック」俺達がその盗賊、退治するぜ！」

そうだよなー勇者が困つてゐる人間を放つておくなんてしちゃいけないー。

「「ブリッツ」結構だ。さっさと魔王討伐に向かいな。」

あまりにもばつさりと切り捨てられた。

「「エッジ」なんだってんだ…こっちが手助けするって言ったのに

…

「「リーサ」どうしますか？流石にこのまま放つておくわけには…」

「「ザック」当たり前だ！なんて言われようが盗賊を迎撃つぞ。」

「「グレイ」裏目でなきやいいがな。」

一言余計だよ…ま、置いといて…迎撃準備だ！

少しの間、商人達が品物を運んでいたため騒がしかつたが、完全に撤退しき

ると恐ろしいほどに静まり返っていた。

「「ザック」なあ…ロード…」

ザックが急に喋りかけてきた。

「ん？どうかしたのか？」

「「ザック」いや…なんかさ…ただでさえ人間と魔物が争つてて、みんな今日

を生きるのも必死なのに、なんで人間が人間を襲つてるんだろうなつて、そ

う思つただけだ。」

こいつはこいつなりにいろいろ考えてるみたいだな…

「ザック、魔物にもいろんな考え方を持つてるやつがいるように、人間にもい

ろんな人間がいるってことだ。ザックみたいに他の人間に必死にされる人間

もいれば、自分さえ良ければいいって考えの人間もいるんだよ。」

「「ザック」だからって…」

「「グレイ」静かに…やつらが来たぞ…」

物陰に隠れて様子をうかがっていたら、門を壊して入ってきているのが見え

た。どこからどうみても盗賊だな…よし…こには…

「「エッジ」行くぞ…」

「ちょっと待て…ギリギリまで引き付けるんだ…」

盗賊たちも既に手馴れていいるのか、立ち並ぶ店舗を無視して真っ直ぐ門の方

へ向かってきていた。そのため思つていたよりも早く間合いが詰まつた。

「「ザック」今だ！」

その掛け声と共に一気に盗賊たちをなぎ払いだした。

「「盗賊」うわあ！？なんだこいつら…」

あまりに突然のことだつたようで、盗賊たちはかなりパニック状態に陥つて

いる。そんな盗賊達を一気になぎ払う。

「「盗賊」くそ…一旦撤退するぞ！帰つて姉御に報告だ！」

そう言つて一斉に引いていった。

「「盗賊」畜生！覚えてろよ！」

そう最後の一人がお決まりの捨て台詞を吐いて逃げていった。

「「商人」おお…盗賊達が引いていくぞ…」

「「商人」助かつたのか？」

気が付かなかつたが、いつの間にか商人達が顔を出しており、一部始終を見

ていたようだ。

「「ザック」皆さん、もう大丈夫です。盗賊は去つていきました。ザックがそういうと、商人たちの顔に喜びの色が見えた。一斉に駆け寄つて

きて、ザックにお礼を言つていた。が、

「「ブリツツ」礼は言わねえからな。助けるなんて一度も言つた覚えはないからな。」

そう言つてブリツツはどこに行つてしまつた。

「「グレイ」裏目に出たな。」

「「リーサ」いいんじやないですか？私たちが勝手にやつたことな

ので。」

確かにそつだな……しかし……気になるな……あの盗賊は、確かに姉御に報告する

と言っていた。といつては……また盗賊のボスは女性なのか……下手するとミ

ランダが戻つてゐるなんて可能性もあるな……

「「ザック」盗賊団のアジトに行いつ。」

とザックがいきなり切り出してきた。

「「ザック」ロードも気になつてたんでしょ？」

たすがにお前ならもう俺の考へてることとは分かるか……

「「エッジ」でもどこにあるんだ？その盗賊団のアジトは。」

「「ブリッツ」白蛇盗賊団のアジトならすぐ近くの崖に出来た横穴だ。」

声のする邊を見るといつこの間にかブリッツがそこにはいた。

「「ザック」情報ありがといります。」

「「ブリッツ」てめえらのためじやねえ。お前らが勝手に盗賊団を潰すつて言

つてゐるから利用させてもらうだけだ。」

そつ言つてまたどこかに消えてしまつた。なんか新手のシンデレだな……

「「ザック」……やれじや……さつと終わらせようか。」

一致団結して盗賊団のアジトに向かつた。

5分ほど歩いたところに、看板でも立つてそつながらに分かりやすいアジト

があつた。たすがにこんななんなら全員で力を合わせりや潰せるんじやないのかねえ……

「「ザック」とりあえず見張りは終わりつと。」

さらつと見張りを全員片付け、残すはいつも通りダンジョン攻略だけになつ

ていた。しかし、

「「ザック」予想以上に盗賊がいるな…以前より規模が大きい…」
ザックの言つ以前といふのはミランダの時の事だらう。その時の人
数と比べ

ると雲泥の差だ。さすがにこの人数全てと相手していたら、その姉
御と呼ば

れていた首領に辿り着く前にやられてしまう。

「「グレイ」帰るか？」
「「エッジ」誰が！…一人残らず倒してやらあ！」
「「リーサ」無理ですよ…いくらエッジさんが強くても…」
「「ザック」必要最小限の力で出来るだけ敵に出会わずに進もう。
そりいや…似たようなやり取りを前の洞窟でもやつてたなあ…」
「「エッジ」でこおおおい！…俺がまとめてぶつとばしてやらあ
！」

そつそつ…こんな感じで作戦がオジヤンになつたんだよ…つてバカ
アアア！

「「盗賊」誰だあいつは！？」
「「盗賊」構うな！ぶつ潰せ！」

一斉にエッジに向かつて駆けてくる盗賊たちを横から魔法を打ち込
んで止め

た。ザックが冷静に対処できるようになつたと思つたらこれがよ…
「「ザック」やるからには全力だ！全員潰す勢いで行くぞ！…」
「「？？」その必要はないわ。お前達、引くんだ。」
どこから声が聞こえる。しかしこの喋り方…恐らくボスだ…
「「エッジ」どこだ！どこにいる！」
「「？？」喚かないでおくれよ。ちゃんとあんたらの田の前にい
るよ。」

そつと言われ目の前を見ると、盗賊たちが左右にずれていく間から見
覚えのあ
る顔が現れた。

「「ザック」ミランダ！？何でまた盗賊に…」
ザックがそう聞くと、

「「？？？」ミランダ？なんであんたらが、わたしの妹の名前を知
つてるん
だい？」

い、妹！？確かに似てるっちゃ似てるが…少々似すぎな気が…

「「ザック」じゃ、じゃあ…あなたは？」

「「アマンダ」わたしはアマンダ。ミランダの双子の姉で、この白
蛇盗賊団の

ボスを務めてる。」

どおりで…似ているわけだ…

「「ザック」はあ～…そういうことか…姉妹揃ってなにしてるんだ
よ…アマン

ダ…！今すぐにこの盗賊団を解体するんだ！」

「「アマンダ」断る。と言つても聞きそうにないわね。だつたら方
法は一つ。

なんだか分かるわよね？」

この流れ…ですか、またですか…ホントに同じ性格だなあ…

「「ザック」一対一か…受けて立とう…！」

ロード&ナイト 第一十四章

「ロード&ナイト」

第24章 対決アマンダーそして……

ミランダの時然り、見た目で判断するのは危なそうだ……ザック……油断するな
よ……つと詰めのつと思つていたのだが……ザックがなんだか怒つている
ように見えたので、何も言わなかつたが……ビリしたんだ？

「アマンダ」威勢がいいね……そういうやつは私は嫌いじゃないよ
！」

そう言つて剣を構えるアマンダ。流石にもう中盤だらつから手強い
はずだ……

「アマンダ」私がただの盜賊の頭だと思つたら大間ち
そこまで言いかけていたのだが……ザックが一気にアマンダの懐に飛
び込み、

斬りかかつていた。つておいいい……それは不意打ちといつものだ
……

「アマンダ」ちょ、ちょっと待ちなさいよ……危ない危ない！
とか何とかいいながらきつちり剣撃を全て避けているあたりが中盤
だなあ……

「ザック」ゼリヤあああ！五月雨斬りい……
技を出し切ると共に、アマンダは一度距離を置いた。

「アマンダ」^{フレイム}流石ここまで来ただけはあるようだね……でもま
「ザック」……

聞く氣無し……なんかザックがいつもと全然様子が違うんだが……
「アマンダ」ぐつ……距離を取つた途端、魔法とはやるね……だつ
たらこっち

「もーくよーーー!!《フレイム》ーーー」

「「ザック」ーーー」

反応が早いーー何がそこまでザックを駆り立てるんだ?そしてアマンダの

放ったフレイムは見事弾き返され、アマンダに当たった。

「「アマンダ」いい反応ねーーー」

いや、早すぎる…俺は全く触っていないぞ…こいつが勝手に暴走してる…

「「アマンダ」だったら《リフレクト》ーーー」れであんたはわたしに魔法を…」

「「ザック」ブレイクーーー」

頼むから話を聞いてあげてーーーといふか、頼むから操作を俺に戻してくれよ

ーーーしかもブレイクもスパークも自分に畳えるのかよーーーそんなことを思つ

ていると、剣を上にかざし、落ちてきた落雷を剣で受け止めた…つてええ!

?

「「ザック」あんたは姉妹揃つてなにやつてんだよーーー」

そう言つて雷を帶びた剣で一気に斬りかかった。といつも…あんたが怒

つてた理由つて…そこか…

その雷を帶びた剣は、斬るたびに周囲に落雷を落とし、一瞬でアマンダを追

い詰めた。そしてさりに

「「ザック」ぜやああーーー!!《雨喰【神鷗】》ーーー」

技名を叫びながら最後の一太刀を浴びせ、さりに落雷で追撃。もちらん再起

不能なレベルのダメージだら、アマンダはさすがにその場から動かなくな

つた。とこりか…こいつしれつと新技使いやがつた…

まあ、そんなこんなで…

「「ザック」いいですか？アマンダさんの願望は一応オカサオ国王に伝えるん

で、もう一度と、一度と…「こんな」とはしないでくださいよー。」

今…一回言つたな…相当気にしてるのか…何故かは知らんが…

「「アマンダ」はいはい…わかつたよ…」

返事 자체はやる気が無かつたが、子分達を全員解散させ、素直にザック達に

付いてきたところを見ると、ミランダ同様根はいい奴なんだろう。

まあ、姉

妹だしな…だが…一つだけ前回と違う点があつた。それは…

「「ブリツツ」やなこつた。お断りだ。」

そう、こいつである。

「「ザック」なにもそんない方しなくても…」

ザックが反論するが

「「ブリツツ」言つとくがな、俺は一口も助けてくれなんていつた覚えはない

し、その…アマンダだつたか？そいつの仕事を斡旋するなんて約束した覚え

もない！分かつたか？」

かなり強い口調で言い返してきた。まあ、実際問題こつちが勝手にやつたこ

とだし…

「「ザック」それでも助けたのは事実だ…ですよ…」

ザックも大分大人になつたな…よく耐えた。

「「ブリツツ」まあいいだらつ。百歩、いや千歩譲つてそのことに

関しては感

謝しよう。だが…なーぜ今まで商売の邪魔をしてた相手をよりも
よつてこ

の俺が助けにやあならんのだ！！

流石に相手は大人、サッケよりも現実を見た返答だな……

「さあ、タリさんたこでモソ二度としないで……」

「「ブリッジ」の第一ギター

らな。
」

酷い条件だな……そしてサッケ！流石に劍は下ろせ！――

ナニタリテシ

「グリシソ」ドン／＼ミル＼サは

「ザツク」これで

「ブリッツ死んでもやだあ」

酷つでえ大人だ…ザツクウウウ！！剣は下ろしてくれええ！！

「ブリツ」だいたいがそんな口約束を信用できるかよ。そんな

もじなし

卷之三

「ザック」じゃあどうすれば…

ザックが必死に耐えながら聞き直すと

「ブリッツ」そんなにそいつが大事だつてんなら交換条件だ。

「サシタ」交換条件？

「グリソノーの國の國王が、我國支那に
いたいがんが無くなるが、

ておはな、そ

したら、そいつの……船乗りだったか？その夢叶えてやるよ。」

予想していたよりも意外と普通の交換条件だつたな……

「ザック」それなら！俺達が…

「スコット」黒鹿 誰かお前みたしたケツの青いカギに教わるか

つてんだ。

しつかりとした兵士なり、魔法使いなり、田舎い戦士なりを連れてくるんだ

な。じゃ、期待しないで待つてるぜ。」

ザッククウウウ！劍を下ろせえええ！みんななんとかしてザックを止める

おおお…

やつとザックが落ち着いた…

「「ザック」ふしぎけんな…」この腐れ国王…お前何様のつもりなんだよ！

！いい加減にしろよ…

いや、遂にブチ切れた。

「「ブリツツ」喚いてんじゃねえ…糞ガキが…いいか？お前さん達は勇者

御一行だらうがよ…そいつらがこんなとこで油売るつもりか？それが人助け

つてんならどうぞ勝手にやりやあいい…だがな、いつまでそうして教えて

から魔王を倒しに行くつもりだ？爺いになつてからか？それまでに世界が滅

ぼされないように願いながら、たかが小国一つのために体張りな。

お前が思

つてるほど世界は甘くないし、時間は待つちやくれやしないんだよ

！…お前

が、お前らが本当に成し遂げなきやいけないことは一人の人間や一つの国を

救うことじやなくて、『世界を救う』ことなんだよ…いいか…！

分かった

ならさつとつまでもここで戦闘の指南を出来る人材を連れてくるんだな

！…それが嫌なら勝手にしやがれ…！

そこまで言い切ると、一切にせりに振り返らずに街中へ消えてしまった。流

石にザックにも今の言葉は堪えたようだ。真剣に考え込んでいる。
「「ザック」……なあ……ロード……俺って……間違ってるのかな……?
そいつは……難しい質問を……

「答えるとすれば……間違つていない。かな?」

「「ザック」なら!……」

「だけど、ブリッヂも言つてた通り、綺麗事だけで生きていけるほど世の中

は甘くはないってことさ……だからって信念を曲げる必要はない。俺の言いた

いこと、分かるよな……?」

「「ザック」それでも……俺は助けたい!困つてる人を見捨ててまで魔王に急い

で挑みに行く意味は俺には無いと思つ!」

さすがだな……ザック……それでこそ真の勇者だ……

「じゃあさつさと行動しないと、な?」

ザックは無言で頷き、仲間と一緒に考え出した……とは言つたものの……

「「リーサ」ザックさん、あてはあるんですか?」

「「ザック」それがないんだよな……どうするか……」

確かにそうだ。今まで会つてきた人達の中に、剣の腕が立つ一般的剣士はない。

「「エッジ」そういうや、あのブライつてやつは駄目なのか?」

エッジが閃いてくれたが……

「「ザック」ブライは確かに俺に剣技を教えてくれた人だけど、それと同時に

一族を率いる長でもあるんだ。流石に長いこと離れるわけにはいかないから

な……ブライは無理だ。」

確かに…彼では条件が一致しない。

「「リーサ」グレイさんは心当たりは…」

「「グレイ」ないな。適当にしゃべり込んで見繕えばいいだろ。じゃな
きや諦める

か、だ。」

「「ザック」仕方がない…探すしかないだろ…」

ザックがそう言い、歩き出そうとした先から…

「「？？」はははは…また困ってるみたいだね。」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。というか、この喋り方は…

「「ザック」クラウドさん！砂漠は抜けられたんですね！」

「「クラウド」砂漠をひたすら歩き回ってたね…そしてやっと渓谷
みたいな場

所にいた魔物を倒して抜けたんだよ。」

そういうや…先に出雲さんたちが出発してたな…ん？おかしくない
か？先に

抜けてたにしろ、後から抜けたにしろ、何故魔物と戦っているんだ？

「出雲さん、戦つた魔物ってどんな姿でした？」

「「出雲」ガアルバロアという魔物だったね。蛇のような蠍のよう
な…なんと

も言えない不思議な魔物だったのも覚えてるよ。」

おかしい…完全に矛盾している…嫌な予感がするな…

「「クラウド」といひで、今何を相談していたんですか？」

「「出雲」我々でどうにかできる」となら協力をせてもうりよ。」

渡りに船…いや、藁にも縋る思い、かな？兎にも角にも聞く価値は
ある。

「「クラウド」なるほど…やうこいつ…ですか…」

「「ザック」心当たりはありますか？」

「「クラウド」一つだけありますよ。」

おおー…心待ちにしていた言葉だ！

「「ザック」それは…？」

「「クラウド」砂の民ですよ。彼らは代々、アサシンの系譜だと言つていたじやないですか。」

「「ザック」つまり…彼らに協力してもらひ…そういうことですね！」

確かに悪くない案だ。

「「グレイ」そう上手くこぐものでもないぞ。」

また余計な一言を…

「「グレイ」先祖代々引き継いできた伝統に近いジョブだ、そう簡単に教えるはずがない。」

なんだか…珍しく批判ではなくまともな意見を…

「「クラウド」なるほど…でも、試さずに諦めるのはどうかと…」

「「グレイ」悪いがそいつは期待できない。やつこう一族続いてのものになる

と、みな閉鎖的になるものだ。」

「「ザック」なんか詳しいな…」

「「グレイ」そういうものだ、というだけだ。」

まあ、確かにそうだ。実際ゲームじゃなくとも山奥の村などは閉鎖的だし、

伝統の技というものを簡単に教えたりはしないからな…

「「グレイ」仮に教えてくれるとしても、向こうひとつでは見返りが無い。動

こうと思つものは少ないだり。」

見返りか…見返り、見返り？あ！

「「ザック」それなら…一どうにかかるかもしれない…！」

「「グレイ」どうこう」とだ？」

「「ザック」つまり…」

その後…

「「ザック」」「うこうう」となんだが…いけそつか？」

「グレイ」確かに…悪くはない…賭けてみてもいいだろつた…
全員が賛成し、早速トトソリに向かおうとしたその時、

「…？」待ちな！

物陰から誰かが声をかけてきた。

「ザック」誰だ！？

素早く剣を抜くが…その必要は無かつた。

「ブリツツ」その話が本当なら俺を連れていいな。

出てきたのはブリツツ、ていうかお前何時からそこへいた…！

「ザック」どうこう風の吹き回しだ…？

何気にザックも根に持つほうなのか…

「ブリツツ」なーに、ただ確実に俺の力が必要になるだろつって話だ。

説明しないところをみると…聞かない方がよさそうだな…

「ザック」どうこう意味だ！？

ああ、そういうところはまだ子供なのね…ザック、察してやれよ。

「ブリツツ」お子様に話すことはねえよ。どうするかだ、お前らだけで行つ

て追い返されるか、俺を連れて行くかだ。

ザックは少しムツとした顔で

「ザック」連れて行くのは構わないが、流石に護衛をしながらじや戦えない

ぞ？

と聞き返した。小さな抵抗を見せるな…

「ブリツツ」確かに俺は戦闘に専してはからつきしだ。だが、こいつなら使えるぜ。

そういうつてを見せたものは…銃？なのか？

銃身は丁度腕よりも少し長いくらい、ポンプする部分も、マガジンも見えない…これどんな銃なんだ？

「「ザック」それは？」

「「ブリツツ」ここから少し南に下った場所にこの大陸とは海で隔たれた大き

な島がある。俺は商人だからこうなんとかから商品になりそうなものを集め

ているが、その中でその島に住む《プロネジア》という種族が作っている、

機械といわれる代物だ。その中の武器として使うものがこの銃だ。どうやら

これは俺に合っているようなんですね。かなり使いこなせるぜ。」

「へえ、メ力に強いのか…というよりやつぱりこの世界には機械が普通には存在しないのか…

「「ザック」そうか…なら話は別だ、戦えるんなら護衛はしないぜ。」

地味い、にめんどくさい性格だな…

「「ブリツツ」そうかい、そんじゃお前らで好きに…」

「「ザック」戦えるんならあんたもただ護衛されるだけの客人じゃなくて、仲間だからな？」

あらま、何気に大人になつてゐる…

「「ブリツツ」フツ…ガキンチョのくせに言つてくれるじゃねえか。いいだろ

う、俺の背中は任せたからな。」

「「クラウド」どうやら話はまとまつたみたいだね。」

そこであなたがまとめるのね…

「「クラウド」今回は僕も同行させてもらひつよ。」

なかなかに賑やかになつたな…6人か…

決まったのなら早く行つたほうがいいな。

「「ザック」それじゃ、改めてトトツリ王国を目指して…」

「[一回]出発」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9284u/>

ロード&ナイト

2011年11月5日09時24分発行